後田堂ノ前遺跡

うしろだどうのまえいせき

―コメリH&G藤井店建設に伴う発掘調査報告書―

2009年3月

韮崎市教育委員会
株式会社コメリ
(財)山梨文化財研究所

うしろだどうのまえいせき

後田堂ノ前遺跡

—コメリ H&G 藤井店建設に伴う発掘調査報告書—

2009 年 3 月

韮崎市教育委員会
株式会社コメリ
(財)山梨文化財研究所

例　　言

1　本書は山梨県韮崎市藤井町北下条262-1番地ほか所在の後田堂ノ前遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査はコメリH&G藤井店の建設に伴い、財団法人山梨文化財研究所が実施した。

3　第6表石器類観察表の石質については、財団法人山梨文化財研究所地質研究室　河西学氏の同定による。また第4章の自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社　松元美由紀・高橋敦氏による。そのほか本書の原稿執筆・編集は櫛原功一が行った。

4　鉄器の保存処理は、財団法人山梨文化財研究所保存処理室が実施した。

5　発掘調査における基準点測量は株式会社テクノプラニングが実施した。

6　本書に関わる出土品、記録類は韮崎市教育委員会で保管している。

7　発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。

韮崎市教育委員会・山下孝司・閏間俊明、株式会社コメリ・下路正展、パイロット測量設計株式会社・小山田浩、株式会社テクノプラニング・森谷忠・柴田直樹、山梨県埋蔵文化財センター・石神孝子、山梨県立博物館・中山誠二、パリノ・サーヴェイ株式会社・千葉博俊、財団法人山梨文化財研究所・鈴木稔・河西学・畑大介・宮澤公雄・平野修

凡　　例

1　遺跡全体図におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。

2　遺構および遺物の縮尺は次のとおり。

竪　穴	1：60
炉・竈	1：30
土坑・ピット	1：30
その他のピット	1：100
土器・石器	1：3
大形石器	1：4
石鏃ほか小形石器	2：3

3　本書遺構図は「遺構くん」による測量図を作図ソフトにて編集した。

4　土器断面黒塗りは須恵器、ドットは灰釉陶器、土器内外面の濃いドット網掛けは黒彩土器（黒色）土器、薄いドット網掛けは赤彩土器を示す。また遺構図中のドット網掛けは焼土範囲、縞状の網掛けは礫層露出面、断面図斜線は礫断面を示す。

5　遺構平面図・断面図中の遺物を示す記号の種別は次のとおり。

▲　土師器　　■　須恵器・陶磁器
●　縄文・弥生土器　　□　土製品
△　石器　　○　金属製品

6　土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を使用した。

7　平面図の遺物番号、遺物写真図版番号、遺物観察表番号は一致する。

8　本書図1は国土地理院発行の1/50,000韮崎、図2は韮崎市役所発行の1/2,500韮崎市管内図21を使用した。

9　参考文献は第5章文末にまとめた。

本文目次

第1章　経過 …… 1
　第1節　調査の経過 …… 1
　第2節　発掘作業の経過 …… 1
　第3節　整理等作業の経過 …… 3
第2章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 3
第3章　調査の方法と成果 …… 4
　第1節　調査の方法 …… 4
　第2節　層序 …… 4
　第3節　遺構 …… 5
　第4節　遺物 …… 10
第4章　自然科学分析 …… 12
　第1節　試料 …… 12
　第2節　分析方法 …… 12
　第3節　結果 …… 12
　第4節　考察 …… 14
第5章　総括 …… 16
　第1節　遺構の変遷 …… 16
　第2節　藤井平の縄文時代集落の変遷 …… 17
　第3節　3号集石の分析 …… 18
報告書抄録
奥付

第１章　経　過

第１節　調査の経過

後田堂ノ前遺跡は韮崎市の市街地北方、韮崎市文化ホール東側に位置する縄文時代から古代の集落遺跡である。周辺には後田、堂の前、後田堂ノ前、坂井堂ノ前等の遺跡が点在し、これまでに県営圃場整備事業、道路拡幅工事、建物建設工事などに伴って各地点で遺跡調査が実施されてきた。今回、本調査を実施した韮崎市藤井町北下条262-1ほか地点では、平成13年、開発計画に伴う試掘調査が韮崎市教育委員会（以下、市教委）によって行われ、数か所の地点でトレンチ調査が実施されている。その結果、弥生土器、土師器を主とする土器片が出土し、弥生時代から平安時代の集落遺跡の存在が推測されたが、諸事情により開発には至らなかった。平成19年、ホームセンターの株式会社コメリ（以下、コメリ）がH&G（ハード＆グリーン）の店舗を新設することになり、市教委とコメリとの協議により、本調査を財団法人山梨文化財研究所（以下、研究所）に委託実施することとなった。コメリと市教委との協議の結果、調査は建物基礎部分、貯水タンク、灯油タンク設置地点、外構工事に関わる地点、出入口工事に伴う掘削地点のみ限定的に行うこととし、工事の影響のない部分については調査せず、遺跡を埋設保存することとした。調査面積は開発面積、約3500㎡のうちの18%、635㎡で、幅1.2ｍの溝状に調査することとなった。

第２節　発掘作業の経過

平成19年11月７日に調査に関する打ち合わせを現地で行った。11月14日より重機による表土剥ぎを実施、12月になって作業に本格的に着手した。建設工期との調整で、12月10日には起工式が行われ、その後、建設工事と並行する形で調査を実施した。そのため、工事業者との協議を随時行い、優先的に調査すべき地点を先に調査し、市教委立ち会いにより部分的な調査完了状況確認ののち、順次工事側へ明け渡していった。調査終盤の１月中旬になって調査区北東隅（３号トレンチ）で縄文後期の遺物包含層が見つかり、土坑から多数の土器が出土したことから取り上げなどに時間を要し、最終的には１月31日に調査を終了した。以下、調査日誌の抜粋である。

【調査日誌】

平成19(2007)年11月７日㈯　現場にて打ち合わせ。
11月14日㈬　調査予定範囲をテープで表示し、重機による表土剥ぎ開始。
11月15日㈭　表土剥ぎ。
11月16日㈮　表土剥ぎ。歩道に面した調査区境にトラロープを張る。
11月17日㈯　重機稼働。
11月18日㈰　重機稼働。
11月19日㈪　プレハブ設置。重機は本日にて終了。基準杭打設。
11月20日㈫　道具類搬入。
12月６日㈭　遺構確認。竪穴の調査に着手。
12月７日㈮　３号竪穴調査。
12月10日㈪　起工式。協議。
12月12日㈬　1･2号竪穴、1～3号土坑など調査。敷石検出。
12月14日㈮　1～4号竪穴、3号土坑など調査。業者と打ち合わせ。
12月17日㈪　12・15号トレンチ、1号竪穴調査。
12月18日㈫　2・12・13号トレンチ、1・4号竪穴調査。
12月19日㈬　1・2・16～19号トレンチ調査。
12月20日㈭　4･8号竪穴、1･2･10･14･16号トレンチ内調査。
12月21日㈮　2・7～9号竪穴調査。
12月25日㈫　8・9号竪穴、6号土坑調査。
12月26日㈬　6・7・12号竪穴調査。
12月27日㈭　1・5～7号竪穴、1号集石、4号土坑調査。
平成20(2008)年１月７日㈪　15号トレンチ内遺物上げ、実測など。
１月８日㈫　1～3・5・8・14・15号竪穴調査。
１月９日㈬　4・8・13～16号竪穴調査。8号竪穴で炉体土器検出。
１月10日㈭　１号竪穴掘り方、8号竪穴調査。業者と協議。
１月11日㈮　１号竪穴床下調査。ピット検出。4・8号竪穴調査。
１月12日㈯　業者と協議。
１月16日㈬　３号トレンチ内掘り下げ。
１月17日㈭　３号トレンチ内掘り下げ。10号竪穴、10号土坑調査。
１月18日㈮　３号トレンチ掘り下げ。縄文後期土器片多量出土。
１月21日㈪　２号谷付近調査。
１月22日㈫　業者と打ち合わせ。
１月24日㈭　17号竪穴（床面のみ）、3・4号溝調査。
１月25日㈮　18・19号竪穴調査。シートなどの片づけ。
１月26日㈯　18・19号竪穴、11号土坑調査。
１月28日㈪　10・18・19号竪穴調査。器材一部撤収開始。
１月29日㈫　18・19号竪穴、11・13号土坑調査。
１月30日㈬　10・16・18・19号竪穴、11・13号土坑調査。
１月31日㈭　13号土坑および周辺調査。本日で作業終了。

【調査参加者】（順不同、敬称略）

原島進・宮川昌蔵・深澤友子・鈴木節夫・大柴欣子・萩原忠・坂本行臣・小沢正臣・伊井實・秋山高之助・藤原五月・長谷川規愛・窪田信一

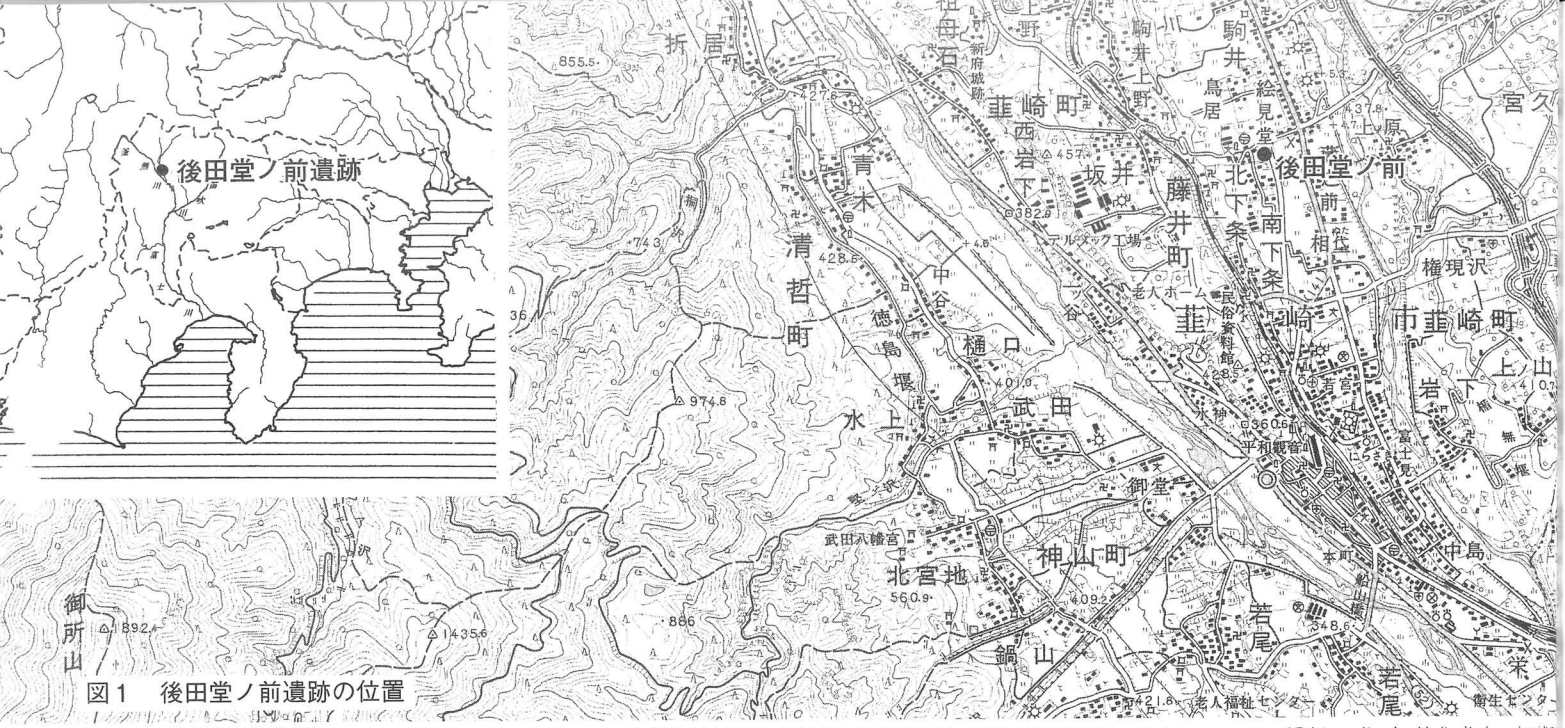


図1　後田堂ノ前遺跡の位置

図2　周辺の遺跡

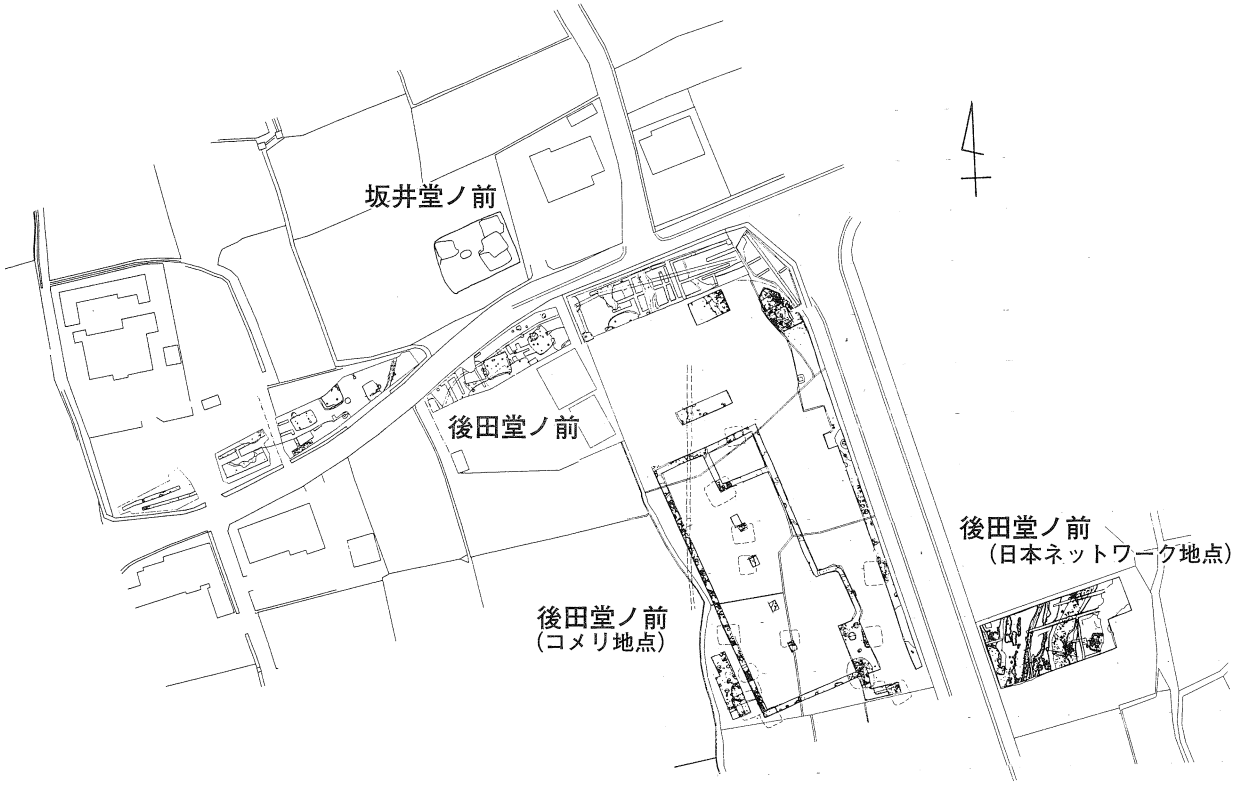


図３　周辺遺跡の調査状況

第３節　整理等作業の経過

整理作業は平成20年４月より山梨文化財研究所整理室で行った。出土遺物に関しては遺物洗浄、注記、接合、復元、実測、トレース、版組みという工程で作業を行い、遺構については「遺構くん」で記録した遺構図、遺物出土地点などを合成、編集した。

【整理参加者・整理関係者】（順不同、敬称略）
矢房静江・竜沢みち子・小澤惠津子・田中真紀美・岩崎満佐子・須田泰美・西海真紀・角屋さえ子・小林典子・小林祐子・斉藤ひろみ・手塚由美・梶原薫・広瀬悦子・原野ゆかり・藤井多恵子・柳本千恵子・林紀子・横田杏子・古郡明・望月秀和

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

後田堂ノ前遺跡は、韮崎市藤井平の塩川左岸に開けた低位段丘面の微高地上にあり、標高378ｍを測る。周囲の現況は水田および住宅地帯で、調査区東脇には国道141号線のバイパスとして開設された市道藤井９号線が南北に通過する。

本遺跡が所在する藤井平の低位段丘面は、釜無川支流、七里岩台地東側を南流する塩川の蛇行により形成された地形である。南北に細長く紡錘形を呈した微高地と微凹地が連続した微地形となっているが、古代以来、中近世の水田耕作によってそうした地形の多くは、水田で覆われて平坦化している。

遺跡の西側は、八ヶ岳泥流が流下、塩川・釜無川によって浸食を受けて形成された細長い七里岩台地の崖線が視界を遮り、北側には長い裾野を引いた八ヶ岳を見ることができる。また東側は、茅ヶ岳山麓が塩川により浸食されてできた崖線が南北にのび、南側は甲府盆地に向かって開けた地形となり、御坂山地と富士山を遠望できる。

第２節　歴史的環境

本遺跡が所在する藤井平は、古くから米どころとして知られ、「藤井五千石」と称された穀倉地帯である。近年の圃場整備が実施されるまでは、水田の地割が方眼のように区画された条里型地割を良好に残す地域であった。平成元・２年には、北側500ｍにある韮崎市立北東小学校の校舎建設の際、「宮ノ前遺跡」が調査された。300軒以上の古代の竪穴住居、多数の掘立柱建物跡が検出され、藤井平の中心的な大集落、かつ役所的な性格を合わせもつ集落と判明した。墨書土器に

は多数の「宅」があり、3間×4間総柱の掘立柱建物などが遺跡の性格を物語っている。また調査区南面の一角には、平安時代の水田に加え、弥生前期後葉と推定される水田が見つかり、東日本でも最古級の水田遺構として著名となった。このように、藤井平地域ではいち早く水田耕作が始まり、以後連綿と水田耕作が行われており、甲斐における水田稲作の展開を考えるうえで、考古学的に重要な地域といえる。そのほか今回の調査区に隣接する北側では、1996年に文化ホール前通りの拡幅工事で調査が実施され、古墳時代の竪穴などが見つかったほか（「後田堂ノ前遺跡」）、周辺で発掘調査された遺跡として、東側の国道沿いの「上横屋遺跡」（しまむら地点）、北側に「堂の前遺跡」、「坂井堂ノ前遺跡」（藤井郵便局地点）、「三宮地遺跡」（韮崎市文化ホール西側）、南側では「後田第2遺跡」（JA梨北藤井支所地点）があり、多数の報告書が刊行されている。このように一帯では、弥生～奈良・平安時代にかけての集落遺跡が濃密な広がりをみせる。また縄文時代では「後田遺跡」に小形ながら環状配石が見つかり、縄文後期の仮面土偶の優品が出土するなど、縄文時代遺跡の宝庫としても見過ごせない。調査区北側に通過する東西の道は、中・近世の長野県佐久地方と甲州を結ぶ信州往還に相当し、今日の国道が設置される以前の古くからの主要道路であった。近年では圃場整備、市道新設によって水田地帯が宅地化され、新興住宅街として変貌し、水田地帯の広がる農村風景から市街区としての景観へと変化を遂げつつある。

第3章　調査の方法と成果

第1節　調査の方法

発掘調査にあたっては、まず工事設計図上から調査範囲を設定し、重機により遺構確認面もしくは遺物包含層まで表土剥ぎを行った。鋤簾による遺構確認ののち、竪穴、溝、土坑などの個々の遺構についてセクションベルトを設定し、遺物を残しながら掘り下げた。遺構実測にあたっては、測量のための基準杭を数か所に打設し、国家座標を付け、パソコンを接続した光波測量機（トータルステーション）で遺物の取り上げ、遺構実測を実施した。なおパソコンのソフト（図化システム）はアイシン精機「遺構くん」である。写真についてはデジタルカメラを主として用い、調査状況、途中経過、完掘状況など適宜写真撮影を行った。

調査区内では基礎部分および道路歩道に沿ってトレンチ状に調査区を設定し、また建物内部の独立基礎、浸透桝、灯油タンク埋設位置には壺掘り状のトレンチを設定、1～19号トレンチと仮称した。

第2節　層序

トレンチ状をなす調査区では、すべての地点において地表からの土層堆積状況を観察することができたため、とくに基本層序の把握を行っていない。ただ15号トレンチ南西隅では、遺構確認面を抜いて土層を観察している。また2号トレンチでは、工事の際に深掘りが行われたため、下層の礫層堆積状況を観察することができた。全般的には、水田に伴う灰褐色粘質の水田層（耕作土）、褐色の床土の下に黒褐色土があり、遺構確認面となる。5号トレンチでは礫層面が露出し、3号トレンチでは縄文後期の包含層の暗褐色土が安定して存在した。

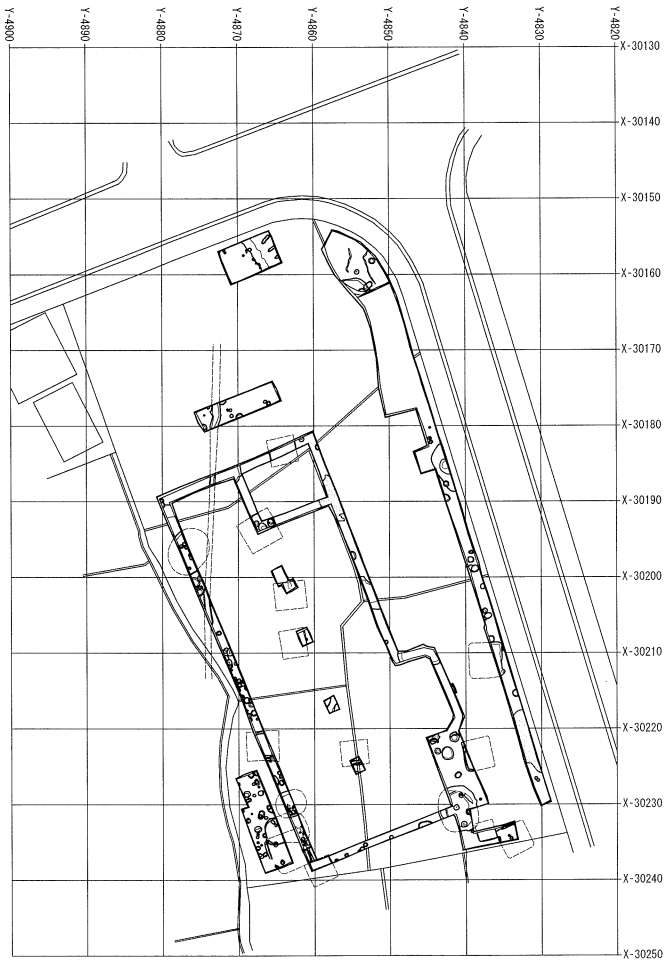


図4　グリッド配置図

第３節　遺構

調査面積は開発面積3487㎡のうちの635㎡である。建物の基礎部分のため、1～3・7号トレンチ以外では幅1.2ｍという細長い調査区となり、狭い調査区のため遺構の判断が難しい部分があった。各トレンチの調査状況は次のとおりである（第1図参照）。

1号トレンチ　防火水槽予定地。7.5×5ｍの長方形で、深さ70㎝～1ｍ。1号谷および1～3号畝が検出された。

2号トレンチ　灯油タンク埋設予定地で、11×2.5ｍの長方形。確認面までは深さ約80㎝。1号溝などが検出された。

3～5号トレンチ　道路に面した外周擁壁および浸透桝部分で、長さ81ｍ、幅1.2～6ｍ。深さ80㎝～1.4ｍ。北端に2号谷、11号土坑、中央から南側、4号トレンチから5号トレンチにかけて7～10・12号土坑、16号竪穴がある。

6号トレンチ　5号トレンチの続きの擁壁部分で、7×5ｍのＬ字状に曲がる。14･15号竪穴が検出された。

7～9号トレンチ　建物外壁部分で、長さ55ｍ、幅1.2～4.5ｍ、深さ50～90㎝。南端の7号トレンチで7・8号竪穴、14号土坑、3号集石など、8号トレンチで4号溝など、9号トレンチで3号溝などが検出された。

10号トレンチ　建物外壁部分で、22×1.2m、深さ約1～1.4ｍ。中央付近に1号溝、東側に19号竪穴があり、中央から西側にかけて遺物包含層があり、当初竪穴かと推定し掘り下げている。

11号トレンチ　Ｌ字状の基礎部分で、直線的に伸ばすと長さ17ｍ、幅1.2ｍ。深さは約1.2ｍ。屈曲部分に18号竪穴、13号土坑がある。

12･13号トレンチ　建物外壁部分で、長さ52ｍ、幅1.2ｍ、深さ70㎝～1ｍ。南側の13号トレンチ内に1～5･13号竪穴、北側の12号トレンチ内に1号溝、4・5号土坑がある。また12号トレンチ付近に縄文前期を中心とした包含層があり、当初竪穴として調査を行っている。

14号トレンチ　建物外壁部分で、長さ21ｍ、幅1.2ｍ、深さ約1ｍ。西端に3号竪穴が、東側に6号土坑がある。

15号トレンチ　調査区西側の浸透桝設置個所で、13.5×4ｍの長方形。深さ80㎝～1.3ｍ。13号トレンチにかかるようにして1・2号竪穴があるほか、1～3号土坑、1号集石などがある。また縄文晩期の大形破片も点在した。

16号トレンチ　独立基礎部分で、当初2×1.2ｍ、深さ1.1ｍのトレンチを設定したところ、南壁に北竈の背面断面が観察されたため、さらに1.5×1.5ｍの拡張を行い、10号竪穴として竈付近のみ調査を実施した。

17号トレンチ　独立基礎部分で、2×1.2ｍ、深さ1.2ｍ。竪穴らしき落ち込みがトレンチ内西側に確認でき、11号竪穴とした。

18号トレンチ　独立基礎部分で、2×1.2ｍ、深さ1ｍ。溝状の落ち込みが斜めに確認でき、2号溝とした。

19号トレンチ　独立基礎部分で、2×1.2ｍ、深さ1.1ｍ。北側に竪穴状の落ち込みがあり、12号竪穴とした。

以上のように、調査の結果、竪穴14軒（縄文前期1、中期1、弥生1、古墳5、平安および時期不明5）、溝2、土坑13、ピット多数、集石3、谷状遺構2を検出した。

1号竪穴（第2～4図、図版1）

南西隅15号トレンチと13号トレンチ内に存在し、2･3号竪穴と重複する。東壁中央に東竈をもつ隅丸方形の竪穴で、東西5.3ｍ、南北推定5ｍを測る。15号トレンチ東壁で作図したセクションでは1号竪穴が2号竪穴に切られているが、13号トレンチ西壁セクションでは2号竪穴覆土中に床面が続くことから、2号竪穴の覆土を切るようにして構築された1号竪穴が2号竪穴よりも新しい。15号トレンチ側では何らかの要因で切り合い関係の認識を誤ったものと思われる。

地表から床面までは深さ1.3mで、竪穴の覆土は約50㎝、壁の立ち上がりは約30㎝である。15号トレンチでは当初、北西隅に深掘りの試掘坑を入れたため、本竪穴南西壁を一部切ってしまっている。壁床面は竈の脇では硬化面が残るが、全体に軟弱で、掘り方面確認のため再精査をしたところ、15号トレンチ内で竪穴西側の柱穴2本が確認された（91・92号ピット）。ともに2重の掘り込みがあり、北寄りに柱を立てた柱痕が見つかっている。4本柱の建物と考えられる。周溝は西側と竈脇に存在するが、本来は全周したのであろう。

竈は2個の扁平円礫を2列に立て並べた袖石が遺存し、煙道は長く東へのびると思われるが、トレンチ幅が狭く、全貌は把握できていない。袖石間は約50㎝、袖石の高さは約40㎝で、支脚石はない。また13号トレンチ内では南東隅の床面上に焼土が堆積していた。

遺物は全体に少なく、床面よりわずかに浮上したものが多い。

2号竪穴（第2・3図、図版1）

15・13号トレンチ内で確認された弥生時代の竪穴。限られた調査区のため全体像は不明であるが、東西推定5.6m、南北3.5～4ｍの小判形で、主軸方向は東西と考えられる。南側に1号竪穴が重複し、前述したよ

うに13号トレンチ西壁面のセクションによれば、2号竪穴覆土中に1号竪穴の床面が存在する。また北側に13号竪穴（縄文前期）があり、1号竪穴覆土中に2号竪穴の床面が存在することが15号トレンチ東壁面のセクションによりわかるが、調査時点では2号竪穴の床・壁を捉えることはできなかった。西側の壁のうち、とりわけ北西隅の壁は立ちあがりが不明瞭で、フラスコ状土坑のように床面に沿って壁が地山中に潜るような状況を示した。床面精査を行ったところ、北西隅のカーブで丸く弧を描く浅い落ち込みが2号竪穴北側に存在することから、2号竪穴廃絶後にフラスコ状土坑が重複して作られたことが考えられる。セクションにはそうした土坑の壁の立ち上がりは確認できていないが、調査区内では東側に2基のフラスコ状（袋状）土坑が見つかっていて、本例を弥生の竪穴よりも後出の土坑と考えておきたい。床面精査前の写真をみると黒色土が円形に広がっている。

遺物は少ない。13号トレンチ壁より完形の小形坏が出土したほか、小破片がわずかに散布する。15号トレンチ内では1号竪穴床面直上にあたるレベルで自然円礫が8個出土している。そのうちのいくつかを2号竪穴遺物として図示したが、一部が1号竪穴床面にあり、現場では重複部分で床面を確認できなかったものの、1号竪穴が新しいことを考え合わせると、それらの礫は1号竪穴に帰属する錘石的な一群の礫と考えられよう。

3号竪穴（第2・3図、図版1）

13号トレンチで1号竪穴と接する竪穴で、1号竪穴を切るようにわずかに深い。竪穴は推定隅丸方形で、東壁から北壁にかけての北東隅を中心とするごく一部である。周溝、竈などの施設はない。また遺物も非常に少ない。東壁付近は暗褐色土から黄褐色土（ローム土）に移行する漸移層中の構築で、ロームへの掘り込みが弱いため、床面、壁の確認は難しい。

4号竪穴（第4図、図版1）

13号トレンチ、中央南寄りに単独で位置する隅丸方形の竪穴住居。住居に対して斜めにトレンチが設定され、南北3.9 m、東西の長さは不明となっている。地表下、確認面まで70cm、床面までは1.2 mで、トレンチ壁面をセクション面として作成した断面図によれば、地表下40cm付近に竪穴の掘り込み面が存在し、竪穴の深さは90cm～1 mである。竪穴の北壁と南壁の一部とそれに伴う周溝が確認され、竈は未確認である。遺物は南壁寄りにやや多い傾向があり、覆土中からの出土が主で、床面からは少ない。周溝の幅は20～30cm、深さ10cm程度で、南壁では竪穴の立ち上がりより内側に存在している。床面は全体的に貼り床をもち、硬化面が全体的に広がっていた。セクション面に合わせて立ち割ったところ、深さ15cm程度でほぼ平らな掘り方面が確認された。

5号竪穴（敷石遺構）（第2～4図、図版1）

13号トレンチ南側、13号竪穴上層に存在した敷石遺構を敷石住居の一部と推測して遺構名を付けた。トレンチ幅の調査のため、この配石が敷石住居のどの部分に当たるのかという点については不明で、出入り口の敷石かと思われるが定かではなく、住居に伴う敷石ではない可能性も十分考えられる。敷石は1.2 × 1 mの範囲に敷設され、40～50cmもの大形の扁平礫3個を核としていくつかの円礫を縁石状に周囲に添えたもので、東側の扁平礫は裏面向きの石皿片であった。とくに伴う土器がないことから時期不明であるが、石皿の転用から縄文時代の遺構と考えてよいだろう。

8号竪穴（第5図、図版2）

6・7号トレンチにあり、全体の約半分を調査した。北東壁、西壁と南壁の一部を確認し、南北6.3 m、東西5.2 mを測る。南北方向に主軸線をもつ楕円形プランの竪穴住居である。地表下1.1 mで確認面となり、1.7 mで床面となる。中央やや北側に浅鉢を炉体土器とした炉があり、その周囲に3本の柱穴を配する。他に北西と南西に1本ずつ想定されることから、5本あるいは6本の柱穴配置と考えられる。炉は、2/3程度が残る浅鉢を炉体土器とするもので、浅鉢は口縁部を床面とほぼ同じにして正位に埋設され、覆土中に焼土粒・炭化粒はほとんど存在しない。焼土・炭の片付けが念入りに行われたのであろう。炉体土器直上にはわずかに間層をはさんで石皿片が被されていた。単なる偶然というよりは、竪穴廃絶に伴う意味のある行為によるものと推測したい。柱穴（88～90号ピット）は60～80cm、深さ約50cm。床面には礫を含んだ砂礫層面が露出し、硬化面、貼り床面はなかった。床面には直径20～30cmの円礫が、床面からわずかに浮上して多数存在し、遺物は覆土下層から床面上に散在していた。壁際は、南側を除きわずかな幅でテラス状を呈している。壁は高さ75cmと、深めの竪穴である。

9号竪穴（第6図、図版2）

7号トレンチ内、東壁に竪穴の大半がもぐり、西壁の一部が見えている。南北4 m、東西幅0.9 m以上の隅丸方形の竪穴である。地表下70～90cmで確認面で、床面までは地表下1mである。西壁から南壁の一部にかけて周溝が巡る。幅約10cm、深さ5cm程度である。

竈はない。南北方向を主軸方向とすると主軸はN-10°-W。南西隅の床面直上に径5～30cm大の円礫がまとまり、その付近の覆土中に土器片が散在するほか、棒状鉄製品が床面から浮いて出土した。礫の中には大きな凹みをもつ凹み石があり、本竪穴の時期に伴う石器と考えられる。

10号竪穴（第6図、図版2）

16号トレンチ内で検出。このトレンチは店舗建物の柱のひとつにあたり、1.5m四方の壺掘り状の調査区である。当初、南壁面を断面図作成のために精査したところ、竈の袖石らしき直立した2本の礫が露出し、その間に焼土が確認されたことから北竈と判断、焚口は南側に存在すると考えられたため、南壁の南側をさらに1.5m拡張することとした。その結果、竈袖石を南北に3個ずつ並べた石組竈が検出された。礫は大きめの円礫2個と小形の円礫もしくは角礫を1個、計3個並べている。竈内には上層に甕片が多数あり、焼土層は厚く、それらを掘り上げると中から西寄りに直立する自然石の支脚石（高さ15cm）が見つかった。竈焚口の掘り込みは不明確で、竈背後の北壁の状況、煙道も確認できなかった。ただB-B'ラインのセクション面に壁の立ち上がりがあり、おおよその位置は判明した。竈南側には円礫が集中し、集石状の様相を呈している。遺物は竈内、周辺に集中していた。

11号竪穴（第7図、図版2）

17号トレンチ内で検出。2×1.5mのトレンチ内で、西側半分に落ち込みがあり、竪穴住居の東壁と考えられた。壁は南北方向にのびて南北壁にもぐっており、竪穴住居の規模に関しては全く不明である。地表下1.2mで確認面、1.4mで床面となる。深さ20cm程度の浅い竪穴で、部分的な調査のため、確実に竪穴住居かどうかはわからない。トレンチ内には北西隅の床直面に直径40cmもの円礫がある。また壁際には83号ピットが重複する。遺物は非常に少ない。

12号竪穴（第7図、図版2）

19号トレンチ内、北側で確認。地表下1mで確認面、1.2mで床面となり、さらに壁際には周溝が巡る。ごく一部の調査のため、竪穴の規模は全く不明であるが、隅丸方形の竪穴住居と思われるものの、確実ではない。セクション面では斜めに立ちあがりを見せることから、竪穴ではなく溝かもしれない。

13号竪穴（第2・3図、図版1）

13号トレンチ南寄り、5号竪穴（敷石）下層の竪穴住居。南北3.5mの円形もしくは楕円形で、南壁は2号竪穴に切られ、北壁は緩やかに立ち上がる。周溝、柱穴、炉は未確認である。地表下90cmで確認面、1.6mで床面となり、壁の高さは60～70cmと深い。床面にはやや浮上して礫が散在する。

14号竪穴（第7図、図版2）

6号トレンチ内にあり、15号竪穴と隣接し、15号竪穴に切られている。東西2.5m、南北1.3m以上で、竪穴の深さは10cm未満と浅い。周溝、竈は未確認である。遺物は非常に少ない。

15号竪穴（第7図、図版2・3）

6号トレンチ内、14号竪穴と隣接する。西壁と北壁の一部が確認されたが、竪穴全体の規模は不明で、東西3m以上、南北2m以上となる。北壁に沿って周溝があり、西壁の一部にも存在するが、全周しない。床面上にはわずかに浮上して5～20cm大の円礫がまとまり、それらの下にはピットが2個（107・108号ピット）検出されたが、柱穴ではないと考えられる。遺物は床面上、西壁寄りを中心にわずかに散在している。

16号竪穴（第8図、図版3）

道際、5号トレンチ内にあり、西壁にもぐるようにして竪穴の一部が確認できた。竪穴の規模は不明であるが、南北4.6m程度、東西1.5m以上で、周溝はない。東壁南寄りの壁際に焼土を伴い、礫が立つ部分があり、竈と考えられる。東壁際には、図化していないが、写真にあるように床面に礫層が露出し、竈の石組との区別を難しくしている。竈については調査区が狭いため、十分な調査ができなかったが、壁の内側にあり、外側には突出しておらず、煙道もない。礫を2つ程度2列に並べて袖石としている。遺物は覆土中を主に分布し、また竈内にも集中していた。

17号竪穴（第12図）

7号トレンチ北壁寄り、116号ピット上層の遺構確認面に床面と見られる硬化面が広がる。1.2×1.6mの範囲で、壁面観察では壁の立ち上がりを認めることはできなかった。また遺物は伴っていない。

18号竪穴（第8図、図版3）

11号トレンチ内、南西コーナーで検出。トレンチ西壁から須恵器蓋がほぼ完形の状態で出土し、壁面を精査したところ、竪穴の北壁の立ち上がりがセクション面に確認できた。東壁も13号土坑と重なるようにおおよその位置が判明し、東西2.7m以上、南北2.5m以上の隅丸方形の竪穴住居と考えられる。地表下、遺構確認面までは80cm、床面までは約1mで、竪穴の壁は高さ15cm程度と低いが、セクション観察では9層を切って掘り込まれた壁が認められ、地表下55cm付近に確認面が本来あったことがわかる。調査区内に

は竈はないが、西壁セクションには、壁際にわずかに焼土層が見られ、もう少し西側、調査区外に北竈が存在する可能性が高い。床面には硬化面が残り、遺物は北壁寄りにわずかに浮いて甕が横位で出土し、また前述したように西壁、床面より浮上してほぼ完形の須恵器蓋が出土したほか、床直からわずかに浮上して少量が散在する。床面を精査したところ、下層に縄文中期の土坑・ピットが検出されている（13号土坑、117・118号ピット）。

19号竪穴（第9図、図版3）

10号トレンチ東寄りにあり、東西の壁が確認されたことから、東西3.6ｍの隅丸方形かと考えられる。地表下80cmで確認面、床面までは1ｍで、竪穴の深さは15cm程度と浅い。周溝、竈は未確認。東側、床面直上に礫のまとまりがあるほか、中央付近にも調査区外にかかるように礫群がある。遺物は少ないが、鉄製品が2点あり、刀子片が東側から、鉄鏃が2本重なったと思われるものが西壁寄りからともに浮上して出土している。

1号土坑（第9図、図版3）

15号トレンチ内。92×78cm、深さ37cmで、断面鍋底状。上層中央に奈良時代の坏片がある。

2号土坑（第9図、図版3）

15号トレンチ内。112×62cm、深さ約30cmで、楕円形土坑中にピットが重なったような構造である。上の土坑は断面皿状となる。

3号土坑（第9図、図版3）

15号トレンチ内。88×76cm、楕円形、深さ46cm、断面鍋底状で、底面は平らとなる。

4号土坑（第9図）

12号トレンチ内。92×56cm以上、深さ26cmで、断面はボール状。

5号土坑（第9図）

12号トレンチ内。135×73cm以上。円形と推定され、断面は鍋底状。

6号土坑（第10図、図版3）

14号トレンチ内。182×58cm以上で、調査区外にかかるため平面形は不明。断面は鍋底状で、深さ38cm。

7号土坑（第10図、図版3）

5号トレンチ内。袋状土坑で、平面形（口径）は100×70cmの楕円形。内部の最大径は110cm、深さ64cm。ただし、セクション観察によれば口径は60cm程度で円形と考えられる。遺物は少なく、狢沢式期の土器片が数点あるのみであった。

8号土坑（第10図、図版3）

第1表　ピット一覧表

番号	幅×深さcm	土色など
1	45×12	黒褐色
2	57×8	暗褐色
3	43×15	暗褐色
4	20×9	暗褐色
5	33×8	黒褐色
6	24×8	暗褐色
7	40×14	暗褐色
8	52×14	暗褐色
9	18×9	暗褐色
10	45×10	暗褐色
11	42×20	暗褐色
12	27×5	暗褐色
13	60×5	黒褐色
14	39×9	暗褐色
15	61×8	黒褐色
16	44×18	黒褐色
17	28×16	黒褐色
18	54×26	暗褐色
19	45×15	暗褐色
20	78×23	黒褐色
21	54×16	黒褐色
22	21×18	黒褐色
23	37×22	黒褐色
24	73×28	黒褐色
25	58×17	黒褐色
26	18×10	黒褐色
27	113×35	黒褐色
28	72×9	黒褐色
29	68×31	黒褐色
30	46×22	黒褐色
31	60×20	黒褐色
32	50×18	黒褐色
33	84×13	黒褐色
34	13×8	黒褐色
35	40×11	黒褐色
36	61×17	暗褐色
37	17×7	黒褐色
38	40×8	黒褐色
39	108×28	黒褐色
40	68×17	黒褐色
41	50×18	黒褐色
42	42×21	黒褐色
43	62×31	黒褐色
44	27×5	黒褐色
45	40×16	暗褐色
46	53×10	黒褐色砂質
47	52×12	暗褐色
48	119×13	黒褐色
49	114×10	暗黄褐色
50	70×20	暗褐色
51	48×26	黒褐色
52	98×30	黒褐色
53	89×19	黒褐色
54	44×16	黒褐色
55	19×13	暗褐色
56	29×11	暗褐色
57	38×13	黒褐色
58	45×25	黒褐色
59	30×15	暗褐色
60	87×8	暗褐色
61	16×9	黒褐色
62	20×11	黒褐色
63	12×5	黒褐色
64	40×10	黒褐色
65	22×16	黒褐色
66	15×10	黒褐色
67	20×15	黒褐色
68	21×14	黒褐色
69	15×11	黒褐色
70	13×4	黒褐色
71	21×5	黒褐色
72	25×15	黒褐色
73	22×11	黒褐色
74	18×10	黒褐色
75	28×10	暗褐色
76	45×20	暗褐色
77	21×18	暗褐色
78	45×26	暗褐色～暗黄褐色
79	42×12	暗褐色
80	92×18	暗褐色
81	44×14	暗褐色
82	50×18	暗褐色
83	32×12	
84	－×5	
85	33×20	黒褐色
86	36×5	黒褐色
87	64×16	
88	64×50	
89	82×34	
90	80×47	
91	64×38	
92	64×27	
93	36×30	
94	30×6	黒褐色
95	23×20	黒褐色
96	64×45	黒色～黒褐色
97	60×22	黒色
98	94×16	黒褐色
99	62×16	黒褐色
100	62×33	
101	74×16	黒色
102	39×33	灰黄褐色～黒褐色
103	42×17	ローム色
104	44×32	
105	60×9	黒褐色～灰黄褐色
106	75×16	暗褐色
107	26×14	黒色
108	48×14	黒色
109	73×4	灰黄褐色～黒褐色
110	24×8	
111	62×15	黒褐色
112	86×15	暗褐色
113	50×22	
114	100×11	
115	70×24	暗褐色
116	91×15	黒褐色

5号トレンチ内。90×60cm以上の円形土坑で、深さ10cm程度と浅く、断面形は鍋底状。確認面から平安末の土師質土器皿などが上向きで3点出土した。

10号土坑（第10図、図版3）

4号トレンチ内。12号土坑と重複し、12号土坑よりも新しい。直径90cmの円形で、断面鍋底状。床面上に焼土層が広範囲に広がる。

11号土坑（第11・15図、図版4）

3号トレンチ内。東西4ｍ以上、南北1.5ｍ以上の隅丸コーナーをもつ大形土坑で、竪穴住居もしくは何らかの大形掘り込みを伴う遺構の一部と考えられ、通常の土坑とは異なる。深さ約30cmで、覆土上層には礫が多数入り込み、覆土中位には後期の無文土器片が多量に出土した。調査区外にのびていたが、廃土の山が盛り上げられていたため、拡張することはできず、

性格を見極めることができなかった。床面はなく、敷石も存在しなかった。

12号土坑（第10図）

4号トレンチ内。10号土坑下層。100 × 80cmの楕円形土坑で、深さ15cm、断面皿状。

13号土坑（第10図、図版3）

11号トレンチ内。二重の掘り方をもつ楕円形土坑で、114 × 94cmの楕円形土坑内に70 × 63cmの円形土坑が入れ子状を呈する。北寄りに円形土坑が掘り込まれ、深さは46cmを測り、断面はボール状を呈する。円形土坑の中央より非常にもろい狢沢新式期の大形破片が出土し、その直下に径30cmほどの円礫が出土した。土坑の掘り込み自体はさらに深い。

14号土坑（第12図）

7号トレンチ内。166 × 150cmの円形土坑。深さ10cm程度と浅く、平らで、断面形は皿状。土坑北西側に焼土ブロックが出土した。

1号集石（第9図、図版3）

15号トレンチ、調査区西北角に検出された。集石土坑の約1/4と考えられ、平面的には礫6個がほぼ水平に配置し、下部に円形とみられる土坑が存在する。土坑は深さ15cm程度と浅い。礫に被熱はなく、また覆土中にも炭化物、焼土はみられなかった。遺物はない。

3号集石（第12図、図版4）

7号トレンチ内。直径126cmの円形土坑で、断面ボール状。深さ32cmを測る。礫は径90cm、深さ30cmの範囲に集中する。時期を示すような遺物はないが、周辺の遺構からすると狢沢式期の可能性がある。土坑覆土中には炭化物、焼土はとくにない。また時期を示す遺物はない。

礫は分析のため全て取り上げ、整理の段階で洗浄し、破損礫については接合を行い、重量、大きさなどの計測、破損状況の観察を行った。計140個の円礫を中心に出土し、大きさは長さ9～12cm、重さ0.4～0.5kgが多い。全てに赤変、黒変などの被熱痕がみられ、多くの礫にタール状付着物が認められた。石材は安山岩を主とし（約80%）、そのほかに砂岩（23個、16%）、花崗岩（6個、4%）が見られた。被熱によって表面が薄く剥離した礫、大きくいくつかに割れた礫があり、非安山岩礫にそうした破損が見られた。加熱しても割れにくい安山岩を選択している。以上の特徴から石焼き調理に伴う屋外炉と推測でき、焼いた礫を土坑状の凹みの中に食糧とともに入れて蒸した蒸し焼き料理のための屋外炉とみられる。なお、その考察については第5章第3節に譲る。

1号溝（第13図）

2・10・12号トレンチ内で検出した溝。断続的な確認ではあるが、直線的に配置することから同一の溝と判断した。長さ19m以上、幅70cm～1m程度、深さは断面観察によれば50～70cmの素掘りの溝である。覆土中には砂層、砂礫層を含む。方向はN-3°-Eで、ほぼ南北方向を示している。ただ1号トレンチ内では未確認であり、また先に実施された後田堂ノ前遺跡の調査（韮崎市1997）では延長線上にはないが、わずかに方向の違う溝が存在することから、1号トレンチと2号トレンチの間で湾曲しながら北方向にのびていた、とも考えられる。

2号溝（第14図）

18号トレンチ内で確認された溝状の落ち込み。狭い範囲のため確定的ではないが、おおむね南北方向に位置し、長さ2.2m以上、幅1～1.1m、深さ約20cmである。1号溝に似た方向性をもつが、延長線上にあたる9・13号トレンチでは確認できていない。

3号溝（第1図）

9号トレンチ。やや幅広の落ち込みで、溝かどうかは明確でない。溝であれば東西方向を示し、幅4m程度になるが、4・5号トレンチでは未確認である。

4号溝（第1図）

8号トレンチ。やや幅広の落ち込みで、溝と仮称したが、判然としない。溝であれば幅約5m、南北方向の溝であろうか。3号トレンチ内の2号谷との関連があるかもしれない。

1号谷（第14図、図版4）

1号トレンチで確認された落ち込みで、東半が緩やかに下がる。谷の大きさは把握できていないが、おそらく3号トレンチに続くと考えられ、2号谷と同一の可能性が高い。谷内には3本の畝状遺構が東西方向に存在する。覆土中位には20cm四方程度の焼土範囲があり、遺物が散在した。なお1997年報告の調査では、谷状遺構は把握されていない。

2号谷（第15図、図版4）

3号トレンチ内。1号谷と同一と考えられる。縄文後期、堀之内式期の包含層で、遺物集中部分があり、幅1.8～2.7mのごく浅い溝状を呈す。溝であれば南北方向の向きを示している。

畝状遺構（第14図、図版4）

1号トレンチ、1号谷の東向き傾斜面に位置する。長さ50cm～1.4m以上で、谷方向に直交し、幅1.2～1.4mを測る。溝内から土師器片が出土している。

ピット（第16図、第1表）

15号トレンチから12・13号トレンチ、4・5号トレンチから7号トレンチにかけて多く分布する。柱穴的な配列は確認できていない。なお15号トレンチ内の11号ピット（第12図）は、ピット上層に礫が集積していた。

第4節　遺物

1号竪穴　遺物（第17図、図版4）

1～3は土師器坏。4は須恵器蓋。5～7は土師器甕。8・9は土師器壺底部。4の蓋がやや扁平で、坏類の屈曲がやや弱いことから山梨県史古墳編年（以下、県史古墳）X期後半（6世紀第4四半期、以下6c4/4）～XI期前半（7c1/4）と考えておく。

2号竪穴　遺物（第17図、図版4）

1・3は弥生土器で、1は完存の小形鉢、3は甕底部。2は須恵器坏底部。4～8は石器で、4・5・7は磨り面をもつ礫（磨り石か）、6は端部に叩き痕をもつ礫、8は凹石。時期は弥生後期（県史弥生5～6期）か。

3号竪穴　遺物（第17図、図版4）

1は土師質土器高台坏。2は弥生土器？甑底部で、細い孔が多数貫通する。3は縄文土器片（狢沢式）。竪穴の時期は、1から県史奈良平安IX期（11c後半）か。

4号竪穴　遺物（第18図、図版4）

1～4は土師器坏。1は甲斐型坏の祖形的な土器で、内面見込み部の放射状暗文、体部内外面の横位ヘラミガキが特徴的である。2は盤状坏。3は底がやや丸い坏で、底部外面に線刻で「女」または「井」と記されている。4の底部外面にも線刻があるが、文字は不明。坏の底部が丸いことから、時期は県史奈良平安I期（8c1/4）か。

5号竪穴（敷石）遺物（第18・19図、図版4）

1は5号竪穴下層出土の諸磯b式土器深鉢で、13号竪穴に含めるべき資料であり、縄文地文上に横位の竹管文を施文する。2は磨り石。3は敷石中出土の石皿。4・5は磨り面をもつ円礫で、4は敷石中の破損礫が接合して完形となった。本敷石に伴う土器片ははっきりしないが、おそらく中期末から後期前半の敷石住居の一部とみられ、2号谷の土器群と時期的に関連するかもしれない。

8号竪穴　遺物（第20～22図、図版4・5）

1～3・5～10は狢沢式土器。1は深鉢で、胴から口縁部に3段の横位文様帯があり、口縁部には渦巻文と三角文の組み合わせをもつ。2は深鉢。3は炉体土器に用いられた浅鉢で、口縁部には4単位と思われる隆帯文をもつ。4は混入と思われる中期後半の鉢。5は浅鉢底部。9・10は同一個体と思われる竹管幅が狭く細かい角押文をもつ深鉢。11～14は打製石斧。15・16は横刃形石器。17～19・21・23・24は磨り石。20・22は凹石。25は石皿。時期は狢沢式期2・3段階であるが、6は1段階の古手。

9号竪穴　遺物（第23図、図版5）

1は須恵器坏。2は土師器甕。3は突き臼状の凹石。4は鉄製品。時期は明確ではないが、1の坏底部の形態から8世紀前半としておく。

10号竪穴　遺物（第23図、図版5）

1は土師器ロクロ甕。2は土師器甑底部。3・4は須恵器甕。5は凹石。時期は1の甕から8世紀後半から9世紀前半（県史奈良平安III～IV期）か。

11・12号竪穴　遺物

ともに時期を示す遺物がなく、時期不明。

13号竪穴　遺物（第24図、図版5）

1は粗大縄文をもつ平縁深鉢。2・4は凹石。3は磨り石。5号竪穴1を本竪穴の遺物と見なして諸磯b式期とする。

15号竪穴　遺物（第24図）

1・2は土師質土器坏。3は土師質土器甕。4は紡錘車軸か。時期は県史奈良平安VIII期（11c前半）としておく。

16号竪穴　遺物（第24図、図版5）

1・2は土師器坏。3は須恵器坏底部。4は土師器小形甕。5は土師器ロクロ甕で、ロクロ調整の上にハケメをもつ。5の甕は9世紀前半以前と思われるが、竪穴の時期は1・2が示す11世紀前半であろう。

18号竪穴　遺物（第25図、図版5）

1は須恵器蓋。2は土師器鉢。3は土師器甕。時期は1号竪穴と同じ頃で、6世紀末から7世紀初頭か。

19号竪穴　遺物（第25図、図版5）

1は土師器小形甕。2・3は鉄製品で、2は刀子。3は鏃2点が重なったものか。時期は定かではないが、弥生末以降とするにとどめる。

土坑　遺物（第25・26図）

1号土坑（第25図）1は土師器坏で、深身、内外面にヘラ磨きをもつ古手（8世紀中）の甲斐型土器。2号土坑（第25図）1は縄文土器深鉢胴部。5号土坑（第25図）1は狢沢式土器胴部。6号土坑1（第25図）は大形磨り石。7号土坑（第25図、図版）1は狢沢式土器口縁部。8号土坑（第26図、図版5）1～3はまとまって出土した土師質土器で、1・2は坏、3は高台坏。県史奈良平安VIII期（11c前半）か。9号土坑（第26図、図版5）1は狢沢式土器片。2は古代以降の凹

み石。11号土坑（第26図、図版5）1は堀之内1式期の深鉢で、無文口縁部は短く折れ、起点文の上では小波状となる。頚部は括れ、胴部は推定5単位の8の字状貼付文を中心とする沈線文が展開する。充填縄文はない。13号土坑（第26・27図、図版5）1は土偶で頭部・脚部を欠く。腕を横に広げた胴部を中心とした破片で、腹部に陰刻文をもつ。板状で出尻出ない点に特徴があり、典型的な狢沢式期の土偶よりも古相を呈す。3は土坑内円礫直上出土の狢沢式3段階～新道式1段階の角押文を多用する深鉢。2は叩石。

ピット　遺物（第27・28図）

8号ピット（第27図）1は後期堀之内式期の深鉢片。35号ピット（第27図）1は中期後半、加曽利E式期の胴部片。40号ピット（第27図）1は弥生？の深鉢底部。43号ピット（第27図）1は無文深鉢。2は加曽利E式あるいは大木系の縄文地文の土器。3は曽利V式期のX把手付とみられる深鉢で、ハの字文をもつ。44号ピット（第27図）1は中期末、曽利Vc式かと思われる深鉢。2も同時期で、区画文がない。49号ピット（第27図）1は縄文中期後半とみられる無文深鉢。50号ピット（第27図）1は縄文地文上に半裁竹管文をもつ諸磯b式土器。66号ピット（第27図）1は弥生？の無文壺。80号ピット（第27図）1は蛇行条線文が縦位施文された深鉢。85号ピット（第27図）1は灰釉陶器皿高台部で、意図的な割れ口を示す。転用硯の可能性がある。96号ピット（第27図）1は曽利Vb式期頃の深鉢で、ハの字文は鋭角で弱い。2は羽状縄文をもつ土器。101号ピット（第27図）1は分銅形に近い打製石斧。115号ピット（第27図）1は小形浅鉢で、ミニチュア土器としておく。116号ピット（第27図）1は縄文をもつ土器片。117号ピット（第28図、図版5）1は狢沢式深鉢で、口縁部に横位文様帯3段を設け、角押文を施文し、胴部下半はクランク状の隆線とする。2も狢沢式土器。3は指頭痕をもつ深鉢底部。4は打製石斧、5は横刃形石器。118号ピット（第28図）1・2は角押文をもつ狢沢式1段階の深鉢片。

溝　遺物（第28図）

1号溝（第28図）1は無文土器。2は諸磯b式。4は中期初頭、五領ヶ台新段階。5は中期末、加曽利EⅣ式。7は弥生後期甕。縄文前期から弥生後期の遺物がみられるが、溝の時期は古代以降であろう。2号溝（第28図）1・2は無文口縁で、後期深鉢であろう。3は2本の低隆帯をもつ深鉢胴部で、中期末か。3号溝（第28図）1は弥生？甕底部。

谷　遺物（第29図）

1号谷（第29図）1・2は古墳時代土師器坏。3は須恵器坏。4は平安末、土師質土器坏か。5は甕底部。6は底部に孔をもつ甑。7は磨り石。1の内湾する坏、2の開いた屈曲口縁の坏から県史古墳XⅠ期（7c2/4）。2号谷（第29・30図、図版5）では縄文時代後期、堀之内式期の無文土器を主とした小破片が多く出土し、接合したところいくつかの個体が存在することがわかった。1・2・4は無文深鉢で、1には口唇部にわずかに沈線1本が横走し、刺突文をもつ小突起が付く。頚部が強く括れ、口縁部が大きく開き、器面のナデは粗い。2も1と類似した器形で、頚部が括れ外面のナデはやや粗い。3は口縁部で、横位の隆線上に8の字状貼付文をもつ。4は無文深鉢口縁部。5は深鉢胴下半で、沈線文をもつ。6は深鉢底部であろう。7は打斧片。堀之内1式新段階の時期であろう。

畝　遺物（第30図）

2号畝（第30図）1は古墳時代の甕か。3号畝（第30図）1は古墳時代の坏で、1号谷と同時期といえる。

遺構外　遺物（第30～34図、図版5）

1～10は縄文前期、諸磯b式土器で、1～3は縄文地文上に半裁竹管文をもつ。6は有孔浅鉢。5・7は突起をもつ口縁部片。11～15は中期前半、狢沢式土器で、11は狢沢新段階で、楕円区画内の右、あるいは左上に付く円形の貼付文を特徴とする。次の新道式期へ継承するモチーフである。17～24は中期末の曽利・加曽利E式土器。17は曽利V式土器で、4トレンチから横位に出土した。18は曽利Ⅳa式期、19・20は縄文地文＋低隆帯となる大木系土器。21は外面に見慣れないモチーフの沈線文をもつ小形深鉢で、中期末～後期の小形深鉢と思われる。22は曽利Va式土器で、櫛歯ハの字文をもつ。26・27は口縁部に一条の鎖状隆線をもつ無文土器群で、縄文晩期末。26は口縁部が一部波状になり、隆線も同調している。29は12号トレンチで縄文前期土器片とともに出土したミニチュア土器。底部は上げ底で、接地面付近には刺突列が巡る。諸磯b式期のミニチュア土器であろう。30は弥生甕か。

31～36は古墳時代の土師器。39は時期不明ながら深鉢の甕胴下半。40・41は11世紀前半以降の土師質土器。42は青磁碗底部で12・13世紀か。44は土偶頭部と思われるが、目・鼻・口がない。縄文中期後半の土偶と考えておく。45～51は打斧、52はチャート製石匙で、形態から縄文前期、諸磯式期の所産か。53は石鏃、54は使用痕のある剥片。55は凹石、56・57は磨り石。

第４章　自然科学分析

第１節　試料

試料は、縄文時代中期（狢沢式）の竪穴住居跡（8号竪穴）の炉、および、6世紀後半～7世紀前半の竪穴住居跡（1号竪穴）と9世紀前半の竪穴住居跡（10号竪穴）、11世紀前半の竪穴住居跡（16号竪穴）の各竈堆積物の水洗選別により回収された微細植物片6試料である。試料の詳細は結果とともに第2表に示す。

第２節　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて種実遺体や炭化材（主に径4㎜以上）を抽出する。同定は抽出された種実全てを対象とする。なお、分析時に種実遺体の検出量が少なかったことから、本報告では微細植物片中の同定可能な炭化材について任意の数量を抽出し、同定を行っている。

(1) 種実

種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994)、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種実を種類毎に容器に入れて保管する。

(2) 炭化材

木口（横断面)・柾目（放射断面)・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等は、島地・伊東（1982)、Wheeler 他（1998)、Richter 他（2006）を、各樹種の木材組織は林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

第３節　結果

結果を第2表に示す。竪穴住居跡 炉および竈試料からは、種実のほか炭化材、動物遺存体が検出された。

種実は、1号竪穴試料2試料（竈内土，竈3層）から4個、8号竪穴試料から1個、10号竪穴試料から4個、16号竪穴試料から1個が検出された。この他に、炭化材は、1竪 竈から0.06g、1竪 竈内から0.01g未満、1竪 竈3層から1.05g、8竪 炉内から0.07g、10竪 竈から0.44g、16竪 竈から0.29g検出された。動物遺存体は、1号竪穴（1竪 竈3層）と10号竪穴の2試料から検出された。

(1) 種実

竈試料から検出された種実10個からは、炭化した栽培種のイネ、オオムギ、コムギの胚乳と、草本のイネ科、カヤツリグサ属、タデ属が確認された。以下に、各遺構の種実の検出状況を記す。

・1号竪穴

1竪 竈内から草本のカヤツリグサ属の果実1個、タデ属の果実1個、1竪 竈3層から炭化した栽培種のオオムギの胚乳1個、炭化した草本のイネ科の胚乳1個が検出された。

・8号竪穴

炭化した種類不明の種実の破片1個が検出された。

・10号竪穴

炭化した栽培種のイネの胚乳3個、炭化した栽培種のコムギの胚乳1個が検出された。

・16号竪穴

炭化した栽培種のイネの胚乳1個が認められた。

以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科イネ属

胚乳が検出された。炭化しており黒色。長さ4-4.5㎜、幅2.5-3㎜、厚さ1.5㎜程度のやや偏平な長楕円体で基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。胚乳表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。

・オオムギ（*Hordeum valgare* L.）　イネ科オオムギ属

胚乳の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ4.5-6.5㎜、径3.0-4.0㎜程度のやや偏平な紡錘状長楕円体で両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面には微細な縦筋がある。破片は長さ3.7㎜、径3.5㎜程度で両端を欠損する。

・コムギ（*Triticum aestivum* L.）　イネ科コムギ属

胚乳の破片が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ3.5-4㎜、径2.5-3㎜程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。胚乳表面は粗面でやや発泡している。破片は長さ2.7㎜、径2.7㎜程度で頂部を欠損する。

・イネ科（Gramineae）

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ1.5㎜、径0.7㎜程度のやや偏平な長楕円体。背面は丸みがあり、基部正中線上には胚の痕跡が径0.3㎜程度の楕円状に窪む。腹面は偏平。胚乳表面は粗面で、微細な縦筋がある。

第２表　微細物分析結果

遺構名	試料名	土壌量 (kg)	分析量 (g)	種類 (個数)	重量 (g)	最大径 (mm)	分類群・部位(個数)
1号竪穴	1竪 竈	2.7	0.26	炭化材	0.06	8.0	-
	1竪 竈内土	1.4	0.11	種実(2)	<0.01	1.4	カヤツリグサ属 果実
					<0.01	2.2	タデ属 果実
				炭化材(2)	<0.01	4.5	-
	1竪 竈3層	3.3	1.89	種実(2)	<0.01	3.7	オオムギ 炭化胚乳(破片)
					<0.01	1.5	イネ科 炭化胚乳(完形)
				炭化材	1.05	14.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
							コナラ属コナラ亜属コナラ節
							カエデ属
							イネ科
				動物遺存体 焼骨(破片10)	<0.01	4.5	-
8号竪穴	8竪 炉内	6.1	0.51	種実(1)	<0.01	3.0	不明 炭化(破片)
				炭化材	0.07	6.0	コナラ属コナラ亜属コナラ節
10号竪穴	10竪 竈	8.3	0.96	種実(4)	0.02	4.2	イネ 炭化胚乳(完形3)
					<0.01	2.7	コムギ 炭化胚乳(破片1)
				炭化材	0.44	18.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
							コナラ属コナラ亜属コナラ節
							エノキ属
				動物遺存体 焼骨(破片1)	<0.01	2.2	-
16号竪穴	16竪竈	3.0	0.63	種実(1)	<0.01	4.0	イネ 炭化胚乳(完形)
				炭化材	0.29	7.5	モミ属
							コナラ属コナラ亜属クヌギ節
							コナラ属コナラ亜属コナラ節

・カヤツリグサ属（*Cyperus*）　カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、長さ 1.4㎜、径 0.5㎜程度の三稜状狭倒卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面には微小な疣状突起が密布する。

・タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実が検出された。黒褐色、長さ 2.2㎜、径 1.7㎜程度のレンズ状広卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は粗面で灰褐色の花被が残る。

(2) 炭化材

竪穴住居跡の炉およびカマド試料から検出された炭化材は、針葉樹１分類群（モミ属）、広葉樹４分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・エノキ属・カエデ属）とイネ科に同定された。以下に、各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属（*Abies*）　マツ科

試料はいずれも年輪界で割れている。軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個。放射組織は単列、１～20細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus subgen. Quercus* sect. *Cerris*）　ブナ科

試料は晩材部のみで、早材部が観察できない。道管は単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。晩材部の道管配列だけをみるとアカガシ亜属にも似ているが、道管径が小さいことから、クヌギ節に同定した。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen. Quercus* sect. *Prinus*）　ブナ科

試料は晩材部のみで、早材部は観察できない。道管は漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・エノキ属（*Celtis*）　ニレ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合し接線・斜方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で鞘細胞が認められる。

・カエデ属（*Acer*）　カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-3細胞幅、1-30細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・イネ科（Gramineae）

試料は、肉眼観察では板状を呈する。横断面では、中央に空壁が見られ、本来は中空の円筒形をしていたことが推定される。横断面では維管束が柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。放射組織は認められない。

第4節　考　察

縄文時代中期および古墳時代後期～古代の各竪穴住居跡の炉および竈から回収された微細植物片からは、種実と炭化材、動物遺存体が検出された。

古墳時代後期～古代の竪穴住居跡竈試料から検出された種実遺体群のうち栽培種は、イネが10号竪穴と16号竪穴、オオムギが1号竪穴、コムギが10号竪穴より確認された。いずれも胚乳が食用される主要な植物質食糧の可食部であったことから、当時利用された穀類と考えられる。一方、1号竪穴の竈試料より検出された草本のイネ科やカヤツリグサ属、タデ属などは、調査区周辺に普通に生育していたと考えられる種類である。

また、炉および竈試料の炭化材からは、針葉樹のモミ属と落葉広葉樹のクヌギ節・コナラ節・エノキ属・カエデ属、さらにイネ科が確認された。1号・10号・16号竪穴の竈試料では、複数の分類群が確認されたが、いずれもクヌギ節・コナラ節が認められ、この他にモミ属やカエデ属、イネ科が混じる。それぞれ遺構の年代は異なるが、燃料材はクヌギ節・コナラ節などを主体とする種類構成であったと推定される。クヌギ節とコナラ節は、二次林（雑木林）の主構成種であり、現在の本地域では比較的一般的な樹木である。いずれも木材は重硬で強度が高く、薪炭材としては国産材の中でも優良な部類に入る。カエデ属もクヌギ節やコナラ節と共に生育する種類が含まれ、木材は比較的重硬で強度が高い。エノキ属は、自然堤防上等に生育し、木材の強度は中程度である。モミ属は、扇状地や山地斜面に普通に見られる針葉樹で、木材は軽軟な部類に入るが、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。いずれも遺跡周辺に生育する種類であることから、周辺で入手可能な木材を利用したと考えられる。縄文時代中期とされる8号竪穴 炉からもコナラ節が確認されたことから、周辺の二次林に生育した樹木を利用したと考えられる。

【引用文献】

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 III. 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV. 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

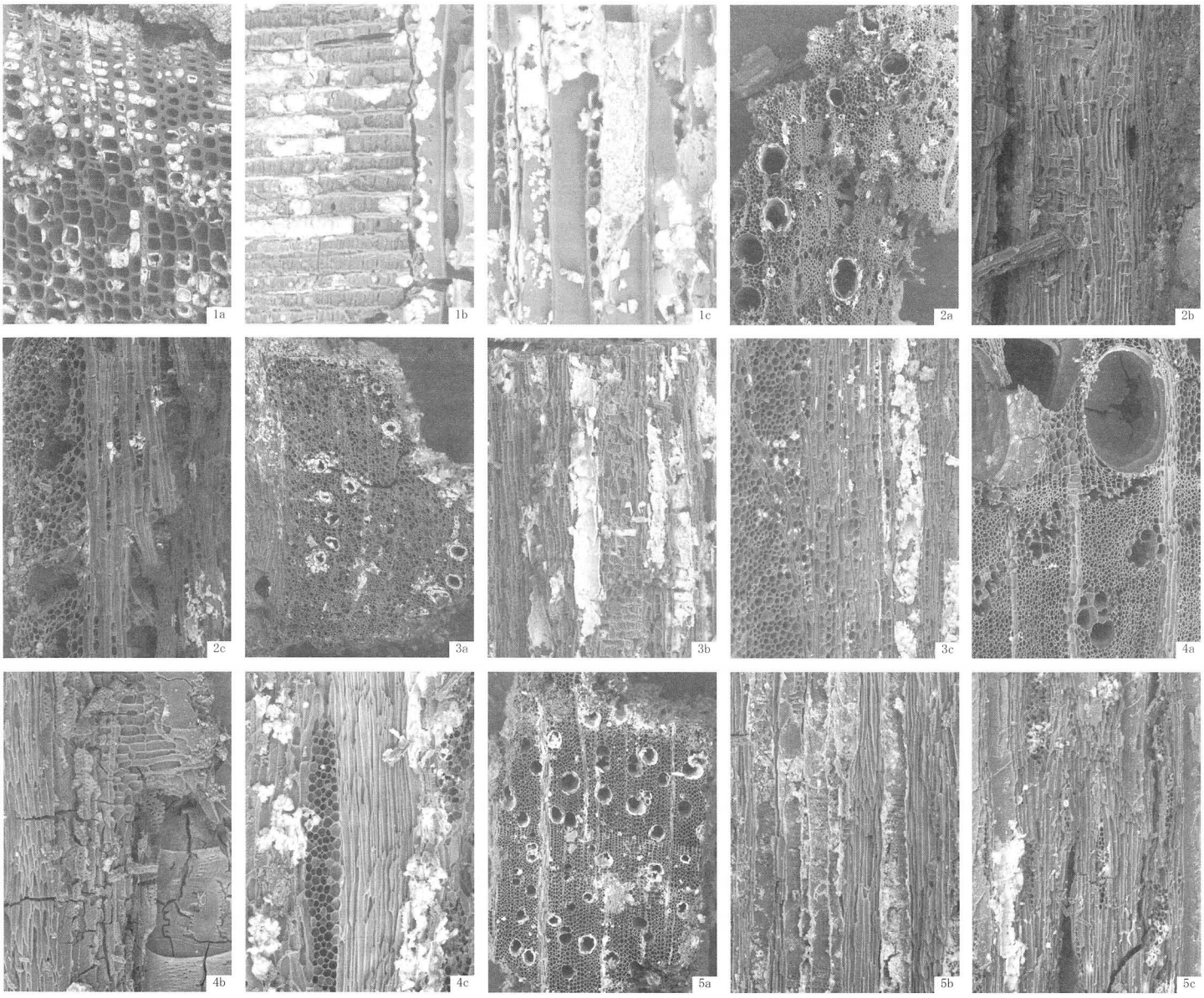
伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 V. 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

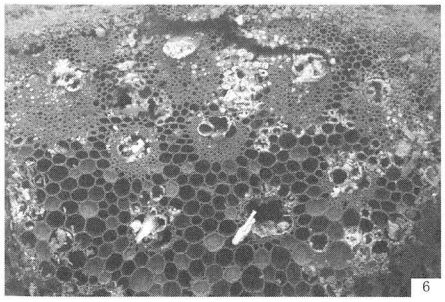
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］

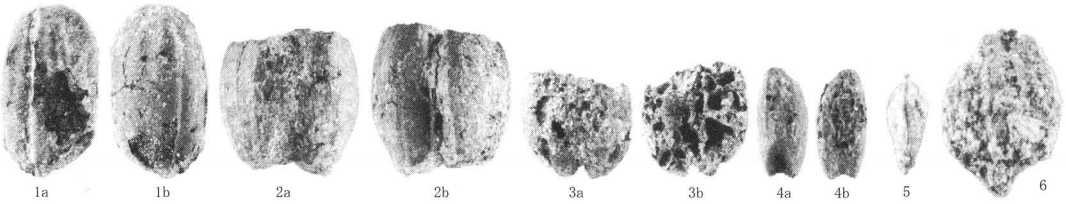




1. モミ属(16堅;竃)
2. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(1堅;竃3層)
3. コナラ属コナラ亜属コナラ節(1堅;竃3層)
4. エノキ属(10堅;竃)
5. カエデ属(1堅;竃3層)
a:木口, b:柾目, c:板目
6. イネ科(1堅;竃3層) 横断面

200μm:2-3a
200μm:1a, 2-3b, c
100μm:1b, c
200μm:4-5a, 6
200μm:4-5b, c

写真1　炭化材顕微鏡写真



2mm (1-3)　2mm (4-6)

1. イネ 胚乳(10堅;竃)
2. オオムギ 胚乳(1堅;竃3層)
3. コムギ 胚乳(10堅;竃)
4. イネ科 胚乳(1堅;竃3層)
5. カヤツリグサ属 果実(1堅;竃内土)
6. タデ属 果実(1堅;竃内土)

写真2　炭化種実顕微鏡写真

第5章　総　括

第1節　遺構の変遷

本遺跡からは縄文時代前期から平安時代末までの竪穴住居、土坑、ピットなどが検出し、中世前期の遺物も存在するなど、断続的ではあるが長期にわたる集落としての土地利用の経緯が確認できた。ここでは縄文前期、中期、後期、古墳時代後期、平安時代という時代区分に沿って、各時代の集落としてのあり方を再確認する。

縄文時代前期（諸磯式期）

調査区北西、12号トレンチ北半内の1号溝付近よりやや多くの破片が出土したほか、13号トレンチ南、5号竪穴直下の13号竪穴が諸磯式期の竪穴と考えられる。この時期に、塩川河岸段丘底位面での集落跡はほとんどなく、前期末、十三菩提式期になって宮ノ前遺跡などで竪穴住居を伴う集落が出現する。十三菩提期をさかのぼる時期に微高地上に居住域が出現したことを示す事例であり、前期後半での塩川流域の安定化、居住域としての利用の開始を示唆するとともに、藤井平の中でもとくに本遺跡周辺の微高地付近が居住域としてより安定的であったことを物語る。

縄文時代中期（狢沢式期）

狢沢式期になると、藤井平に多くの遺跡が出現することは志村滝蔵氏の調査以来知られ、付近では三宮地遺跡（文化会館西側）で炉体土器を伴う住居1軒が検出されている。今回の調査区では南端で竪穴住居1軒(8号竪穴)、やや離れて13号土坑が存在する。また8号竪穴そばには3号集石があり、時期は不祥ながら位置関係から狢沢式期の可能性がある。8号竪穴周辺は部分的な調査に留まり、集落としてのあり方は不明といわざるをえない。推測になるが、南北に細長い微高地上に数軒単位からなるごく小規模なあり方を呈していたのであろう。この時期では通常、小河川に近い台地上に立地することが多いが、河川に面した低位段丘面でどのような生業活動が行われたのか興味がある。8号竪穴では床面までが深くなっているが、地下水位が既にそれ以上に下がっていたことが推測でき、塩川の下刻化、微高地面の安定化が伺える。本期以降では、中期後半曽利Ⅴ式の段階までの間、遺構・遺物ともにほとんど見られない空白期となる。

縄文後期（堀之内式期）

後期前半、3号トレンチの北東隅（2号谷）で、堀之内式期の土器片を多量に含む包含層が見つかり、調査区境に土坑1基（11号土坑）が検出された。包含層では最下層にごく浅い溝状の落ち込みがあったが、遺構の性格は不明である。11号土坑は小竪穴状を呈し、土坑内からは確実な柱穴は見つかっていないものの、規模的には竪穴住居にふさわしい。この後期包含層は、調査区北側への広がりが想定できるが、5号竪穴とした敷石遺構は、中期末から後期前半の敷石住居にともなうものと考えられる。土器が明確に伴わなかったことから時期は不明ではあったが、後期前半の可能性が高い。宮ノ前遺跡には敷石住居と考えられる竪穴3軒があるほか、後田遺跡では堀之内2式期の有脚立像タイプのいわゆる仮面土偶が出土するなど、この付近一帯には後期（称名寺～堀之内式期）集落が広く分布する。

縄文晩期末（弥生前期）

調査区南西隅、15号トレンチ内でやや大形の破片が出土している。波状口縁深鉢形土器と平縁壺形土器で、両者とも胴部は無文、口縁部に押圧隆帯を貼付する。晩期後半、突帯文系土器群中の東海地方の五貫森式土器に類似性がある。近くでは三宮地遺跡で野外配石が見つかり、深鉢を半裁した土器片で覆った配石土坑をはじめとする土坑墓群が検出されたことから、本調査区西方に晩期遺構群が密に分布する可能性が強い。また晩期～弥生前期にかけて藤井平には土器棺形態の墓坑があるほか、宮ノ前遺跡では弥生前期の水田跡が発見され、住居はみつかっていないものの墓域・水田域を伴う居住域が想定できる。この段階で水田耕作にふさわしい段丘低位面が本格的に開発着手されたのであろう。

弥生時代後期

2号竪穴1軒のみで、後期と考えられる。周辺では市教委による調査で多数の竪穴が見つかっていることから、そうした集落域の広がりの一角とみられる。

古墳時代後期

古墳時代後期の竪穴住居は確実な事例として1・18号竪穴の2軒である。1号竪穴は東竈、18号竪穴は未確定ではあるが北竈と、竈の方向は異なるものの、ともに主軸方向はやや西に偏向した向きとなり、共通性がある。ただ、奈良時代までは北竈が一般的なので、1号竪穴の東竈は珍しい。また、柱穴が2本あり、未調査区に2本、計4本柱穴を想定できる点については古墳時代の通常のあり方と考えられる。1号トレンチ内、1谷内には畝状遺構があり、古墳時代の土器片が出土していることから、本時期の畑遺構とみたい。や

や西に傾いた地形の中で東西方向にほぼ平行に通る3本の畝の方向は、本時期の竪穴方向に似る。

平安時代

9世紀代の竪穴として10号竪穴があり、ロクロ甕が出土している。それ以外の竪穴では遺物量が僅少で、時期が判然としないものの、10号竪穴の主軸方向を参考にすると4・9・11・12・19号竪穴がいずれも磁北に近い方向を示すことから、9世紀前後の時期と推定しておく。1号溝は、溝に伴う時期判別資料が図化されていないが、主軸方向がほぼ磁北方向となることから、9世紀前後の溝と考えておきたい。北端は1谷内で確認できていないが、2・12号トレンチ内では直線的につながるとみられ、土地区画溝、あるいは水田への導水路かと考えられる。平安時代末とみられるのが14～16号竪穴で、16号竪穴では南東隅にコーナー竈があるらしい。竪穴は浅く、周溝等の構築が貧弱で、4号竪穴等とは対照的である。本調査区南東側に集中するように見受けられる。7号トレンチ北側の14号土坑北で確認された床面範囲（17号竪穴）も掘り込みがなく、確認面は地表から浅いことから、平安時代末の竪穴床面の可能性がある。この段階では再びやや西に偏向した主軸方向となる。

そのほか、特徴的な遺構に袋状土坑がある。7号土坑、96号ピットの2か所で、7号土坑からは縄文中期、狢沢式期の土器片が出土していることから、中期の屋外貯蔵穴の可能性も考えられるものの、長野・山梨県域には屋外貯蔵穴は希薄とされる。晩期末～弥生前期には屋外フラスコ状土坑が顕著で、韮崎市石之坪遺跡などに集中的な分布をみることができるが、形態的にそれらとは異なるようである。本遺跡で土器が出土している時期のうち、弥生以前のいずれかであろうが、ここでは中期狢沢式期の可能性が高いと推定するに留めたい。

本遺跡ではこのように長期にわたりいくつかの段階に居住域としての土地利用が見られるほか、古墳時代には畑地として、平安時代には溝を設置するなど、耕作地を取り込んだ集落のあり方を垣間見ることができる。

第2節　藤井平の縄文時代集落の変遷

今回の調査区内からは、縄文時代中期前半の狢沢式期の竪穴1軒（8号竪穴）が検出された。浅鉢を炉体土器に転用した炉をもつ推定6本柱の竪穴住居で、藤井平地域では、三宮地遺跡に次いで2例目の住居跡となった。そこで藤井平地域における縄文時代の状況について整理し、河川に面した低位面での居住活動のあり方、塩川との関連性を考えてみたい。

藤井平では本遺跡を含めてこれまで28か所以上で本調査が行われ、12か所で縄文時代の遺構・遺物が確認されている。中本田遺跡、堂の前遺跡、山影遺跡、上本田遺跡、前田遺跡、後田第2遺跡、北後田遺跡、後田堂ノ前遺跡、後田遺跡、三宮地遺跡、宮ノ前遺跡、中道遺跡である。時期的な変遷は次のとおりである（括弧内は遺構内外を問わず土器が出土した遺跡）。

諸磯b（上本田・後田第2・宮ノ前・後田堂ノ前）―上本田・後田堂ノ前で竪穴各1
諸磯c（上本田・宮ノ前）
十三菩提（上本田・宮ノ前）―宮ノ前で竪穴1・土坑1
五領ヶ台（山影・前田・北後田）―山影で焼人骨を伴う配石土坑1、北後田で土坑1
狢沢（後田　堂ノ前・三宮地）―竪穴各1
新道（後田）―埋甕
曽利Ⅰ（後田）―埋甕
曽利Ⅱ（北後田）―竪穴1
曽利Ⅲ（後田堂ノ前）
曽利Ⅳ（後田第2・北後田・後田・宮ノ前）―北後田で竪穴4、後田で竪穴3
曽利Ⅴ（中本田・上本田・後田第2・北後田・後田・宮ノ前）－北後田で竪穴4、後田で竪穴1、宮ノ前で竪穴1・埋甕
称名寺（中本田、宮ノ前）―宮ノ前で竪穴1
堀之内1（中本田・宮ノ前）―宮ノ前で敷石2
堀之内2（中本田・後田堂ノ前・後田）
加曽利B（前田・後田）
晩期前半（宮ノ前）
晩期後半（中道・中本田・堂の前・前田・三宮地・宮ノ前）―中道で竪穴1、宮ノ前で土坑1

このように藤井平では、縄文前期諸磯b式期以降、晩期末まで断続的、短期的な集落が営まれている。竪穴住居（敷石住居を含む）が認められるのは諸磯b・十三菩提・狢沢・曽利Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・堀之内・晩期末で、その頃居住域として安定化したことがわかる。中でも曽利Ⅳ・Ⅴ式には北後田・後田遺跡で竪穴の連続性があり、周辺地域同様に定住性の高まりが伺える。井戸尻～曽利Ⅰ式期に定住性が弱い点に関しては、台地面への指向が高まる時期と考えられることから、低地面での居住痕跡は少ないのであろう。逆に十三菩提式では台地面に遺跡が少ないことから、低地面への指向性が高まったのではないか。中期末から後期前半では台地面の利用は減少し、台地斜面から低地にかけて居住域する事例が多いことから、生業との関わりで居住域が大きく変化した可能性がある。こうした集落立地の変化は石器などの出土遺物の構成比との連動性が想定できるが、良好な検討材料に乏しく、また十分な検討も行っていない。

竪穴が単発的で連続性に乏しいのは、長期滞在に適さなかったためと考えられ、水辺に面した一時的な居

第３表　藤井平の遺跡群

遺跡名	内　　容	報告書	年
中本田	遺構なし。曽利Ⅴ・称名寺～堀ノ内2・晩期後半～末。称名寺が目立つ。	中本田・堂の前	1987
堂の前	遺構外より堀之内2・晩期後半～末土器片。晩期がやや多い。	中本田・堂の前	1987
山影	焼人骨を多量に伴う配石土坑（１号土坑）。五領ヶ台式期。	山影	1997
上本田	7号住（円形、諸磯ｂ～十三菩提式期）1軒。遺構外には諸磯ｂ・五領ヶ台・曽利Ⅴあり。	上本田	1992
前田	遺構外より五領ヶ台、加曽利EⅣ、加曽利B1、晩期末土器片出土。	前田	1988
後田第2	遺構外より諸磯b、狢沢、曽利Ⅳ～Ⅴ、加曽利Eあり。	後田第2	1996
北後田	五領ヶ台式期土坑1、曽利Ⅱ1軒、曽利Ⅳ4軒、曽利Ⅴ4軒。	北後田	1990
後田堂ノ前	溝状凹地より堀之内2、遺構外より曽利Ⅲ・Ⅴ・堀之内１。	後田堂ノ前	1997
後田	曽利Ⅳ3軒、曽利Ⅴ1軒、1号配石下より新道・曽利Ⅰ・曽利Ⅳ・Ⅴの野外埋甕やや多い。遺構外には藤内・曽利Ⅳ・堀之内２・加曽利Bあり。堀之内２の中空土偶あり。	後田	1989
三宮地	狢沢式期の竪穴1。配石遺構１、配石土坑8、土坑3。配石土坑の多くは晩期末。	三宮地	1998
宮ノ前	393号住（十三菩提？）、408号住（堀之内1？）、417号住（加曽利EⅣ～称名寺）、421号住（曽利Ⅴb）、単独埋甕（加曽利EⅣ）、土坑（十三菩提、晩期末）、遺構外（諸磯b・ｃ、曽利Ⅳ・Ⅴ・堀之内１・堀之内２・晩期前半～末）、晩期末多い。	宮ノ前	1992
中道	晩期末竪穴1	金山・下木戸・中道	1986

住地としての土地利用が縄文時代を通して主として行われたのであろう。

晩期末では、続く宮ノ前遺跡の弥生前期の水田出現との関連性が考えられ、低地面での稲作受容に先立つなんらかの農耕的な土地利用を想定することができ、居住域として積極的な利用が行われたことが窺える。

第３節　３号集石の分析

３号集石は直径1.2ｍ、深さ30cm余りの円形土坑で、内部には上層を中心として、直径90cmの範囲に140個の礫からなる集石が存在した。礫のすべてに何らかの被熱痕などがあったことから、屋外集石炉と考えられる。集石は平面・断面図を作図したのち、一括で取り上げたため、個々の礫の出土位置などは把握していない。礫の重量、大きさに関するデータは図５のとおりであるが、ここではそのデータを整理し、周辺遺跡のデータとの比較を行いたい。

礫は140個、総重量99.27kg、平均重量710ｇである。100ｇ単位での個数は200～800ｇが多く、中でも500ｇをピークとして400～500ｇが非常に多い。1kgを越える礫は少なく、とくに1.5kgを越えるとほとんどない状況となる。

長軸長の大きさ（1cm単位）で個数を数えると、6～10cmの範囲で9cm大をピークとし、9～12cm大が非常に多いことがわかる。

石材は140個中、安山岩111個（79%）、砂岩23個（16%）、花崗岩6個（4%）で、安山岩を主とする。これらの石材は塩川流域には普通に存在するものであるが、安山岩を意図的に選択した傾向が伺える。

表面の剥離、欠損が認められる礫は33個（24%）存在する。これらは非安山岩礫（砂岩・花崗岩）を主とし、砂岩・花崗岩の比率にほぼ対応している。安山岩でない礫は被熱によって破損しやすいことがわかる。

本遺跡例との比較事例として、北杜市高根町社口遺跡の４基の集石炉を取り上げる。社口遺跡381・382・390・398号ピットで、398号ピットの炭化物年代測定では4,470 ± 120BPという結果が得られ、曽利Ⅰ式期頃の所産と推測されている。社口遺跡例ではピット底面に平石を組み合わせた配石があったが、本遺跡例には存在しない。また社口遺跡では礫が非常に強い熱のため表面が発泡状態となったものが多く認められているが、本遺跡にはそうした例はない。したがって、時期、構造、特徴は同一ではないものの、屋外炉という点で礫の構成比を比較したい。

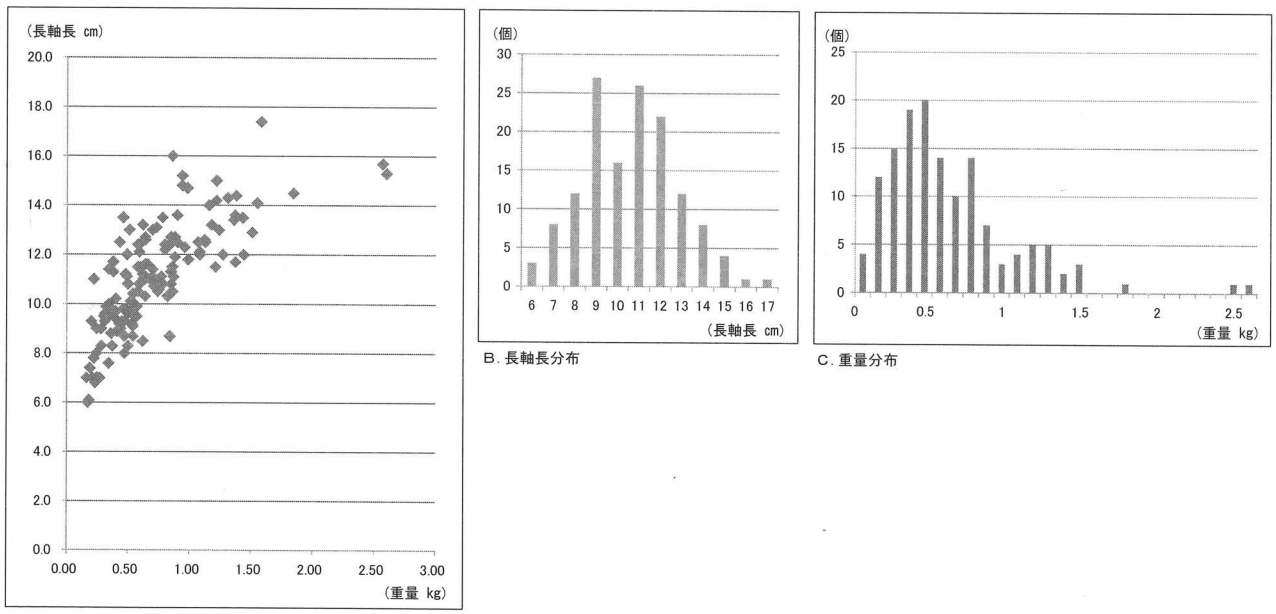
石材については社口遺跡の報告中には記載がないが、安山岩を主とする点で共通する。個数は398号ピットで231個、139.3kgであるが、覆土中位に配石があることから、集石炉の作り替えが行われていて、２基分の礫を合計した数となっている。ほかの３基のピットは５～55個と少なく、礫を取り出した状態と推測できよう。398号ピットでは、大きさ８～12cm、重さ300～600gを主とし、おおむね本遺跡例と合致した特徴をもつ。被熱状況については８割以上に欠損があり、黒変礫９割、発泡礫も約半数に及ぶ。安山岩でも加熱温度が高いと見られることから、本遺跡例よりも激しく破損している様子が伺える。

社口遺跡例とは時期・構造が同じではなく、礫の数も異なっているが、礫の大きさの傾向は同じであり、したがって重量も同じような分布傾向を示すことがわかった。土坑下部の配石の機能、時期などを検討する必要もあるが、ここでは礫の大きさに共通性があることを指摘するにとどめ、機会を改めて検討したい。

発掘調査にあたって株式会社コメリおよび下路正展氏にはご理解・ご協力を賜わり、円滑な調査が遂行できたことに感謝したい。また調査・整理作業に参加した多くの方々、その他関係者の皆様のご協力により、本書の刊行をみたことに対しお礼を申し上げ、感謝の意を表したい。

【参考文献】

山下孝司　1986『金山遺跡・下木戸遺跡・中道遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1987『中本田遺跡・堂の前遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1988『前田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1989『後田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1990『北後田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1991『北下条遺跡―1982（昭和57）年度埋蔵文化財発掘調査報告書―』韮崎市教育委員会
山下孝司　1991『下横屋遺跡―山梨県韮崎市下横屋遺跡発掘調査報告書―』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
山下孝司　1991『堂ノ前第2遺跡・北堂地遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』韮崎市教育委員会・峡北地域振興局
山下孝司　1992『堂地遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1992『上本田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1993『堂地遺跡Ⅱ　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1993『宮ノ前第3遺跡　宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
山下孝司　1994『立石遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・峡北土地改良事務所
山下孝司　1995『宮ノ前第4遺跡　店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
伊藤正彦　1996『後田第2遺跡　JA北藤井支所建設工事に伴う発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会・韮崎市教育委員会
山下孝司　1996『琵琶塚遺跡　JA梨北藤井SS建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
山下孝司　1996『坂井堂ノ前遺跡　藤井郵便局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
櫛原功一　1997『社口遺跡第3次調査報告書』高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団
山下孝司　1997『宮ノ前第5遺跡　韮崎市立北東児童センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会
山下孝司　1997『山影遺跡　送電線仮鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
伊藤正彦　1997『後田堂ノ前遺跡　韮崎市文化ホール前通り線建設工事に伴う発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会・韮崎市教育委員会
山下孝司・閏間俊明　1998『三宮地遺跡　韮崎市文化ホール前通り線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会・韮崎市教育委員会
秋山圭子・閏間俊明　1999『上横屋遺跡　店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
山下孝司　2001『下横屋第2遺跡　宅地開発にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
閏間俊明　2003『下横屋遺跡Ⅲ　藤井町北下条字下横谷526番地地点　宅地分譲地内道路敷設に伴う緊急発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会
閏間俊明　2003『下横屋遺跡Ⅳ　藤井町南下条字水無421番地地点　宅地分譲地内道路敷設に伴う緊急発掘調査報告書』韮崎市遺跡調査会
閏間俊明　2005『下横屋遺跡第6地点　藤井町南下条1558番地外地点　宅地分譲地内道路敷設に伴う緊急発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・韮崎市遺跡調査会
宮澤公雄　2007『上横屋遺跡第3地点　藤井町北下条字上横屋433番地地点　宅地分譲地内道路敷設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』韮崎市教育委員会・財団法人山梨文化財研究所



A. 長軸長/重量分布　B. 長軸長分布　C. 重量分布

図5　集石データ

第４表　土器類観察表

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高cm	整形　外/内/底	色調　外/内	胎土(量A多～D無，鉱物・岩石名)	残存率	焼成	注記	備考
17	1竪	1	土師	坏	古墳	(12.0)/-/3.6	ナデ/磨き・ナデ/削り	鈍い黄橙/黒褐～赤橙	C　赤・長・石・雲微	20	硬	255	内外面赤彩　外面摩滅
17	1竪	2	土師	坏	古墳	(13.0)/-/-	磨き・削り/磨き/-	鈍い黄橙/黒	D　赤・黒・雲微	5	硬	184	内面～外面口縁黒色
17	1竪	3	土師	坏	古墳	(13.8)/-/-	削り・磨き/ナデ・磨き/-	鈍い褐	C　赤・雲微	5	硬	床下983	
17	1竪	4	須恵	蓋	古墳	(12.8)/-/3.0	ナデ・回転削り/ナデ/-	灰	C　長やや多	40	硬	185・191・193・194	
17	1竪	5	土師	小形甕	古墳	(13.6)/-/-	ナデ・縦削り/ナデ/-	橙	C　長・石・角・赤	20	硬	262	内外面一部黒変
17	1竪	6	土師	甕	古墳	(17.8)/-/-	ナデ・縦削り/ナデ/-	褐灰/灰黄褐	C　長・角・石	－	硬	537	口縁内面薄く変色
17	1竪	7	土師	甕	古墳	-/-/-	縦ハケ・削り/横ハケ/-	暗赤褐/鈍い褐	B　長大・石・角・雲	－	硬	257・264・床下986・床下995	内面変色　外面一部黒変
17	1竪	8	土師	壺?	古墳	-/9.5/-	削り/ナデ/削り	浅黄橙/底黒	C　長・黒	－	硬	188・189	底部やや丸底
17	1竪	9	土師	壷	古墳	-/5.5/-	削り/ナデ/削り	橙/浅黄橙	C　長・石・雲・角	－	硬	265	外面赤彩・黒斑
17	2竪	1	土師	坏	弥生?	9.0/5.0/5.1	ナデ/ナデ/ナデ?	鈍い橙	C　長・石・赤・角・雲微	完	硬	617	内外面わずかに赤彩
17	2竪	2	須恵	坏	奈良?	-/6.0/-	ナデ/ナデ/糸切	灰	C　長	20	硬	213	
17	2竪	3	土師	甕	弥生?	-/(7.0)/-	ハケ/ナデ/ナデ	明赤褐/灰褐	B　デ・長・石・角・雲微	－	硬	203	内面変色
17	3竪	1	土師質	高台杯	平安末	-/(7.6)/-	ナデ/ナデ/ナデ	鈍い赤褐/暗褐	B　雲多・長	10	硬	275	底面粘土?付着
17	3竪	2	土師	甑	弥生末	-/(5.4)/-	縦削り/横ハケ/孔	鈍い橙/黒褐	C　長・赤・雲	－	硬	269	内面黒変　孔は外から中径3mm
17	3竪	3	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	角押・隆線/ナデ/-	暗褐/橙	B　長	－	硬	274	狢沢式
18	4竪	1	土師	坏	奈良	(14.2)/10.1/3.9	ナデ・暗文/ナデ・暗文/削り	明赤褐	C　赤・長	60	硬	316・325・312	底部外面にヘラガキ状沈線あり（削り時の擦痕と判断）
18	4竪	2	土師	坏	奈良	(15.0)/(9.6)/3.5	ナデ/ナデ・磨き/削り	橙	B　長・石・雲	30	硬	301・975	底部外面に黒斑
18	4竪	3	土師	坏	奈良	-/7.3/-	ナデ/磨き/削り・指紋	明赤褐/灰褐	D　赤・雲微	15	硬	308	内面薄く黒変　底部外面線刻
18	4竪	4	土師	坏	奈良	-/-/-	-/磨き/ヘラ切後削り	橙	D　赤	－	硬	298	底部外面線刻
18	5竪	1	縄文	深鉢	縄文前	-/12.8/-	縄文後横位竹管/ナデ/無文	暗褐/明赤褐	C　長・角	－	硬	335・392・769・772・773・790・791・793・800・同一(331・332・334・329・770・771・793・799)	底部外面凹凸顕著　灰付着
20	8竪	1	縄文	深鉢	縄文中	(40.0)/-/-	角押・隆線/ナデ/-	褐/黄褐	B　デ・赤	－	硬	896・924・925・926・927・932・933	外面薄く黒変　狢沢式
20	8竪	2	縄文	深鉢	縄文中	(28.0)/-/-	角押・隆線/ナデ/-	黒褐/鈍い黄褐	B　長・赤・石	－	硬	636・693・714・734・918・999	狢沢式
20	8竪	3	縄文	浅鉢	縄文中	39.6/11.0/17.0	ナデ・隆線・角押/磨き/ナデ	明黄褐	B　長・デ・角・赤	60	やや軟	872・873・874・898・921・炉1000	狢沢式　底外縁摩耗
21	8竪	4	縄文	耳付壷	縄文中	-/-/-	沈線/ナデ/-	にぶい黄橙	C　長・デ・赤	－	硬	627	曽利Ⅳ～Ⅴ式
21	8竪	5	縄文	浅鉢	縄文中	-/(14.0)/-	ナデ/磨き/ナデ	橙/暗橙	B　デ・長・赤・角・石	－	硬	717・738・875・877	内面磨き良好
21	8竪	6	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	角押・沈線・抉り/ナデ/-	鈍い褐	C　長・角・雲・デ	－	硬	902	
21	8竪	7	縄文	浅鉢	縄文中	-/-/-	角押・沈線・刻み/磨き/-	暗橙	B　長・デ・雲	－	硬	698	
21	8竪	8	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	角押/磨き/-	暗褐	C　花・角	－	硬	882	
21	8竪	9	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	角押/磨き/-	鈍い黄褐	C　長	－	硬	8竪	10と同一　狢沢式
21	8竪	10	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	隆線・角押/磨き/-	鈍い黄褐	C　長	－	硬	922	9と同一
23	9竪	1	須恵	坏	奈良?	-/5.8/-	ナデ/ナデ/糸切	灰白	C　デ・石	10	硬	1420	底部外面糸切のまま未調整　指紋
23	9竪	2	土師	ロクロ小形甕	奈良?	(15.7)/-/-	ナデ/ナデ/-	褐	C　デ・角・長	－	硬	670	
23	10竪	1	土師	ロクロ甕	奈良?	(22.8)/(8.4)/37.3	ナデ/ナデ/木葉痕	明赤褐/暗赤褐	B　長・雲・赤・石	40	硬	741・742・743・1160・1161・1162・1165・竈1584・竈1585・竈1594・同一(竈1586・竈1587)	外面薄く黒変・灰付着 内面変色
23	10竪	2	土師	甑?	奈良?	-/(12.6)/-	ナデ/ナデ/ナデ	鈍い褐	B　長・角・赤・雲	－	硬	1164	内面指頭痕
23	10竪	3	須恵	甕	奈良?	-/-/-	タタキ/ナデ/-	灰褐/鈍い褐	C　長	－	硬	1163	内面黒色塗料?　外面沈線（ヘラ描き）
23	10竪	4	須恵	甕	奈良?	-/-/-	タタキ/ナデ/-	灰	D　白	－	硬	1168	
24	13竪	1	縄文	深鉢	前?	-/-/-	縄文/ナデ/-	明黄褐	B　デ・長・赤	－	硬	851・852・853・854	
24	15竪	1	土師質	皿	平安末	-/(6.0)/-	ナデ/ナデ/糸切	褐	C　雲やや多	－	硬	909	
24	15竪	2	土師質	坏?	平安末	(15.6)/-/-	ナデ/ナデ/-	褐	C　雲やや多	－	硬	913	
24	15竪	3	土師質	甕	平安末	-/-/-	削り・ナデ/ナデ/-	暗褐/褐	B　角・長・赤・石	－	硬	916	内面変色　外面薄くスス付着
24	16竪	1	土師質	小皿	平安末	(9.0)/(5.0)/2.0	ナデ/ナデ/糸切	鈍い橙/黄橙	C　雲やや多	25	硬	956	
24	16竪	2	土師質	高台坏?	平安末	(16.0)/-/-	ナデ/ナデ/-	鈍い赤褐/黒褐	D　雲やや多	－	硬	941	内面黒色（内黒土器?）
24	16竪	3	須恵	坏	奈良?	-/(9.0)/-	ナデ/ナデ/削り	灰赤/灰褐	D　白	－	硬	950	
24	16竪	4	土師	小形甕	奈良?	(19.0)/-/-	ナデ/ナデ/-	鈍い橙	C　長・赤・角	－	硬	943	内外面薄く変色
24	16竪	5	土師	ロクロハケメ甕	奈良?	-/-/-	ナデ・ハケメ/ナデ/-	橙	B　長やや多・赤・角	30	硬	1396・1399・1400・1401・1402・1403・1642・1643・1644・1645・1647・1648・1649・1652・1688・1691・1692・1693・1694・1689	外面灰・スス付着
25	18竪	1	須恵	蓋	奈良	12.5/8.4/3.5	ナデ/ナデ/削り	暗灰	C　長	完	硬	1544	
25	18竪	2	土師	甑?鉢	奈良	(7.8)/-/-	ナデ/ナデ/-	白橙/鈍い黄橙	B　長・石・赤	－	硬	1559	外面被熱により変色
25	18竪	3	土師	甕	奈良	(17.2)/7.3/28.2	ハケメ/ナデ・ハケメ/木葉痕	明赤褐/鈍い褐	C　角やや多・デ・赤	50	硬	1543	内面薄く変色　胴下外面灰付着
25	19竪	1	土師	壺?ト形甕	弥生?	-/(4.0)/-	ナデ/ナデ/ナデ	鈍い褐/褐灰	C　長・石	－	硬	1576	
25	1土	1	土師	坏	奈良	-/(10.0)/-	ナデ・磨き/ナデ・横磨き/削り	橙	C　赤・長・雲	－	硬	246	底部外面剝離
25	2土	1	縄文?	深鉢	晩?	-/-/-	条痕文/ナデ/-	鈍い黄橙/橙	A　長・デ・石・赤	－	硬	181	
25	5土	1	縄文	深鉢	中	-/-/-	角押・隆線/ナデ/-	暗褐	B　長・デ・角・石	－	やや硬	786	狢沢式
25	7土	1	縄文	深鉢	中	-/-/-	角押/ナデ/-	明赤褐	B　デ・長・雲・角	－	硬	973	狢沢式
26	8土	1	土師質	坏	平安末	14.0/5.9/4.4	ナデ/ナデ/糸切	橙	C　雲やや多・赤	70	硬	979	
26	8土	2	土師質	坏	平安末	13.7/5.4/4.2	ナデ/ナデ/糸切	明赤褐	C　雲やや多	60	硬	978	
26	8土	3	土師質	高台坏	平安末	(17.8)/(9.0)/6.5	ナデ/ナデ/付高台	鈍い赤褐	C　雲多・長	30	やや軟	980・981・982	
26	9土	1	縄文	深鉢	中	-/-/-	角押・ナデ/ナデ/-	明赤褐/暗褐	D　雲・長	－	硬		狢沢式
26	11土	1	縄文	深鉢	後期	47.2/10.0/52.7	沈線・隆線・貼付・刺突・刻み/ナデ/ナデ	鈍い橙	B　雲・長・チ	70	軟	1588・1589・1590・1591・1592・1593・1597・1598・1600・1602・8トレ1603・1604・1605・1607・1661・1664・1665・1666・1673・1676・1681・1682・1684・1695	堀之内1式　内面底部付近煮沸痕
27	13土	3	縄文	深鉢	縄文中	(38.4)/-/-	縄文・竹管文・隆線・角押文/ナデ/-	鈍い赤褐	A　長・デ・石	－	やや軟	1636	脆い　狢沢式3段階～新道式1段階
27	8ピ	1	縄文	深鉢	縄文後	-/-/-	隆線・押圧・沈線・縄文/ナデ/-	橙/鈍い橙	B　長・円礫・デ	－	硬	247	堀之内式
27	35ピ	1	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	縄文・隆帯/ナデ/-	褐/明黄褐	C　長・赤	－	硬	405・406	加曽利E式
27	40ピ	1	縄文	深鉢	中～後	-/9.4/-	ナデ/ナデ/ナデ	橙	B　長やや多・石・赤・雲	－	硬	407	

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高cm	整形　外/内/底	色調　外/内	胎土(量A多～D無，鉱物・岩石名)	残存率	焼成	注記	備考
27	43ピ	1	縄文	深鉢	縄文中	(32.5)/-/-	ナデ/ナデ/-	明黄褐	C　デ・角	-	硬	788	
27	43ピ	2	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	隆帯・縄文/ナデ/-	橙/灰橙	C　長・赤	-	硬	373・374	内面変色　加曽利Eか?
27	43ピ	3	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	隆帯・ハの字/ナデ/-	橙/灰褐	C　長大・角	-	硬	788	曽利Ⅴ式　X把手甕
27	44ピ	1	縄文	深鉢	縄文中	(31.5)/-/-	沈線・ハの字/ナデ/-	鈍い黄橙	C　長・雲	-	硬	787	曽利Ⅴc式
27	44ピ	2	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	ハの字/ナデ/-	褐	C　長・石・角・雲	-	硬	382	曽利Ⅴ式
27	49ピ	1	縄文	深鉢	中～後	-/-/-	ナデ/ナデ/-	鈍い黄橙	C　長大・石	-	硬	752	
27	50ピ	1	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	縄文・竹管/ナデ/-	明赤褐	B　長・雲	-	硬	574	諸磯b式か
27	66ピ	1	弥生?	壷?	弥生後	-/-/-	ナデ/ナデ・横ハケ/-	鈍い黄橙	C　長・雲・赤	-	硬	538	
27	80ピ	1	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	蛇行竹管・沈線/磨き/	鈍い黄	C　長・赤・角・デ	-	硬	728	
27	85ピ	1	灰釉陶器	皿	平安	-/(7.6)/-	ナデ/ナデ・釉/糸切付高台	灰白	D	-	硬	1381	見込み部摩耗か　周縁打ち欠き?
27	96ピ	1	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	隆線・八の字/ナデ/-	橙/暗褐	C　長・角・赤	-	硬	1379	曽利Ⅴb式
27	96ピ	2	縄文	深鉢	?	-/-/-	縄文/ナデ/-	鈍い褐	C　デ・角やや多・石	-	やや軟	1380	
27	116ピ	1	縄文	深鉢	?	-/-/-	縄文/ナデ/-	暗褐/鈍い黄橙	A　長・円礫・石	-	硬	1539	
28	117ピ	1	縄文	深鉢	縄文中	(29.6)/-/-	角押・隆帯/ナデ/-	橙	B　長・角	30	硬	1713・1714・1719	狢沢式　外面薄く黒変　内面変色
28	117ピ	2	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	角押・隆線/ナデ/-	暗橙/橙	C　デ・赤	-	硬	1709	狢沢式
28	117ピ	3	縄文	浅鉢?	縄文中	-/(11.0)/-	指頭痕/ナデ/ナデ	橙/黒褐	A　デ多・長	-	硬	1707	狢沢式?
28	118ピ	1	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	角押/ナデ/-	暗赤褐/暗褐	B　長多	-	やや硬		118ピ2と同一　狢沢式I段階
28	118ピ	2	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	角押・隆線/ナデ/-	暗褐	B　長多・石	-	やや硬		118ピ1と同一
28	1溝	1	縄文	深鉢	前～中	(16.0)/-/-	ナデ/ナデ/-	明赤褐	B　長・角・石	-	硬	10トレ1溝523	
28	1溝	2	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	縄文・竹管/ナデ/-	鈍い黄褐/赤褐	B　長・デ・角・円礫	-	硬	360	諸磯b式
28	1溝	3	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	隆帯・ナデ/ナデ/-	明赤褐	C　デ・角・赤	-	硬	10トレ1溝524	藤内式?
28	1溝	4	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	沈線・隆線/ナデ/-	明赤褐/暗褐	B　デ・角・円礫	-	硬	2トレ1溝414	狢沢式?
28	1溝	5	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	縄文・沈線・ナデ/ナデ/-	黄橙/鈍い黄橙	B　長・石・雲	-	硬	357	加曽利EⅣ式?
28	1溝	6	縄文	深鉢	縄文後	-/-/-	縄文・沈線/ナデ/-	橙・鈍い橙	C　長・角・石	-	硬	2トレ418	
28	1溝	7	弥生	甕	弥生後	-/-/-	櫛描波状文/ナデ/-	鈍い黄橙	D　長	-	硬	347	
28	1溝	8	縄文	深鉢	縄文晩	-/-/-	条痕/ナデ/-	鈍い明褐	B　長・石・円礫	-	硬	2トレ417	晩期末か
28	2溝	1	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	ナデ/ナデ/-	暗灰黄/黒褐	C　デ・長・赤	-	やや軟	748	内面黒変　外面変色
28	2溝	2	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	ナデ/ナデ/-	鈍い黄灰/鈍い褐	C　長・石	-	硬	750	断面にマメ状圧痕
28	2溝	3	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	ナデ・低隆帯・沈線/ナデ/-	鈍い黄橙/鈍い橙	C　長	-	硬	750	2溝2に類似
28	3溝	1	弥生?	深鉢 甕	?	-/(8.0)/-	ハケメ・削り/ナデ/ナデ	鈍い橙/鈍い黄橙	B　長・角・デ	-	硬	1474	底部摩耗
29	1谷	1	土師	坏	古墳後	(12.2)/-/-	ナデ・磨き/ナデ/-	黒橙	D　赤	10	やや軟	101	内外面黒彩
29	1谷	2	土師	坏	古墳後	(12.9)/-/-	ナデ・磨き/ナデ・磨き/-	黒橙	C　長・円礫	10	硬	1トレ1溝100	内外面黒彩
29	1谷	3	須恵	坏	古墳後	(11.6)/-/-	ナデ/ナデ/-	褐灰/灰黄褐	C　長	10	硬	1トレ1溝92	
29	1谷	4	土師質	大形坏	平安末	-/(7.0)/-	ナデ/ナデ/糸切	明褐	C　雲やや多	-	硬	1トレ1溝	
29	1谷	5	土師?	甕	古墳?	-/(6.8)/-	ナデ/縦ナデ/圧痕	暗赤褐/黒褐	C　赤・長・石	-	硬	1トレ1溝97	
29	1谷	6	土師	甑	古墳?	-/5.5/-	縦ナデ/横ハケ/ナデ	鈍い褐	B　長・石	-	硬	1トレ1溝105	底部中央焼成前孔　径1.7cm
29	2谷	1	縄文	深鉢	縄文後	(41.0)/-/-	沈線・刺突・ナデ/ナデ/-	鈍い黄橙	B　長大・デ・角	-	やや硬	1210・1214・1218・1222・1232・1238・1257・1259・1260・1262・1263・1269・1274・1279・1283・1286・1306・1311・1327・1331・1332・1362・1363・同一(1204・1206・1207・1229・1236・1248・1249・1255・1272・1278・1289・1304・1337・1339・1356・1374)	
29	2谷	2	縄文	深鉢	縄文後	(38.0)/-/-	ナデ/ナデ/-	鈍い橙/黄褐	A　長大多・赤・角・石	-	やや硬	1185・1186・1188・1293・1296・1297・1298・1299・1301・1302	外面灰?付着
29	2谷	3	縄文	浅鉢	縄文後	-/-/-	沈線・隆線・貼付・刺突・ナデ/ミガキ/-	黒灰	D　白	-	硬	1183・同一 (1175・1247)	外面コゲ付着
30	2谷	4	縄文	深鉢	縄文後	(34.4)/-/-	ナデ・削り/ナデ/-	鈍い黄橙	B　長・角	-	やや軟	1193・1203・1212・1219・1220・1224・1256・1266・1267・1270・1280・1285・1314・1317・1323・1324・1329・1342・1350・1353・1365・　同一(1213・1360・1355)	
30	2谷	5	縄文	深鉢	縄文後	-/11.0/-	ナデ・沈線/ナデ/ナデ	暗赤褐/明赤褐	D　デ	-	硬	1366・1367・1368・1369・1370・1653・1654・1655・1657	底部外面灰付着　堀之内式
30	2谷	6	縄文	深鉢	縄文後	-/9.0/-	ナデ/ナデ/ナデ	鈍い黄橙/灰褐	B　長・デ・礫	-	やや軟	1237・1265・1349	底部外面灰付着
30	2畝	1	土師	甕	古墳後	-/-/-	削り/横ハケ/-	鈍い赤褐	B　デ大多・石・雲・赤	-	硬	554	
30	3畝	1	土師	坏	古墳後	-/-/-	削り・磨き/ナデ/-	黒褐	D　長	-	硬	555・3畝	内外面黒変
30	遺構外	1	縄文	深鉢	縄文前	(28.6)/-/-	縄文・竹管・刻み/ナデ/-	赤褐	B　長やや多・角	-	硬	456・481	諸磯b式
30	遺構外	2	縄文	深鉢	縄文前	(26.6)/-/-	縄文・竹管/ナデ/-	鈍い褐	B　長やや多・石	-	硬	423・426・435・465・571・569	諸磯b式
30	遺構外	3	縄文	浅鉢	縄文前	-/(13.0)/-	浮線文・刻み/ナデ/圧痕	暗褐/黒褐	C　礫・花・長	-	硬	473・573	諸磯b式
30	遺構外	4	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	縄文・竹管/ナデ/-	橙	B　長・花	-	硬	427・448	
30	遺構外	5	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	貼付・縄文	暗褐/暗橙褐	C　長・赤	-	硬	519	口縁小波状
30	遺構外	6	縄文	有孔土器	縄文前	-/-/-	竹管・隆線・刻み・孔/ナデ/-	暗橙/橙	C　長・花	-	硬	1453・同一(1457)	
30	遺構外	7	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管・突起/ナデ/-	鈍い褐	C　デ・角	-	硬	1488	
31	遺構外	8	縄文	深鉢	縄文前	-/-/-	竹管・縄文/ナデ/-	暗褐/赤褐	C　長・雲・角・石	-	硬	1524	
31	遺構外	9	縄文	深鉢	縄文前	-/(10.8)/-	縄文・隆線/ナデ/ナデ	明赤褐/黒褐	C　赤・石・角	-	硬	424	底面に灰付着　内面黒色
31	遺構外	10	縄文	深鉢	縄文前	-/7.8/-	ナデ・竹管/ナデ/ナデ	明赤褐	B　花大・礫大・雲	-	やや硬	780・781・784・785	
31	遺構外	11	縄文	深鉢	縄文中	(39.0)/-/-	角押・隆線・刻み/ナデ/-	鈍い赤褐	C　長・デ・角	-	硬	1417	外面薄く黒変　狢沢式
31	遺構外	12	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	隆線/ナデ/-	鈍い橙	C　長・デ	-	硬	1490	
31	遺構外	13	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	角押・隆線/ナデ/-	鈍い黄褐	C　長・赤	-	硬	586	
31	遺構外	14	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	角押・隆線/ナデ/-	暗赤褐	B　長・花	-	硬	1505・1506	外面薄く変色
31	遺構外	15	縄文	深鉢	縄文中	-/(15.6)/-	角押/ナデ/磨き	橙/暗橙	B　長・角	-	硬	445	狢沢式
31	遺構外	16	縄文	深鉢	縄文中	-/(11.6)/-	ナデ/ナデ/ナデ	橙	A　デ・礫・赤	-	軟	602	内面変色
31	遺構外	17	縄文	深鉢	縄文中	21.0/(7.2)/34.0	沈線・ハの字文/ナデ//ナデ	褐	C　長・石・角・赤	80	硬	1001・1020	底部外面灰付着　胴外上半黒変　曽利Ⅴ式
32	遺構外	18	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	櫛歯条線・沈線/ナデ/-	黄橙/暗橙	B　長大多・角・石	-	硬	820	曽利Ⅳ式
32	遺構外	19	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	櫛歯刺突・低隆帯・沈線/ナデ/-	橙	C　赤・デ・角	-	硬	575・576	曽利Ⅴ式
32	遺構外	20	縄文	深鉢	縄文中	-/-/-	縄文・隆帯/ナデ/-	鈍い黄橙	C　長・赤・雲	-	硬	291	加曽利E式
32	遺構外	21	縄文	深鉢	中～後	(12.0)/-/-	沈線・磨き/ナデ/-	暗褐	C　長	-	硬	1451	外面薄くススト付着
32	遺構外	22	縄文	深鉢	縄文中	(11.8)/-/-	沈線・櫛歯八の字/ナデ/-	橙	C　長・石	-	硬		曽利Ⅴ式
32	遺構外	23	縄文	深鉢	縄文後	-/-/-	沈線/ナデ/-	暗橙/鈍い橙	C　長・デ	-	硬	1489	

図	地点	No.	種別	器種	時期	口/底/高cm	整形　外/内/底	色調　外/内	胎土(量A多～D無，鉱物・岩石名)	残存率	焼成	注記	備考
32	遺構外	24	縄文	深鉢	縄文中	-/6.0/-	縄文・沈線/ナデ/台付	明赤褐/暗褐	B　長・雲	-	硬	1502	台に3つの透かし孔　2次整形　加曽利E　内面変色
32	遺構外	25	縄文	浅鉢	中～後	-/(16.0)/-	横削り/ナデ/ナデ	鈍い赤褐	B　デ・長・角	-	硬	1422	
32	遺構外	26	縄文	深鉢	縄文晩	(39.4)/-/-	隆線・刻み・ナデ/ナデ/-	暗褐/赤褐	C　長・花・角	-	硬	140・1134・1138・1143・1141	
32	遺構外	27	縄文	深鉢	縄文晩	(22.0)/-/-	隆線・刻み・ナデ/ナデ/-	橙	C　長・角・デ	-	硬	234	
32	遺構外	28	弥生	壺	弥生後	-/5.6/-	縦磨き/磨き/磨き	赤褐	D　白	-	硬	1トレ	内外面赤彩　粒状圧痕多
32	遺構外	30	弥生	甕	弥生後	(18.0)/-/-	縦ハケ・刻み/横ナデ/-	鈍い褐	C　長・石	-	硬	10トレ1582	
33	遺構外	31	土師	黒色坏	平安	-/6.0/-	ナデ/磨き/糸切	黒	D　長	-	硬	1068・1072	内外面黒色
33	遺構外	32	土師	鉢?	古墳後	-/-/-	削り/ナデ・磨き/削り	暗褐/鈍い赤褐	D　赤	-	硬	3トレ1122	底部丸底
33	遺構外	33	土師	甕	古墳後	-/-/-	縦横ハケ/横ハケ/-	暗橙/橙	C　長・赤・石	-	硬	1532	
33	遺構外	34	土師	壺	古墳後	(12.0)/-/-	ナデ/ナデ/-	茶褐/暗褐	C　長・石・赤	-	やや硬	3トレ168	鎖付着
33	遺構外	35	土師	甕	古墳後	(20.0)/-/-	縦ハケ/横ハケ/-	橙	D　赤	-	硬	1080・1119・1129	坏系の胎土
33	遺構外	36	土師	甕?	古墳後	-/-/-	削り・縦ハケ/横ハケ/-	橙/明赤褐	C　長大・石・赤	-	硬	3トレ127・129	
33	遺構外	37	弥生?	甕	弥生後	-/7.0/-	縦ハケ/ナデ/ナデ	暗橙/鈍い橙	C　長・雲	-	硬	3トレ141	
33	遺構外	38	土師	甕	古墳後	-/7.0/-	縦削り/ナデ/木葉痕	浅黄橙	A　長・赤	-	やや硬	3トレ1102・1107・1121	
33	遺構外	39	土師	鍋?	平安末?	-/(14.8)/-	ナデ/ナデ/木葉痕?	鈍い褐/橙	C　長・石・赤	-	硬	8トレ1432・1516・1517・1518・1522・同一(1514・1519)	底部内面オコゲ　底部外面灰
33	遺構外	40	土師質	小皿	平安末	8.2/4.4/2.1	ナデ/ナデ/糸切	橙	C　雲やや多	50	硬	5トレ960	
33	遺構外	41	土師質	高台皿	平安末	-/7.0/-	ナデ/ナデ/付高台	鈍い褐	D　雲	-	硬	表彩	
33	遺構外	42	青磁	碗	中世	-/(7.0)/-	削り/ナデ/削り	灰白	D	-	硬	13トレ397	内外面釉
33	遺構外	43	須恵	甕	奈良	-/-/-	叩き/当て痕・条痕/-	灰白	D　白	-	硬	15トレ231	断面火ぶくれ

第５表　土製品他観察表

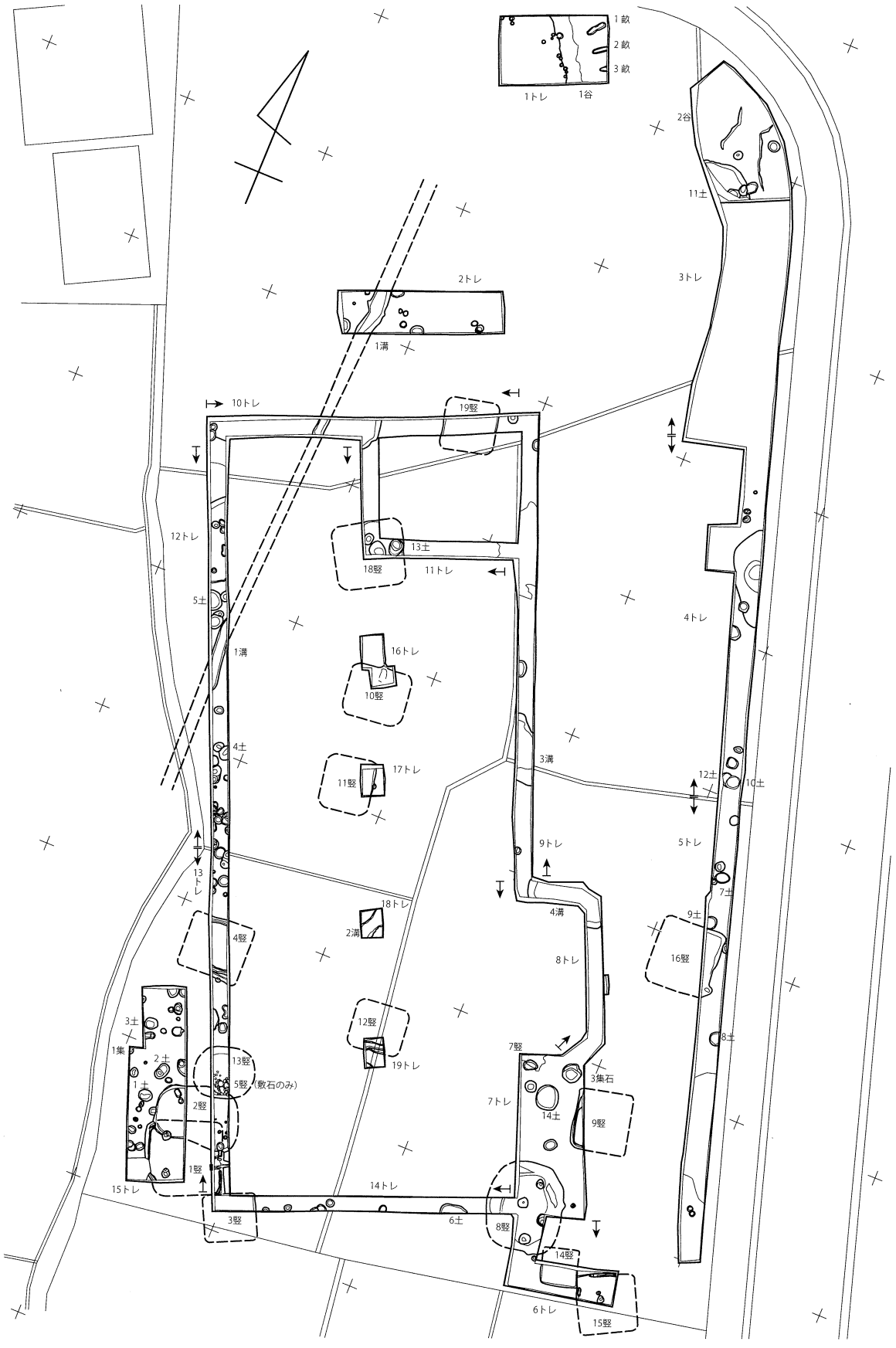
図	地点	No.	種別	時期	長/幅/厚cm 口/底/高cm	整形技法　外/内/底	色調　外/内	胎土(A多～D無)	焼成A良～D不良	残存率	重さg	注記	備考
26	13土	1	土偶	縄文中	7.2/3.7/2.6	ナデ・抉り	橙	C　白・黒	やや軟	40	42	1630	胴部片　脚部はもともと無
27	115ピ	1	小形浅鉢	縄文	(13.4)/(5.4)/5.7	ナデ/ナデ/ナデ	鈍い橙/黒	B　長・石	硬	15	43	1537・1538	
32	遺構外	29	台付土器	縄文前	-/5.4/-	刺突/ナデ/ナデ	橙/暗橙	B　デ	硬	50	107	421	脚部円形刺突
33	遺構外	44	土偶	縄文中?	4.9/4.8/2.3	ナデ・沈線	鈍い黄褐	C　長・赤	硬	-	38	455	頭部か

第６表　石器類観察表

図	地点	No.	分類	長/幅/厚cm	g	石材	色調	注記	備考
17	2竪	4	磨り石	20.1/9.1/4.0	750	安山岩	灰白	214	自然礫　表面弱い磨り
17	2竪	5	磨り石	10.7/8.0/3.6	470	安山岩	灰黄	215	自然礫　表裏面磨り
17	2竪	6	磨り石	14.3/8.2/5.0	820	安山岩	灰黄	217	上下端部叩き　表面磨り
17	2竪	7	磨り石	11.4/5.4/4.8	473	安山岩	灰黄	221	自然礫　表面弱い磨り
17	2竪	8	凹石	13.8/7.6/6.2	960	安山岩	灰白	216	表裏面2面に浅い凹み
18	5竪	2	磨り石	10.4/7.7/5.8	698	安山岩	赤灰	805	表裏面2面に凹み　左側面磨り
18	5竪	3	石皿	39.1/33.5/10.8	20300	安山岩	浅黄	766	裏面に凹み
19	5竪	4	台石	39.5/32.4/12.6	21300	安山岩	灰	5竪	磨り面は弱い
19	5竪	5	台石	39.6/28.4/11.4	22800	安山岩	灰黄	5竪	石皿状の浅い凹み　弱い磨り
21	8竪	11	打斧	12.2/5.6/2.2	145	砂岩	暗灰	653	完存
21	8竪	12	打斧	11.6/6.5/1.8	160	砂岩	暗オリーブ灰	684	刃部強く摩耗　裏面に自然面
21	8竪	13	打斧	11.6/3.6/1.05	67	砂質頁岩	灰	662	先端・中央欠損
21	8竪	14	打斧	8.8/5.8/1.0	90	ホルンフェルス	浅黄	736	下半欠損
21	8竪	15	横刃石器	5.8/10.0/2.5	142	頁岩	暗灰	887	
21	8竪	16	横刃石器	9.2/13.6/3.1	450	砂質頁岩	暗灰	889	
21	8竪	17	磨り石	11.3/8.1/4.0	520	安山岩	褐灰	739	側面叩き痕
21	8竪	18	磨り石	14.1/7.1/5.7	902	安山岩	灰黄褐	711	表裏面磨り
21	8竪	19	磨り石	13.9/6.0/5.3	758	安山岩	明褐灰	888	4面磨り　被熱剥離
21	8竪	20	凹石	12.9/10.7/6.6	1130	安山岩	暗灰黄	891	表面のみ弱い凹み
22	8竪	21	磨り石	17.0/10.2/4.9	1280	安山岩	暗灰黄	709	表裏面弱い磨り　側縁叩き
22	8竪	22	凹石	14.0/12.2/6.1	1300	安山岩	褐灰	893	表裏面凹み　周縁叩き
22	8竪	23	磨り石	11.3/9.9/7.2	980	デイサイト	灰黄	931	表面のみ凹み　磨り面
22	8竪	24	磨り石	11.4/9.0/6.3	852	安山岩	灰白	929	表裏面弱い磨り
22	8竪	25	石皿	18.8/30.0/7.0	5800	安山岩	灰黄褐	930	
23	9竪	3	凹石	16.4/16.4/10.7	2680	デイサイト	灰白	683	表面脆弱
23	10竪	5	凹石	10.0/6.9/4.0	330	安山岩	灰黄褐	竈1698	2面に強い凹み
24	13竪	2	凹石	7.5/5.1/4.3	191	安山岩	明褐灰	858	小形　1面のみ浅い凹み
24	13竪	3	稜磨り石	17.1/7.6/6.5	1020	安山岩	明褐灰	861	断面三角形　裏面に磨り面
24	13竪	4	凹石	10.0/8.4/6.0	580	デイサイト	灰白	859	凹み2面
25	6土	1	磨り石	19.1/17.2/10.5	4280	安山岩	鈍い黄橙	868	大形　凹みはごく浅い　表裏面に凹み
26	9土	2	凹石	14.2/11.2/9.8	1680	デイサイト	灰黄	1621	中世か　表面脆弱
26	13土	2	叩石	12.0/6.5/5.2	574	安山岩	灰白	1629	両端部・側面叩き　表裏面弱い磨り　裏面に凹み
27	101ピ	1	打斧	8.9/6.0/2.6	169	ホルンフェルス	灰	1012	表面に自然面を残す
28	117ピ	4	打斧	11.4/5.2/1.4	102	ホルンフェルス	鈍い黄	1704	脆い
28	117ピ	5	横刃石器	11.5/5.3/1.5	104	ホルンフェルス	浅黄	1702	脆い
29	1谷	7	磨り石	15.4/16.0/7.6	2200	安山岩	灰褐	111	表裏面に強い磨り　表裏2面に浅い凹み
30	2谷	7	打斧	8.8/6.0/1.8	113	砂質頁岩	暗灰	1628	上半欠
34	遺構外	45	打斧	11.8/5.0/1.2	97	ホルンフェルス	灰	7竪615	先端欠　脆い
34	遺構外	46	打斧	9.7/5.0/1.4	85	砂岩	灰	8トレ1458	刃部摩耗
34	遺構外	47	打斧	9.8/5.1/1.5	104	ホルンフェルス	灰オリーブ	7竪612	脆い
34	遺構外	48	打斧	9.6/5.6/2.1	105	ホルンフェルス	鈍い黄	8トレ1444	脆い
34	遺構外	49	打斧	13.2/5.0/1.9	170	ホルンフェルス	灰	7竪613	完存
34	遺構外	50	打斧	11.9/7.6/4.4	434	暗緑色凝灰岩	暗オリーブ灰	12トレ295	大形　下半欠
34	遺構外	51	打斧	6.6/4.0/1.1	44	ホルンフェルス	黄灰	3トレ1174	下半欠
34	遺構外	52	石匙	4.5/3.6/0.7	11	チャート	黒褐	1387	完存
34	遺構外	53	石鏃	1.8/1.5/0.4	1	黒曜石	黒透	一括	脚部欠損
34	遺構外	54	剥片	2.4/3.1/0.9	6	黒曜石	黒透	1424	使用痕あり
34	遺構外	55	凹石	7.0/6.3/4.5	260	安山岩	鈍い黄橙	7トレ1421	小形　1面のみ凹み
34	遺構外	56	磨り石	12.0/10.6/8.4	1500	安山岩	灰白	12トレ795	表面にのみ磨り面
34	遺構外	57	稜磨り石	11.0/5.2/5.2	528	安山岩	鈍い橙	15トレ244	1辺のみ磨り面　被熱赤変

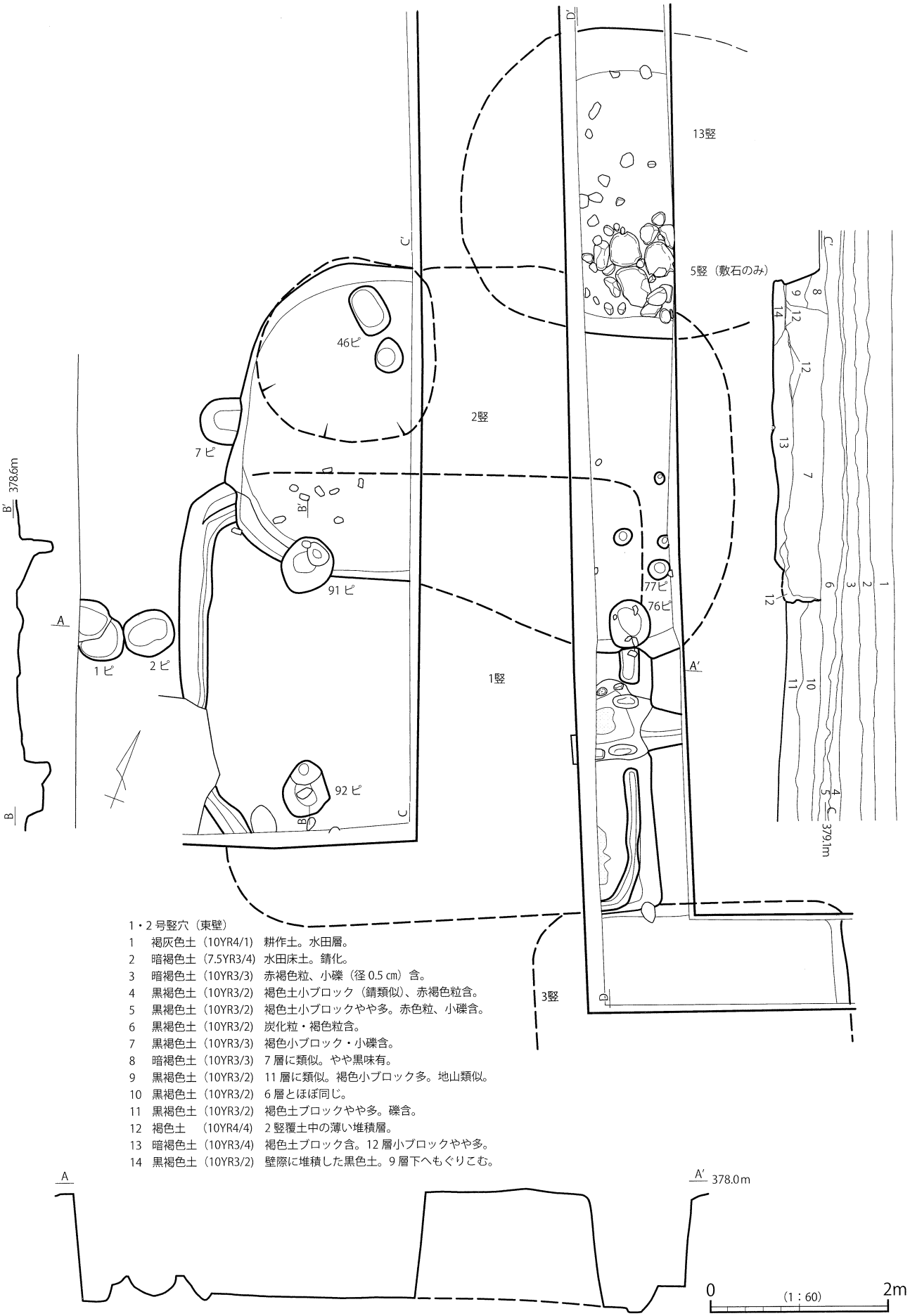
第７表　金属製品観察表

図	地点	No.	種別	材質	長cm	幅cm	重さg	注記	備考
23	9竪	4		鉄	10.7	0.9	10	665	
24	15竪	4	紡錘車軸？	鉄	11.4	0.7	7	917	
25	19竪	2	刀子	鉄	13.0	1.1	10	1569	
25	19竪	3	刀子	鉄	3.8	1.2	3	1575	



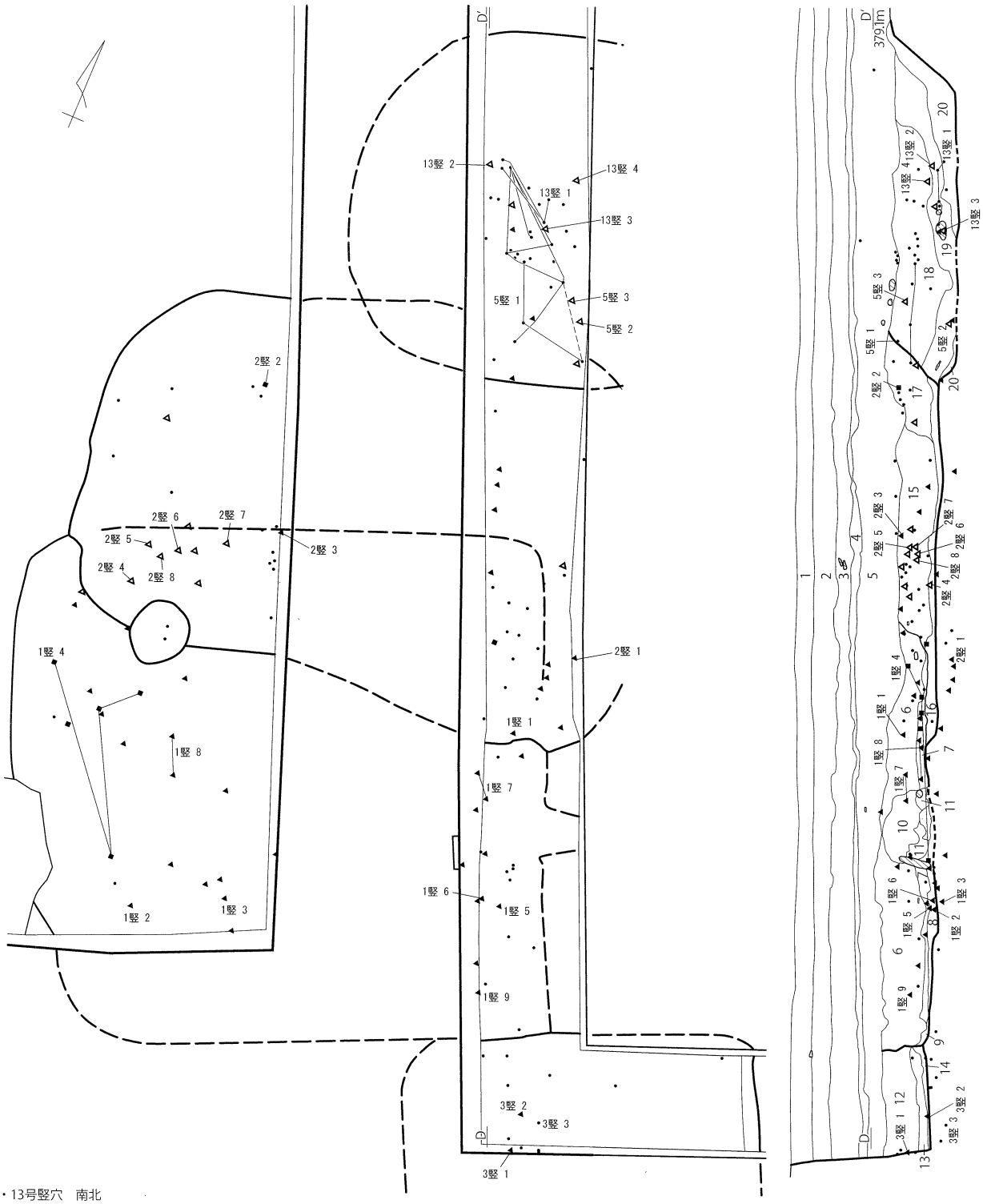
（網かけ部は礫層露出面）

第１図　全体図



1・2号竪穴（東壁）
1　褐灰色土（10YR4/1）耕作土。水田層。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）水田床土。錆化。
3　暗褐色土（10YR3/3）赤褐色粒、小礫（径0.5㎝）含。
4　黒褐色土（10YR3/2）褐色土小ブロック（錆類似）、赤褐色粒含。
5　黒褐色土（10YR3/2）褐色土小ブロックやや多。赤色粒、小礫含。
6　黒褐色土（10YR3/2）炭化粒・褐色粒含。
7　黒褐色土（10YR3/3）褐色小ブロック・小礫含。
8　暗褐色土（10YR3/3）7層に類似。やや黒味有。
9　黒褐色土（10YR3/2）11層に類似。褐色小ブロック多。地山類似。
10　黒褐色土（10YR3/2）6層とほぼ同じ。
11　黒褐色土（10YR3/2）褐色土ブロックやや多。礫含。
12　褐色土　（10YR4/4）2竪覆土中の薄い堆積層。
13　暗褐色土（10YR3/4）褐色土ブロック含。12層小ブロックやや多。
14　黒褐色土（10YR3/2）壁際に堆積した黒色土。9層下へもぐりこむ。

第2図　1～3・5・13号竪穴(1)



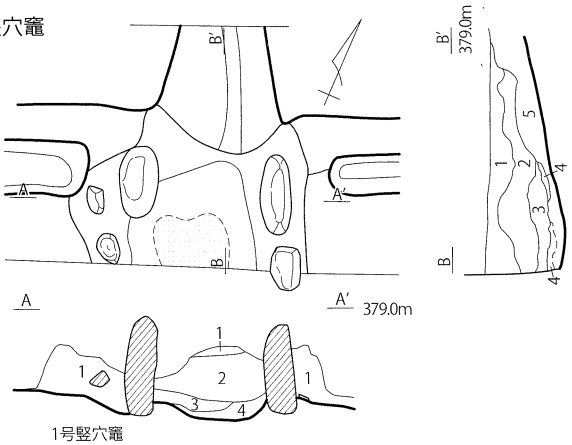
1～3・13号竪穴　南北

1	褐灰色粘質土(10YR4/1)	水田層。
2	褐色土(10YR4/4)	水田床土。オレンジ色の錆層。
3	暗褐色土(10YR3/3)	やや粗。
4	褐色土(7.5YR4/4)	旧水田床土か。厚み薄く、ブロック状に褐色土含。
5	黒褐色土(10YR3/2)	やや粗。褐色粒、焼土粒含。
6	黒褐色土(10YR2/3)	5層に色調類似。やや密。炭化粒、焼土、ローム小ブロック含。
7	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	直下が床面か。若干硬化。部分的に焼土ブロック多。
8	黒褐色土(10YR3/1)	ローム粒・ブロック含。床下掘り方か。
9	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	ローム粒・ブロック含。6層とロームの混合状態。
10	黒褐色土(10YR2/3)	6層類似。竈覆土。ローム粒・小ブロックやや多。焼土小ブロック含。
11	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	ロームブロックやや多。
12	黒褐色土(10YR2/3)	6層類似。やや密。褐色粒、焼土粒含。
13	黒褐色土(10YR2/3)	ローム粒・小ブロック含。
14	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	ローム主体。地山。
15	黒褐色土(10YR3/2)	やや密。褐色粒、焼土粒・ローム粒含。
16	暗褐色土(10YR3/3)	17層との前後関係はやや不明確。
17	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	やや粗。小粒子やや多。ローム粒・ブロック多。黄味有。
18	黒褐色土(10YR2/2)	緻密。ローム小ブロック少。上層に5竪敷石。黒色味強。
19	黒褐色土(10YR3/2)	ローム粒・ブロック含。18層より黒色味弱。径5～10cmの礫含。
20	にぶい黄褐色土(10YR4/3)	やや砂質土。ローム粒多。壁ローム土の崩落堆積。

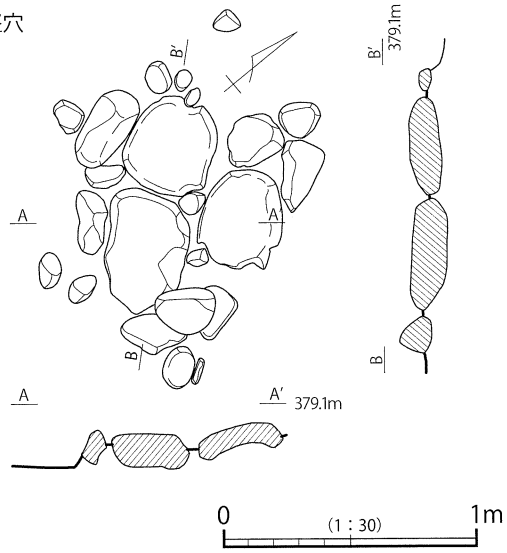
0　(1：60)　2m

第３図　１～３・５・13号竪穴(2)

1号竪穴竈

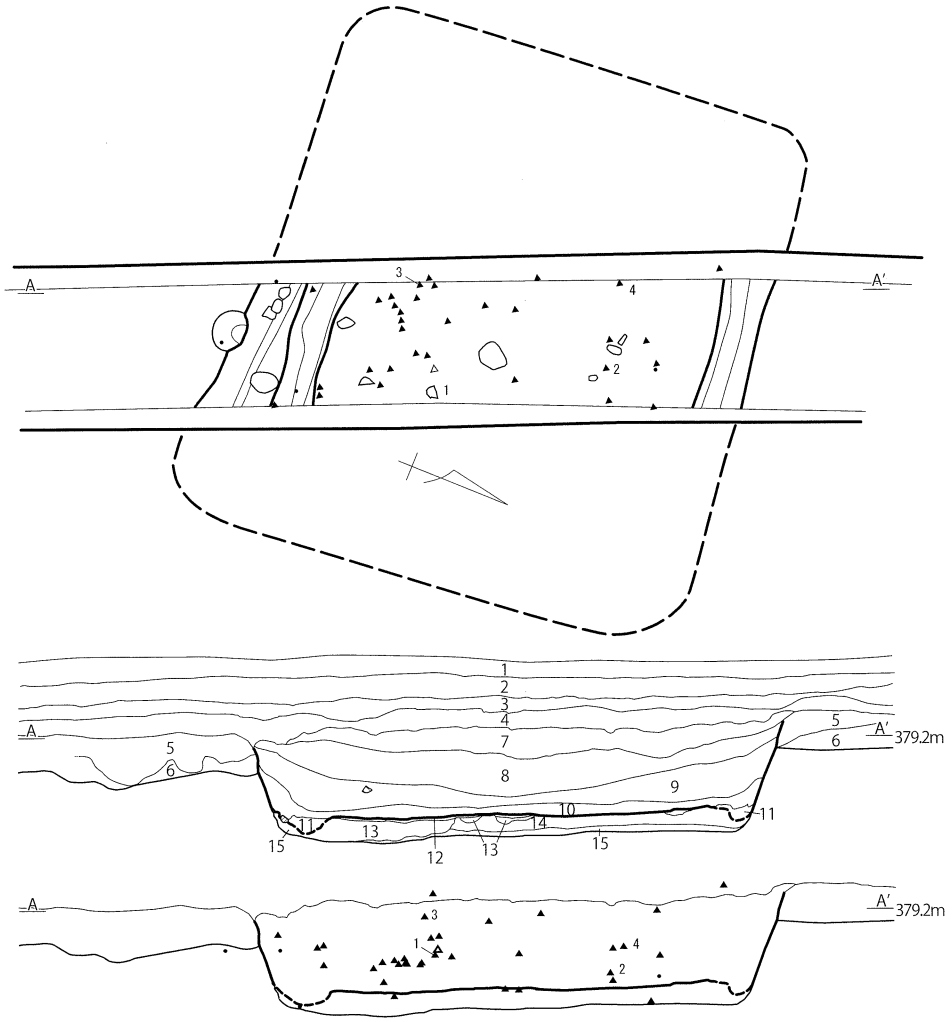


5号竪穴



1号竪穴竈
1　黒褐色土（10YR2/3）
2　黒褐色土（10YR2/3）　全体的に焼土小ブロックやや多。炭化粒混。
3　黒褐色土（10YR2/2）　炭化物含。焼土小ブロック・焼土粒多。
4　焼　　土　　純粋な焼土層。
5　暗褐色土（10YR3/4）　地山類似。焼土小ブロック少。

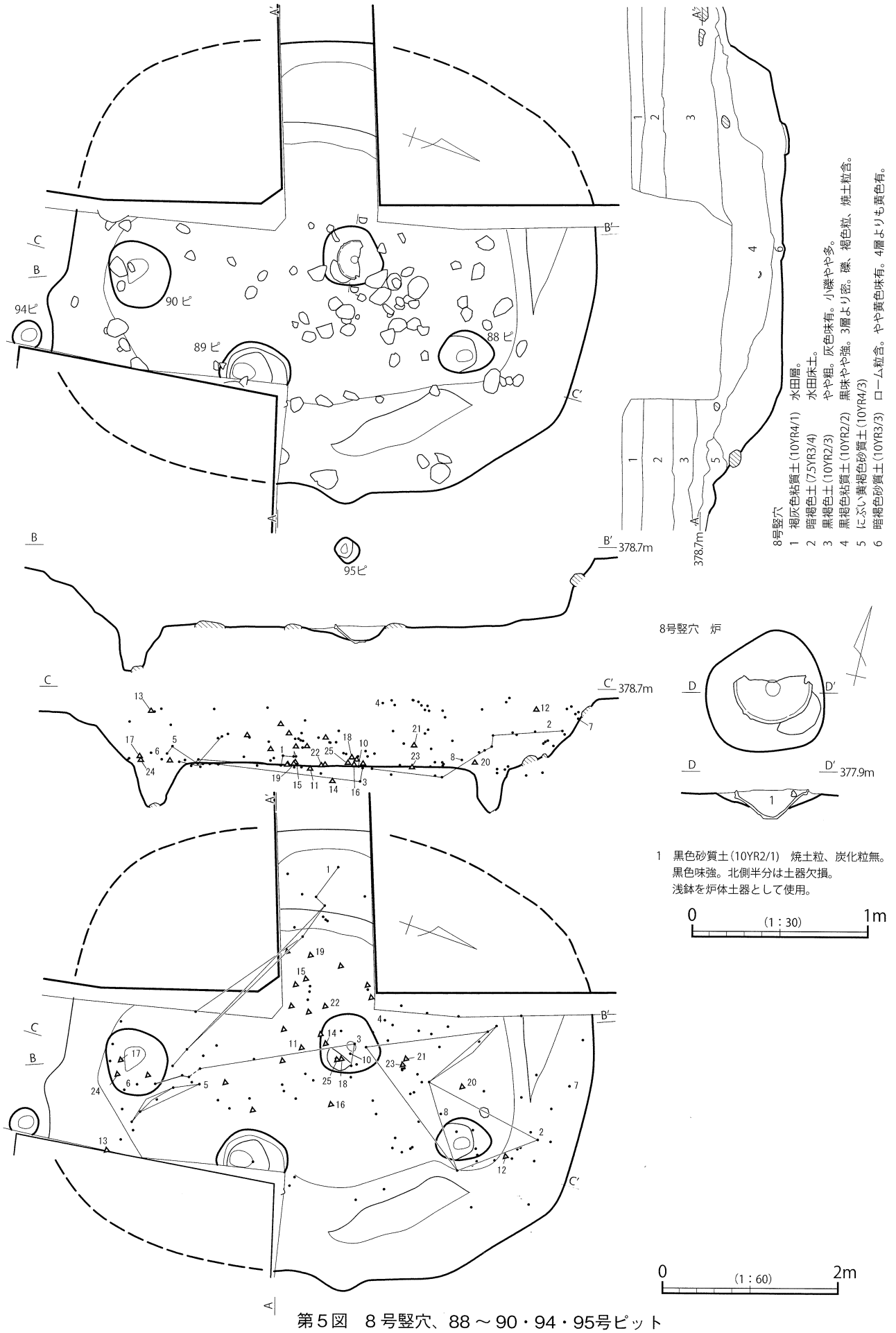
4号竪穴



4号竪穴
1　褐灰色土（10YR4/1）　水田層。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　水田床土。
3　黒褐色土（10YR3/2）　旧水田覆土か
4　暗褐色土（7.5YR3/4）　旧水田床土面か。鉄粒多。白色粒、赤色粒含。土器片含。
5　暗褐色土（10YR3/3）　7層類似。
6　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒・ブロック（10YR4/4）混。
7　暗褐色土（10YR3/3）　ローム小ブロック・赤色粒含。
8　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒・小ブロックを全体に含。炭化粒、焼土粒、小礫含。
9　暗褐色土（10YR3/3）　ロームブロック含。8層よりやや多。焼土粒含。
10　暗褐色土（10YR3/3）＋褐色土（10YR4/4）
11　褐色土（10YR4/4）　ロームブロック主体。周溝部。掘り方断面によれば、14層と同一か。
12　褐灰色土（10YR4/1）　灰？主体。床直に薄く堆積。
13　暗褐色土（10YR3/3）　ロームと黒色土の互層。黒色味強。礫含。
14　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ロームと黒色土の混。床下掘り方埋め土層。地山類似。13層よりもローム主体。
15　褐色砂質土（10YR4/4）　黒色土の小ブロックわずかに混。地山直上。

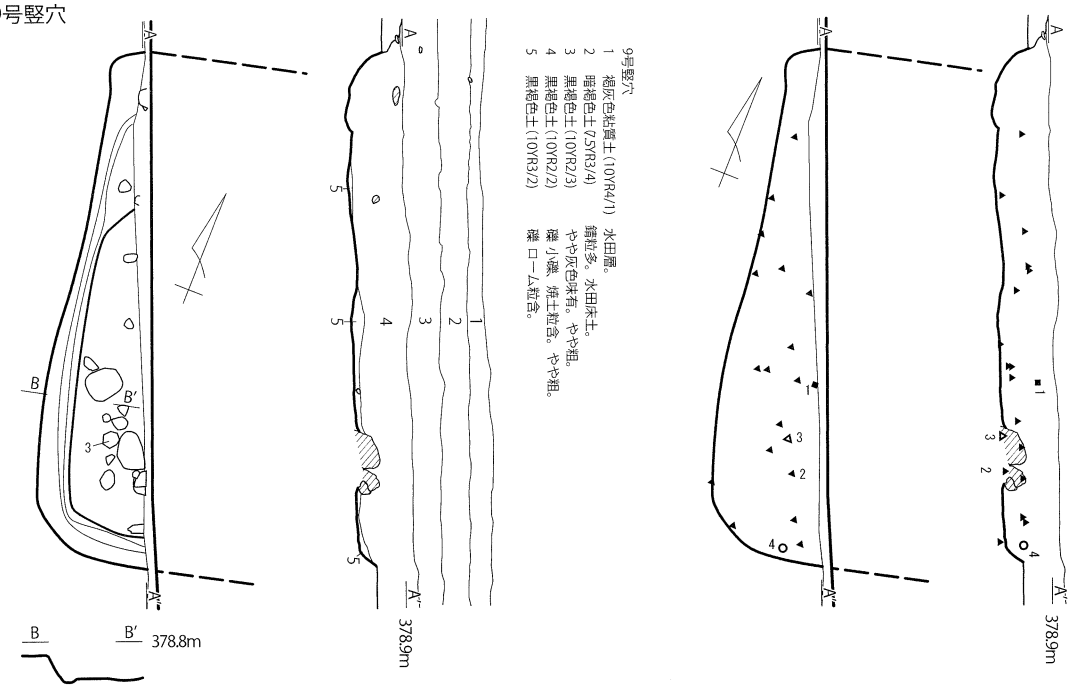
0　(1：60)　2m

第４図　１・４・５号竪穴



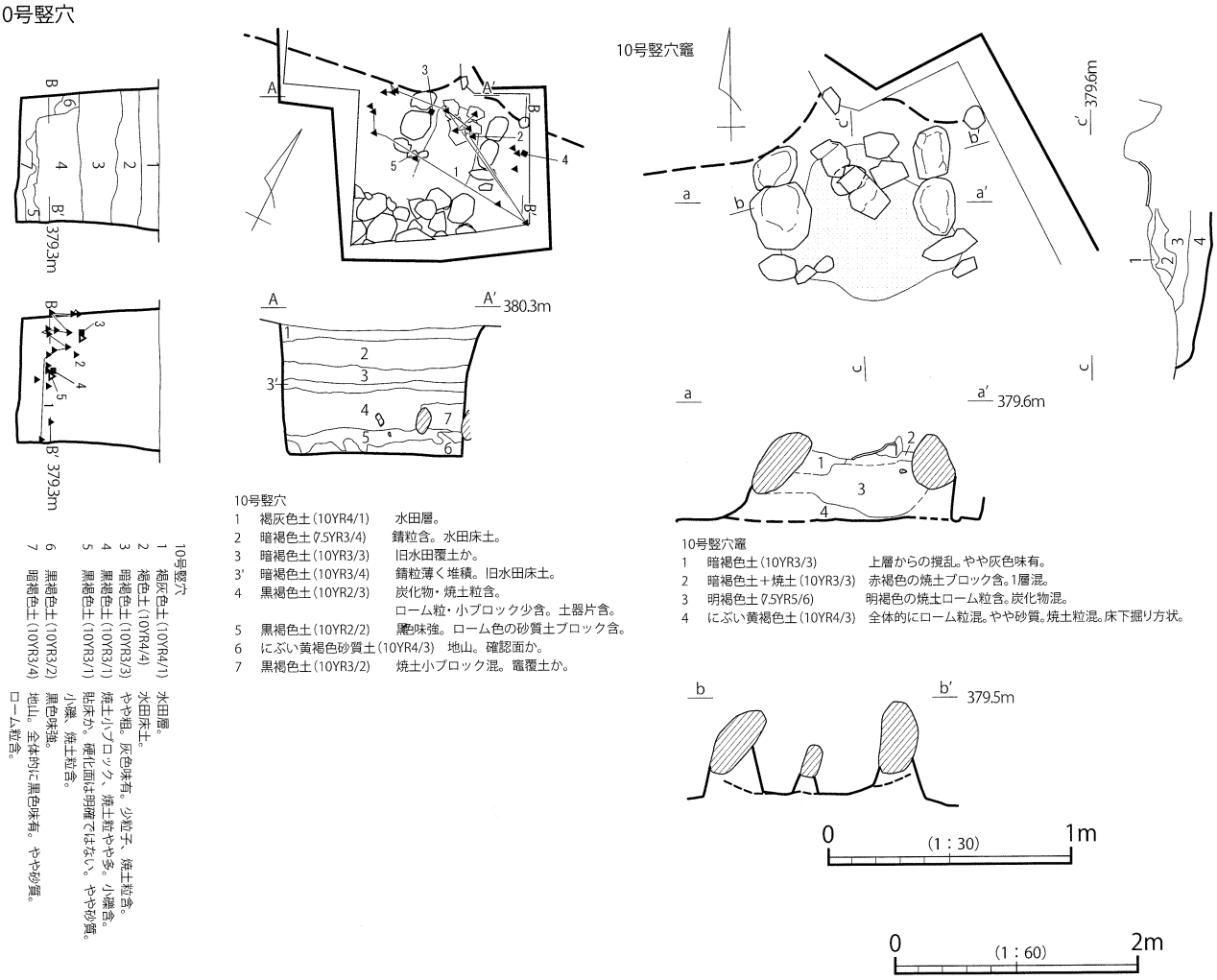
第５図　８号竪穴、88～90・94・95号ピット

9号竪穴



9号竪穴
1　褐灰色粘質土(10YR4/1)　水田層。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　鐵粒多。水田床土。
3　黒褐色土(10YR2/3)　やや灰色味有。やや粗。
4　黒褐色土(10YR2/2)　礫小礫、焼土粒含。やや粗。
5　黒褐色土(10YR3/2)　礫ローム粒含。

10号竪穴



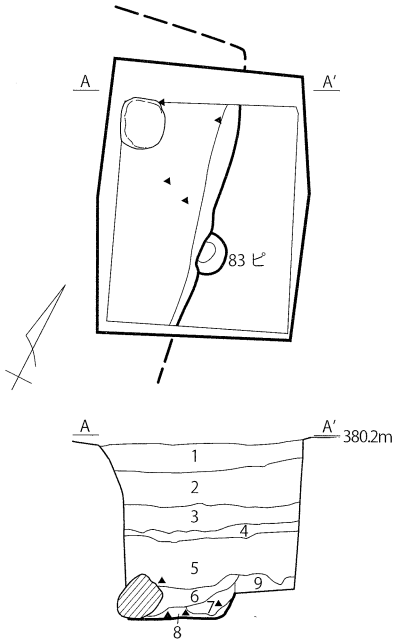
10号竪穴
1　褐灰色土(10YR4/1)　水田層。
2　暗褐色土(7.5YR3/4)　鐵粒含。水田床土。
3　暗褐色土(10YR3/3)　旧水田覆土か。
3'　暗褐色土(10YR3/4)　鐵粒薄く堆積。旧水田床土。
4　黒褐色土(10YR2/3)　炭化物・焼土粒含。
ローム粒・小ブロック少含。土器片含。
5　黒褐色土(10YR2/2)　黒色味強。ローム色の砂質土ブロック含。
6　にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)　地山。確認面か。
7　黒褐色土(10YR3/2)　焼土小ブロック混。竈覆土か。

10号竪穴
1　褐灰色土(10YR4/1)　水田層。
2　褐色土(10YR4/4)　水田床土。
3　暗褐色土(10YR3/3)　やや粗。灰色味有。少粒子、焼土粒含。
4　黒褐色土(10YR3/1)　焼土小ブロック、焼土粒やや多。小礫含。
5　黒褐色土(10YR3/1)　貼床か。硬化面は明瞭ではない。やや砂質。
小礫、焼土粒含。
6　黒褐色土(10YR3/2)　黒色味強。
7　暗褐色土(10YR3/4)　地山。全体的に黒色味有。やや砂質。
ローム粒含。

10号竪穴竈
1　暗褐色土(10YR3/3)　上層からの撹乱。やや灰色味有。
2　暗褐色土＋焼土(10YR3/3)　赤褐色の焼土ブロック含。1層混。
3　明褐色土(7.5YR5/6)　明褐色の焼土ローム粒含。炭化物混。
4　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　全体的にローム粒混。やや砂質。焼土粒混。床下掘り方状。

第6図　9・10号竪穴

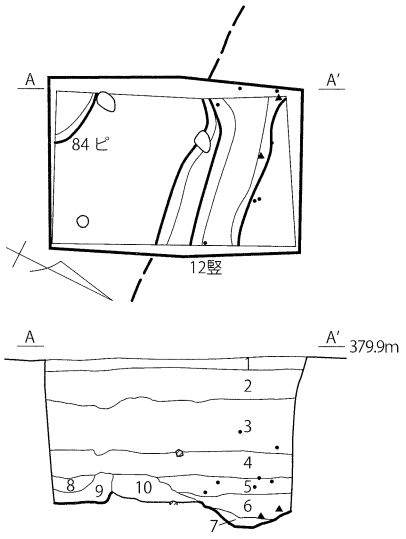
11号竪穴、83号ピット



11 号竪穴

1	褐灰色土（10YR4/1）	水田層。
2	褐色土（10YR4/4）	やや粗。水田床土。
3	黒褐色土（10YR3/2）	やや粗。
4	褐色土（10YR4/6）	褐色ブロック主体。
5	黒褐色土（10YR3/2）	炭化物、焼土粒、小礫、ロームブロック含。
6	黒褐色土（10YR3/1）	やや黒色味強。緻密。ロームブロック含。
7	黒褐色土（10YR3/2）	全体的にローム粒含。やや黒色味強。緻密。
8	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ローム粒・ブロック粒多。
9	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	地山。確認面。

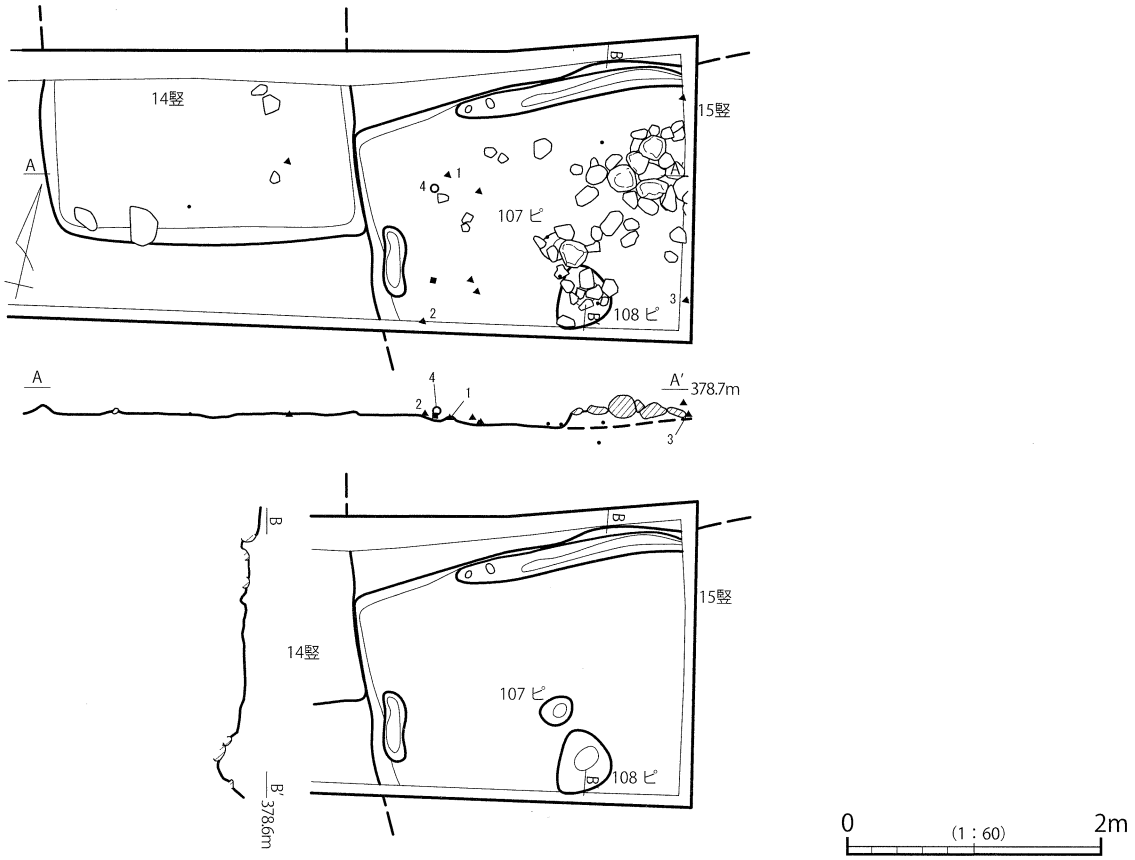
12号竪穴、84号ピット



12 号竪穴

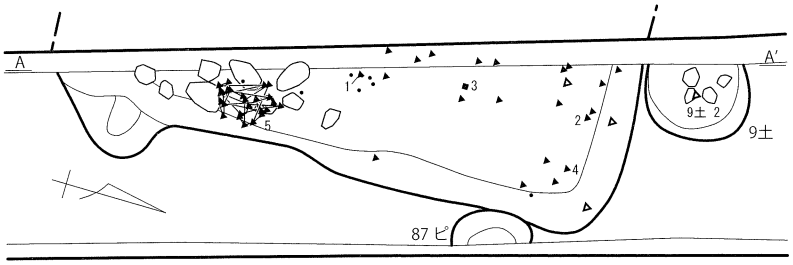
1	褐灰色粘質土（10YR4/1）	水田層。
2	灰黄褐色土（10YR4/2）	水田床土。
3	暗褐色土（10YR3/3）	黄色粒、焼土粒含。
4	黒褐色土（10YR3/2）	やや黒味強。褐色粒、焼土粒含。
5	黒褐色土（10YR3/1）	黒色味強。
6	黒褐色土（10YR3/2）	黄色ブロック含。全体的に黄色粒含。
7	黒褐色土（10YR3/2）	周溝覆土。ローム小ブロック多。
8	黒褐色土（10YR3/2）	ローム粒混。やや黒色味強。
9	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ローム小ブロック多。8 層との混合。
10	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ローム粒・小ブロックやや多。全体的に黄色味有。

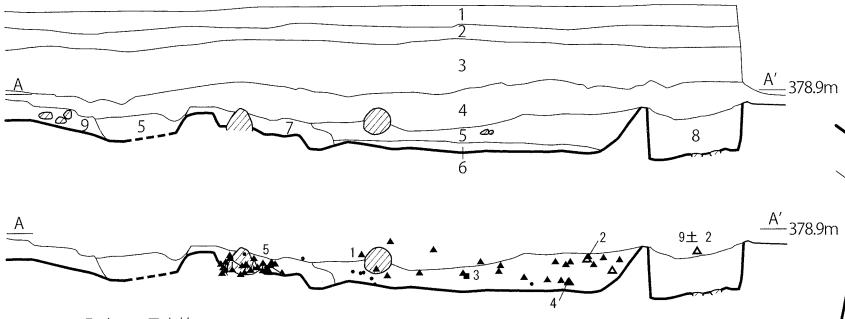
14・15号竪穴、107・108号ピット



第７図　11・12・14・15号竪穴、83・84・107・108号ピット

16号竪穴号、9号土坑、87号ピット

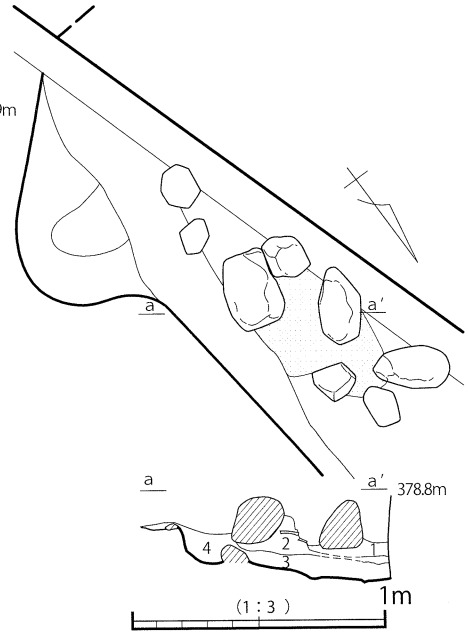




16 号竪穴・9 号土坑

1	褐灰色粘質土（10YR4/1）	水田層。
2	褐色土（10YR4/6）	水田床土。
3	暗褐色土（10YR3/3）	やや粗。礫、小礫含。
4	黒褐色土（10YR3/1）	焼土粒、褐色粒、小礫、礫含。
5	黒褐色土（10YR2/3）	ローム粒・ブロック、焼土粒、褐色粒含。緻密。
6	暗褐色砂質土（10YR3/3）	ローム粒やや多。礫混。地山直上。
7	暗褐色土＋焼土（10YR3/3）	竈周辺。褐色土ブロックやや多。
8	黒褐色土（10YR2/3）	9 土覆土。焼土粒含。上層に礫。
9	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	地山。ローム主体。

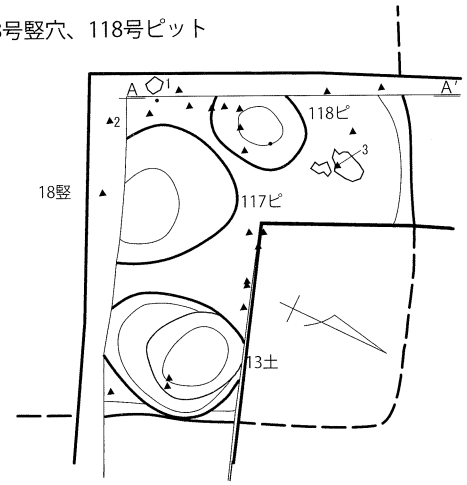
16 号竪穴竈

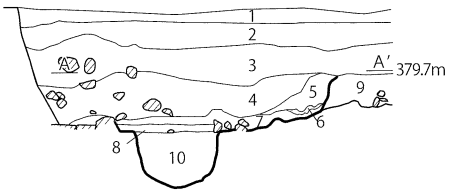


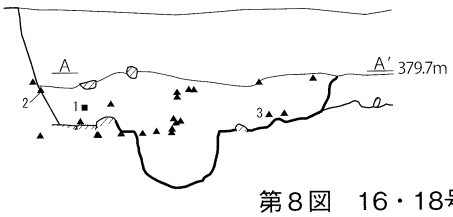
16 号竪穴　竈

1	黒褐色土（10YR3/2）	焼土粒・小ブロック、炭化物含。
2	焼　　土	オレンジ色の焼土、黒褐色土含。
3	黒褐色土（10YR3/1）	竈下層か。焼土粒少。
4	黒褐色土（10YR3/2）	ローム粒含。焼土粒なし。

18号竪穴、118号ピット







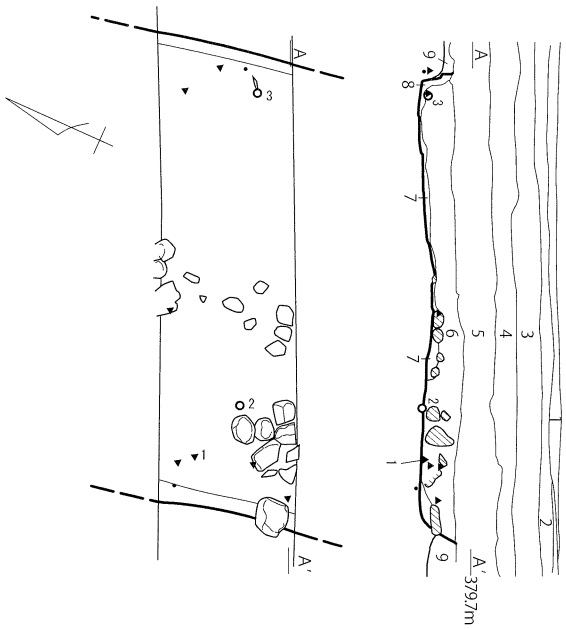
18 号竪穴、118 号ピット

1	褐灰色土（10YR4/1）	水田層。
2	褐色土（10YR4/6）	水田床土。
3	暗褐色土（10YR3/3）	やや灰色味有。やや粗。
4	黒褐色土（10YR3/2）	礫、小礫、褐色粒、焼土粒含。
5	黒褐色土＋焼土（10YR3/2）	竈焼土。部分的にブロック状の焼土含。全体的に焼土粒含。
6	焼　　土	やや色は薄い。
7	暗褐色土（10YR3/3）	やや灰褐色味有。小礫含。床面上に堆積。
8	黒褐色土（10YR3/2）	床下か。やや砂質。南側に硬化した床面有。
9	黒褐色土（10YR3/2）	小礫含。
10	黒褐色土（10YR3/2）	やや粗。縄文土器片含。

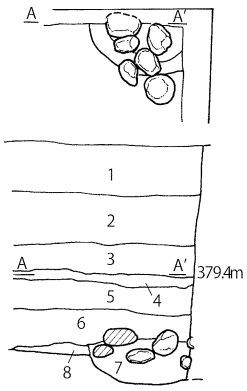
0　(1：60)　2m

第８図　16・18号竪穴、９号土坑、87・118号ピット

19号竪穴



1号集石

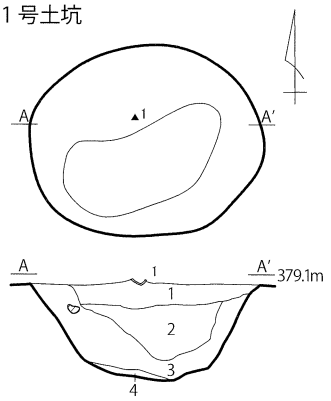


1号集石
1　灰黄褐色粘質（10YR4/2）水田層。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）水田床土。
3　暗褐色土（10YR3/3）灰色味有。旧水田層か。
4　暗褐色土（7.5YR3/4）旧水田床土か。
5　黒褐色土（10YR3/2）6層に類似
6　黒褐色土（10YR2/2）ローム小ブロック含。
　　5層よりも黒味有。やや密。
7　黒褐色土（10YR2/2）6層に類似。
8　鈍い黄褐色土（10YR4/3）ローム粒やや多。

19号竪穴
1　褐灰色土（10YR4/1）　水田層。
2　褐色土　（10YR4/6）　水田床土。
3　灰黄褐色土（10YR4/2）やや粗。灰色味有。小礫含。
4　暗褐色土（10YR3/3）　やや粗。灰色味有。小礫含。
　　3層類似。
5　黒褐色土（10YR3/1）　緻密。小礫・褐色粒・焼土粒含。
6　黒褐色土（10YR3/1）　小礫・焼土粒・炭化粒含。緻密。
7　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒含。
8　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒・小ブロック多。壁土。
9　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒主体。

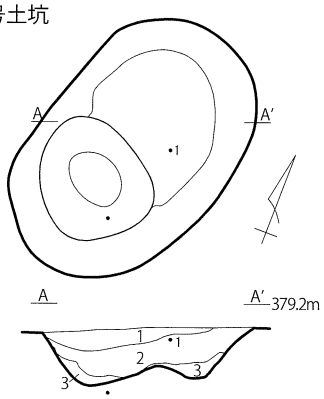
0　(1：60)　2m

1号土坑



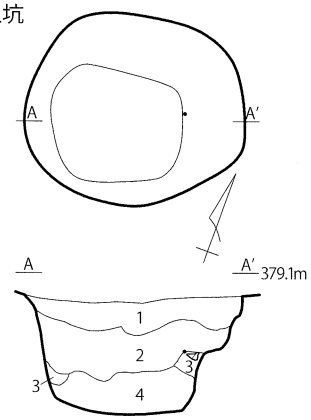
1号土坑
1　暗褐色土（10YR3/3）　焼土小ブロックやや多。土師器片有。
2　暗褐色土（10YR3/3）　ローム小ブロック、炭化物含。
3　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ロームブロック多。小礫有。
4　黄褐色土（10YR5/6）　地山。ローム土。

2号土坑



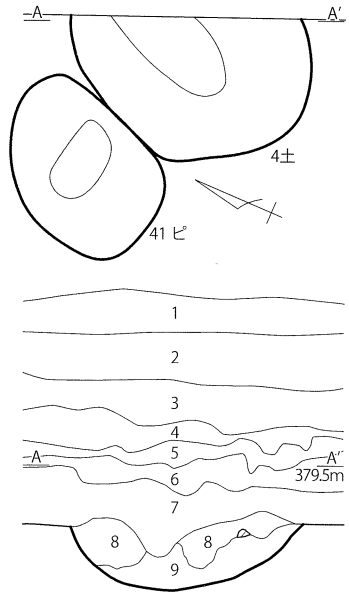
2号土坑
1　暗褐色土（10YR3/3）　ローム小ブロック含。
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒やや多。
　　ローム小ブロック含。
3　褐色土（10YR4/4）　地山。ローム土。

3号土坑



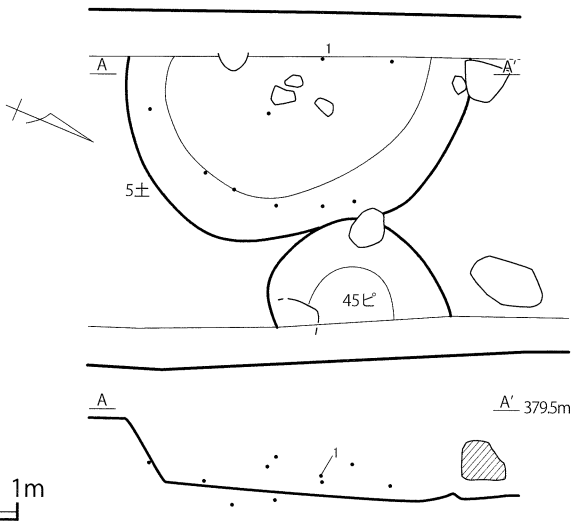
3号土坑
1　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒やや多。
　　ロームブロック含。焼土粒、炭化粒有。
2　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロック多。
　　焼土粒、炭化粒含。
3　褐色土（10YR4/4）　壁の崩落土か。
　　ロームブロック含。
4　黒褐色土（10YR2/2）　2層類似。
　　ややローム小ブロック少。黒色味強。

4号土坑、41号ピット



4号土坑
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　水田層。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　水田床土。
3　暗褐色土（10YR3/3）　やや粗。褐色粒含。
4　黒褐色土（10YR3/2）　やや粗。黒味有。
5　暗褐色土（7.5YR3/4）　2層に類似。
　　オレンジ色の小ブロック多。
6　黒褐色土（10YR3/2）　4層類似。
7　黒褐色土（10YR2/3）　ロームブロック含。
8　黒褐色土（10YR3/2）　ややローム粒多。
9　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒多。
　　ロームブロック含。地山に近い。

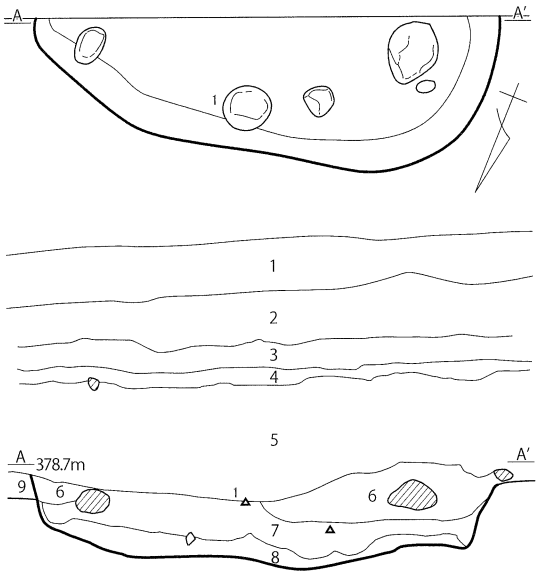
5号土坑、45号ピット



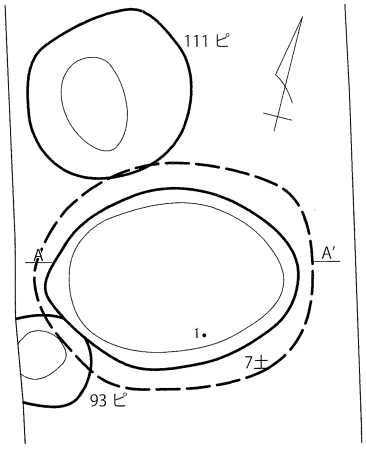
0　(1：30)　1m

第９図　19号竪穴、１～５号土坑、41・45号ピット

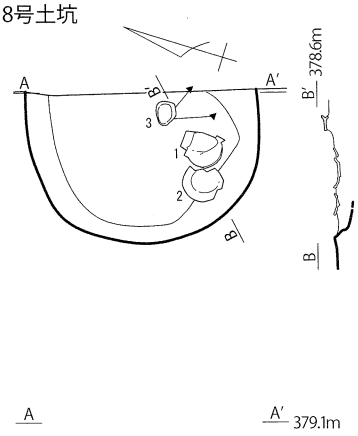
6号土坑

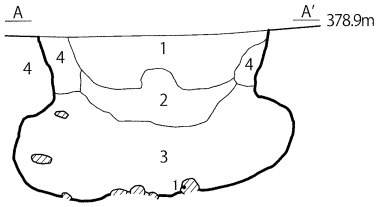


7号土坑、93・111号ピット



8号土坑

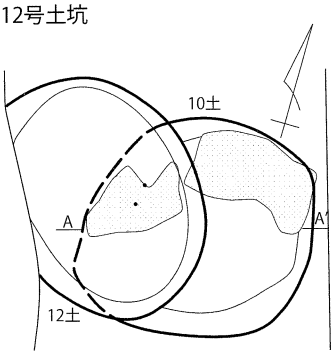


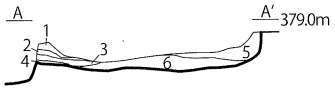


6号土坑
1　褐灰色粘質土（10YR4/1）　耕作土。水田層。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　水田床土。
3　黒褐色土（10YR3/2）　旧水田覆土。
4　暗褐色土（7.5YR3/4）　旧水田床土。
5　暗褐色土（10YR3/3）
6　暗褐色土（10YR3/4）　炭化物、礫含。黄色味有。
　ローム粒・小ブロックやや多。
7　黒褐色土（10YR2/3）　土器片混。ローム粒・小ブロック、炭化物含。
8　黒褐色土（10YR2/3）　ロームブロック多。
9　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）

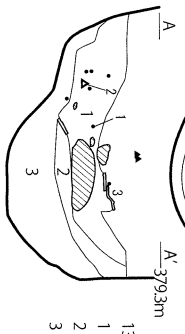
7号土坑
1　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒・小ブロック含。黄色味有。
2　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒含。
3　黒褐色土（10YR3/1）　狢沢式土器片、磨石、円礫含。黒色味強。緻密。
4　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　地山。

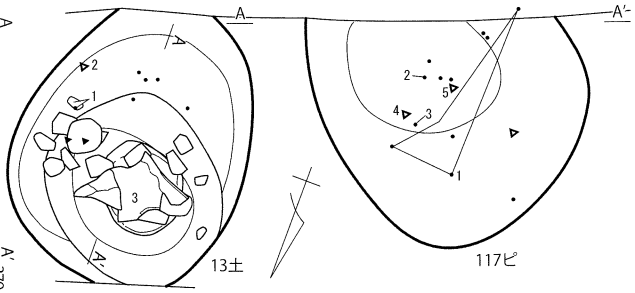
10・12号土坑

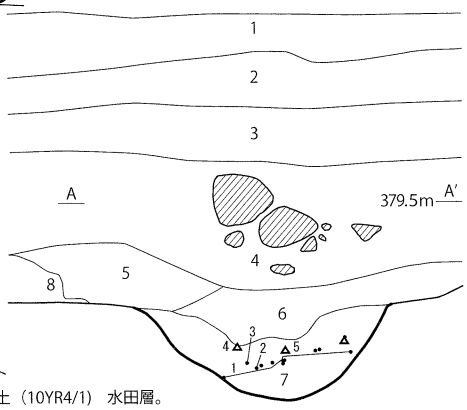




13号土坑、117号ピット







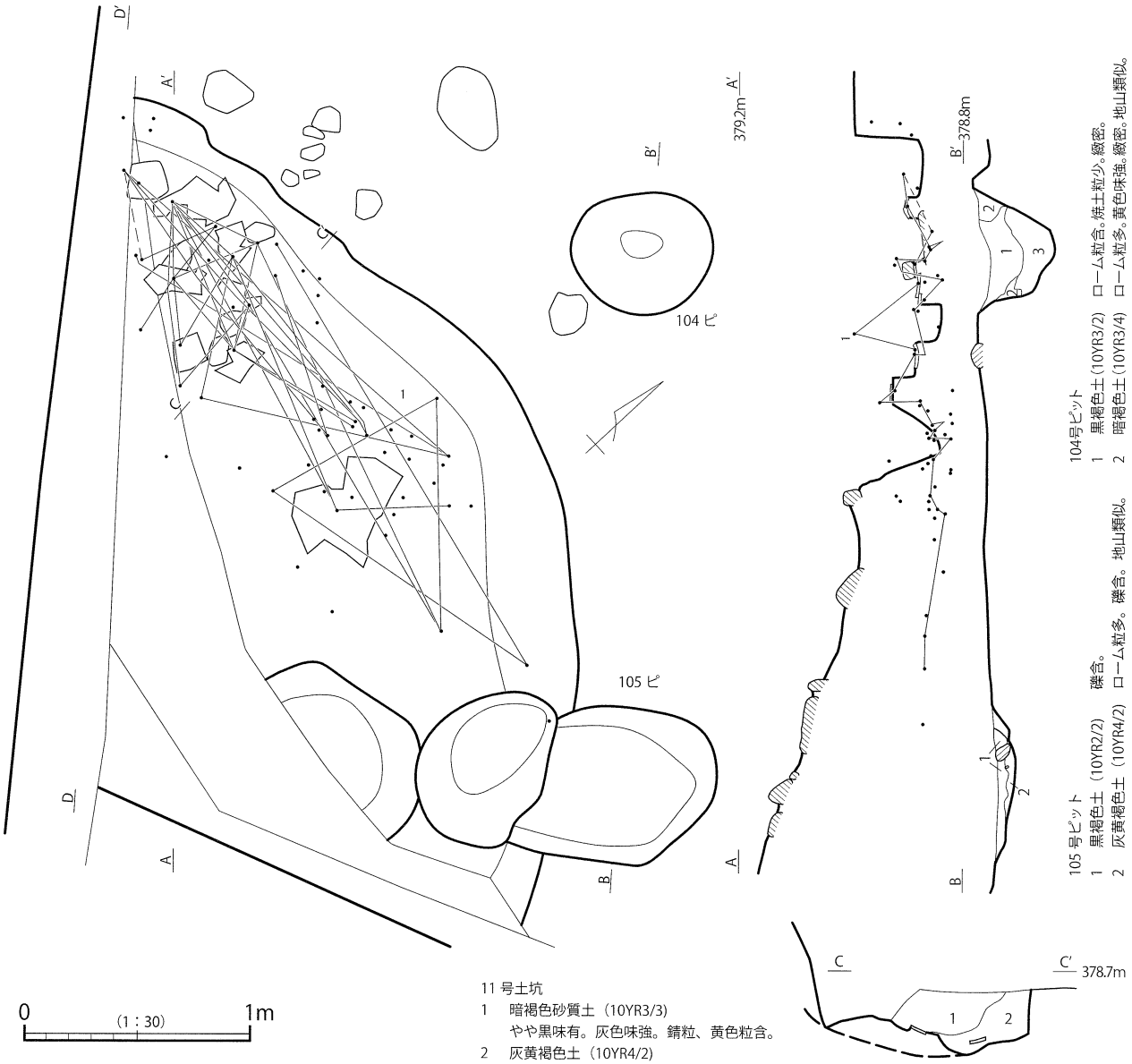
10 号土坑
1　黒色土（10YR2/1）　炭化粒多。
2　焼　土（5YR5/8）　明赤褐色。
3　黒色土（10YR2/1）　炭化物層。
4　焼　土（5YR5/8）　明赤褐色土。
5　黒褐色土（10YR3/2）　焼土粒・ブロックやや多。
6　黒褐色土（10YR2/3）　黒色味強。地山（確認面）。

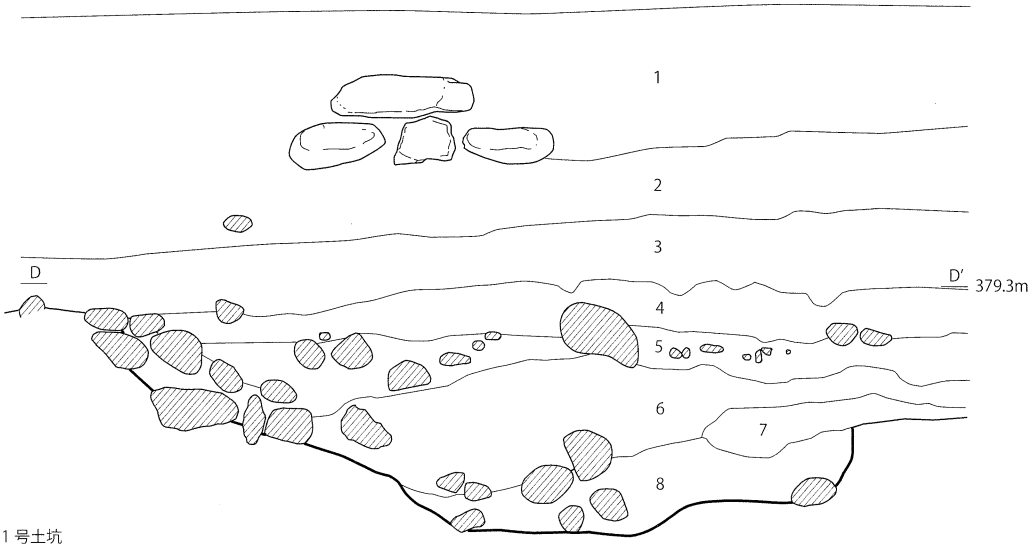
13号土坑
1　黒褐色土（10YR3/2）　黒色味弱。礫、土器（狢沢新）含。
2　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒やや多。黄色味有。
3　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）　礫多。

117 号ピット
1　褐灰色土（10YR4/1）　水田層。
2　褐色土（10YR4/6）　水田床土。
3　暗褐色土（10YR3/3）　やや灰色味有。やや粗。
4　黒褐色土（10YR3/2）　礫・小礫・褐色粒・焼土粒含。
5　黒褐色土（10YR3/2）　焼土ブロック含。暗褐色粒少。
6　黒褐色土（10YR3/2）　暗褐色ブロック少。
7　暗褐色土（10YR3/3）　黒褐色ブロック含。やや砂質。
8　黒褐色土（10YR3/2）

0　（1：30）　1m

第10図　6～8・10・12・13号土坑、93・111・117号ピット



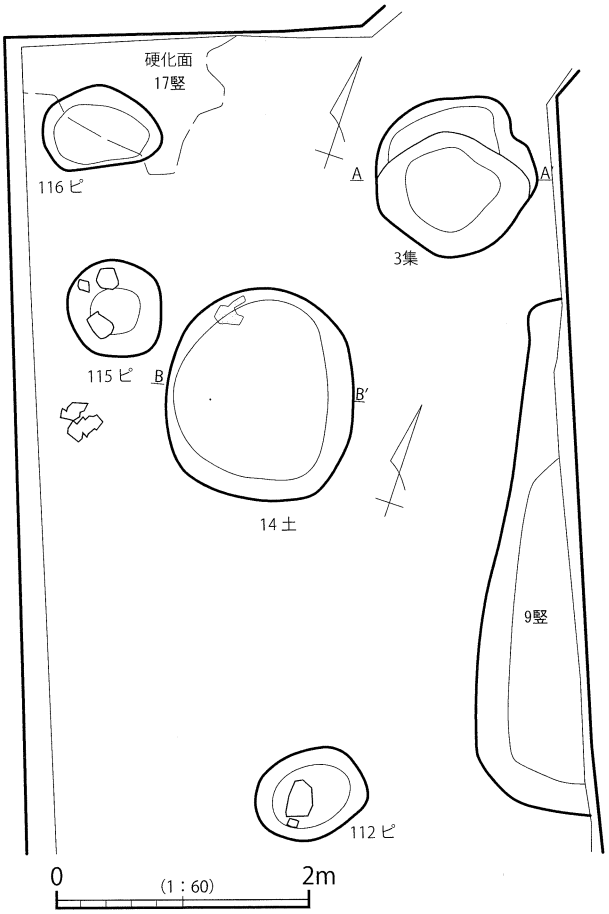


11 号土坑

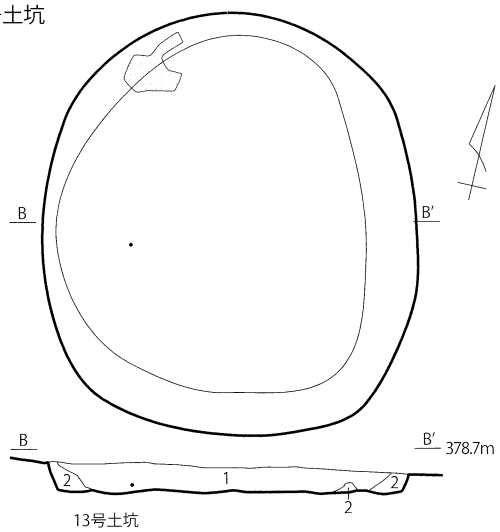
1　灰黄褐色土（10YR4/2）　埋土。耕作土。礫混。
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　下層はやや床土状に褐色化。上層は灰褐色土。やや粗。
3　黒褐色土（10YR2/2）　黒色味強。小粒子、灰褐色小ブロック、土器片含。
4　灰黄褐色砂質土（10YR4/2）　やや砂質。錆粒含。礫層の直上層。
5　黒褐色砂礫層（10YR2/2）　礫多。やや砂質。粗。
6　暗褐色土（10YR3/3）　灰色味強。
7　にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）　ローム粒多。壁際に黄色土堆積。
8　暗褐色土（10YR3/4）　6 層類似。ローム粒やや多。

第11図　11号土坑、104・105号ピット

17号竪穴、14号土坑、3号集石、112・115・116号ピット

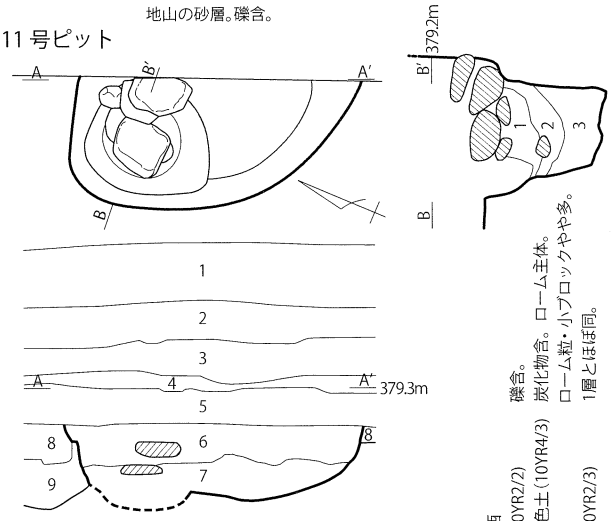


14号土坑



13号土坑
1　黒褐色土（10YR3/2）
　ローム粒、土器片含。炭化粒、焼土粒微量。
2　灰黄褐色砂（10YR4/2）
　地山の砂層。礫含。

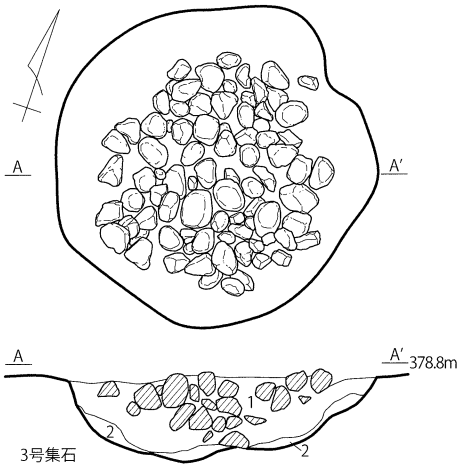
11号ピット



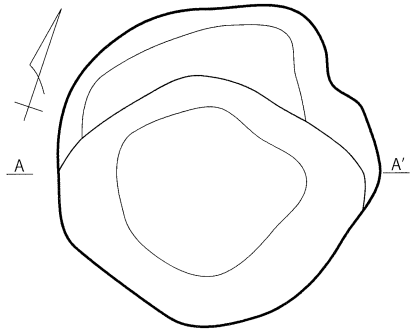
11号ピット南北
1　褐灰色土（10YR4/1）　耕作土。水田層。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　水田床土。錆化。
3　灰黄褐色土
4　暗褐色土（7.5YR3/4）　旧水田床土か。錆層。
5　暗褐色土（10YR3/3）
6　暗褐色土（10YR3/3）　8層類似。ローム小ブロック、焼土、炭化粒含。
7　暗褐色土＋ロームブロック（10YR3/4）
　ローム粒・ブロックやや多。全体的に黄色。
8　暗褐色土（10YR3/3）　6層類似。ローム粒・小ブロック含。
9　褐色土（10YR4/4）　地山。ローム土。

11号ピット東西
1　黒褐色土（10YR2/2）　礫含。
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　炭化物含。ローム主体。ローム粒・小ブロックやや多。
3　黒褐色土（10YR2/3）　1層とほぼ同。

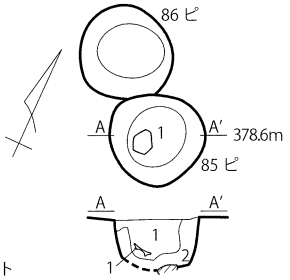
3号集石



3号集石
1　暗褐色砂質土（10YR3/3）　ローム粒混。焼土粒、炭化粒、土器片無。
2　褐灰色砂（10YR4/1）　地山。

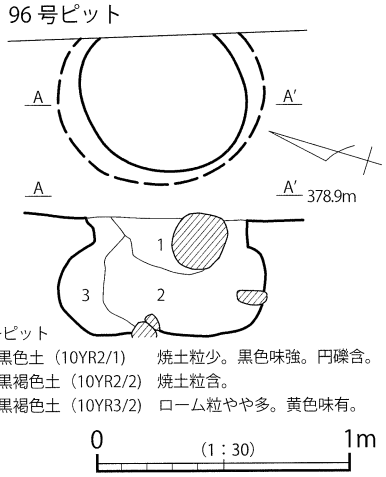


85・86号ピット



85号ピット
1　黒褐色土（10YR2/2）
　ローム小ブロック含。
2　暗褐色土（10YR3/4）
　ローム主体。黒褐色土粒混。地山類似。

96 号ピット

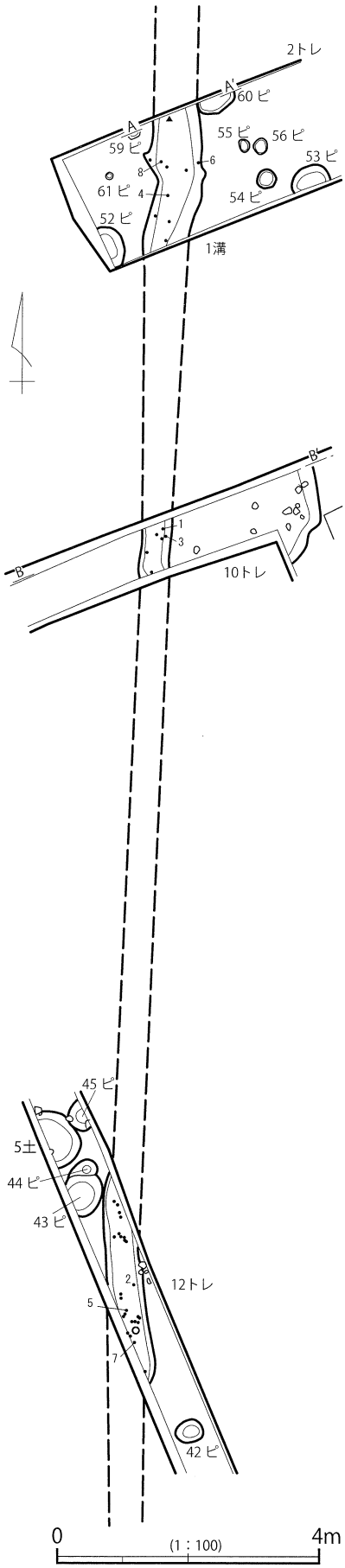


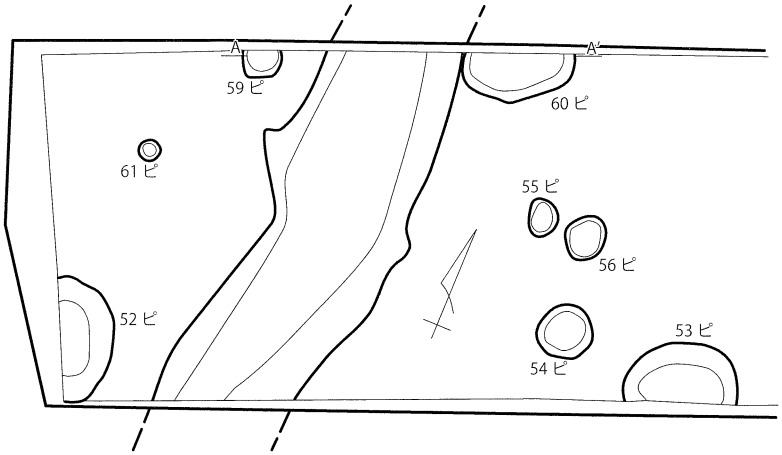
96 号ピット
1　黒色土（10YR2/1）　焼土粒少。黒色味強。円礫含。
2　黒褐色土（10YR2/2）　焼土粒含。
3　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒やや多。黄色味有。

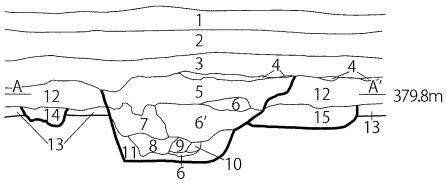
0　(1：30)　1m

第12図　17号竪穴、14号土坑、3号集石、11・85・86・96・112・115・116号ピット

1号溝

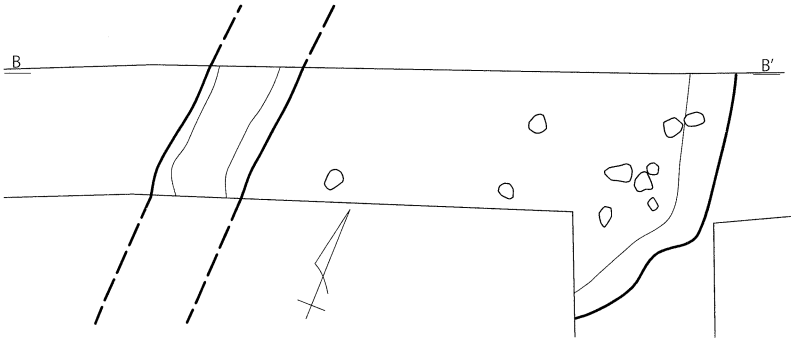


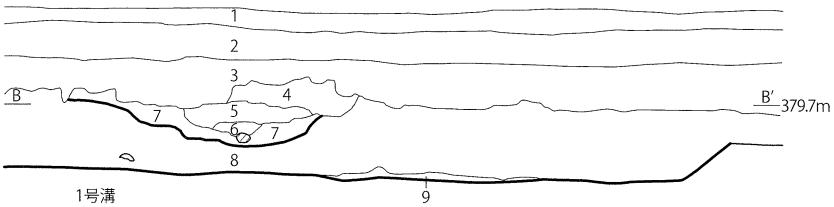




1号溝

1	灰黄褐色粘質土（10YR4/2）	水田層。
2	褐色土（7.5YR4/4）	水田床土。
3	暗褐色土（10YR3/3）	やや粗。鉄粒、焼土粒、小礫含。
4	焼　　土	1溝上層を中心に焼土が薄く分布。
5	褐色砂質土（10YR4/4）	ローム色の砂質土。4層下に焼土粒やや多。
6	褐灰色砂礫層（10YR4/1）	径0.5cmほどの円礫主体。砂粒混。
6′	褐灰色砂（10YR4/1）	鉄粒混。砂粒、小礫少含。
7	暗褐色土（10YR3/3）	黒色ブロック、鉄粒混。
8	黒褐色土（10YR3/2）	黒色味強い。小礫含。
9	黒褐色土（10YR3/2）	8層類似。砂粒、円礫混。
10	にぶい黄褐色砂（10YR4/3）	褐色砂主体。6層類似の砂礫層含。
11	暗褐色砂質土（10YR3/3）	1溝直下。溝の影響でやや変色した砂質土。13層と本来は同質か。
12	黒褐色土（10YR2/3）	3層とほぼ同じ。やや密。やや褐色味有。
13	暗褐色砂質土（10YR3/4）	地山（確認面）。11層類似。ローム色の砂質土。
14	黒褐色砂質土（10YR2/3）	シミ状小ピット覆土。黒色味ある砂質土。
15	黒褐色土（10YR2/3）	やや黒色味強。炭化粒含。





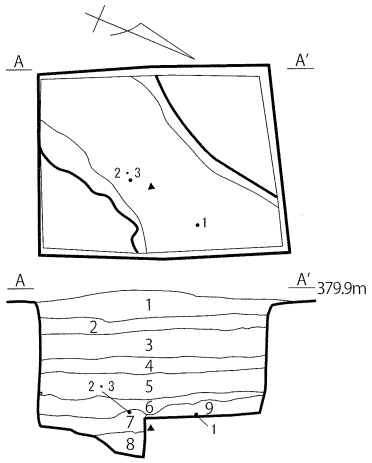
1号溝

1	褐灰色粘質土（10YR4/1）	水田層。
2	暗褐色土（7.5YR3/4）	水田床土。
3	暗褐色土（10YR3/4）	褐色粒・鉄粒・焼土粒有・小礫。やや粗。
4	褐色土（10YR4/6）	黄色味強のローム土。鉄粒混。
5	褐灰色砂礫層（10YR4/1）	径0.5cmの小礫主体。砂粒多。1溝覆土。
6	灰黄褐色砂（10YR4/2）	砂主体。小礫少。
7	暗褐色土（10YR3/3）	1溝直下。やや変色。小礫含。褐色味有。
8	黒褐色土（10YR3/2）	ロームブロック・褐色ブロック・小礫含。
9	にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）	灰褐色のローム土多。

0　(1：60)　2m

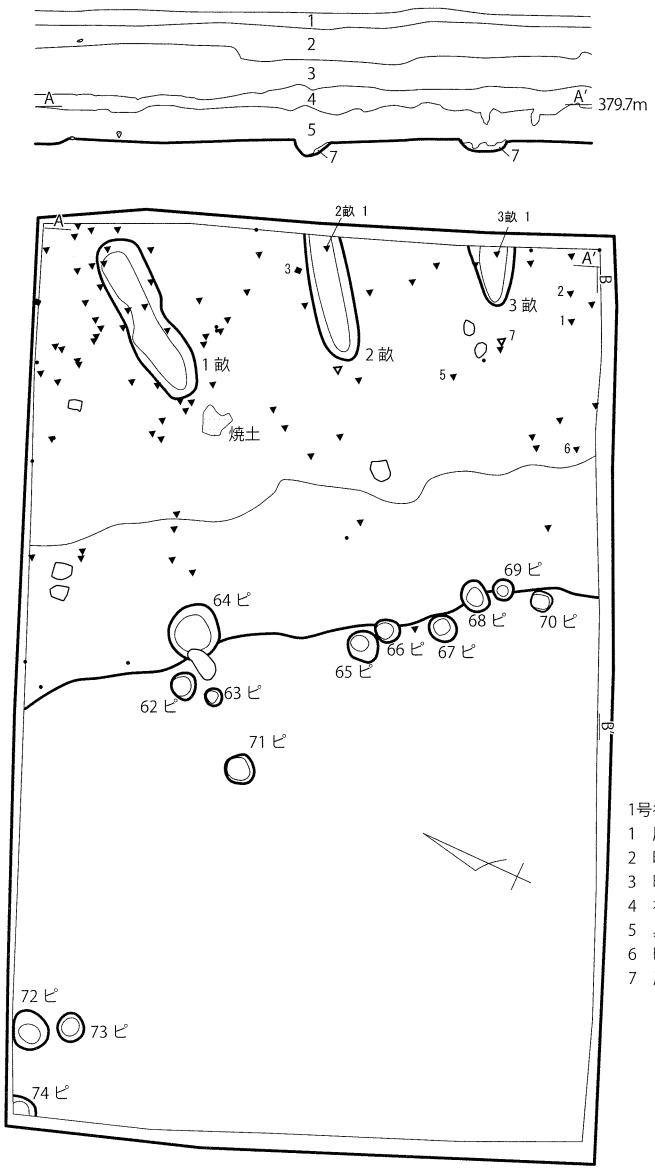
第13図　1号溝

2号溝



2 号溝
1　褐灰色土（10YR4/1）　水田層。
2　褐色土（10YR4/6）　水田床土。
3　黒褐色土（10YR3/2）　やや粗。灰色ブロック、炭化物含。
4　黒褐色土（10YR3/2）　黒褐色小ブロックやや多。
5　黒褐色土（10YR3/1）　やや粗。灰色ブロック、炭化物含。
6　黒褐色土（10YR3/2）　やや黒色味強。
7　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒含。
8　黒褐色土（10YR3/2）　ローム小ブロック含。やや黒色味強。
9　暗褐色土（10YR3/4）　全体的にローム粒・小ブロック含。

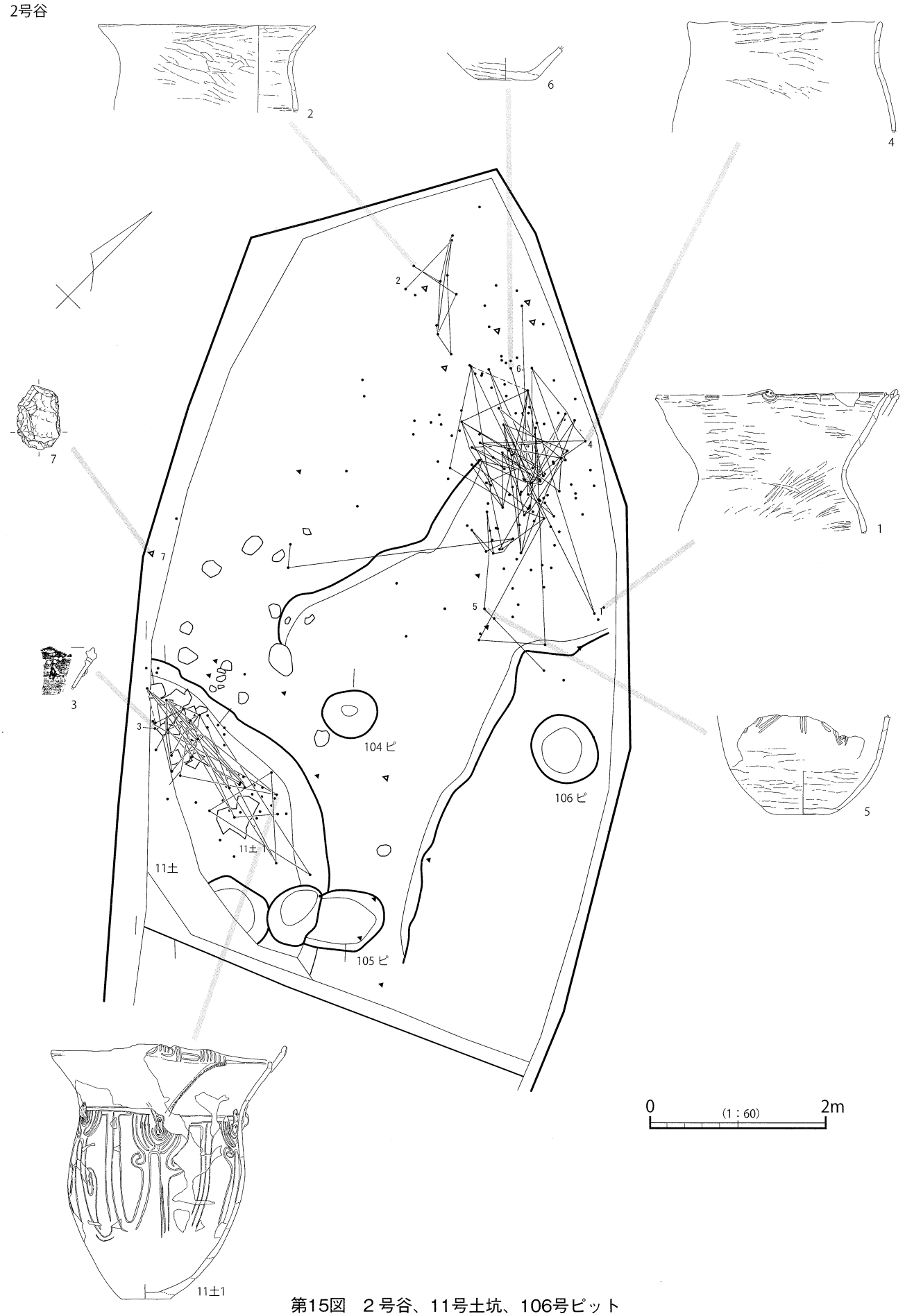
1号谷、1～3号畝、62～74号ピット



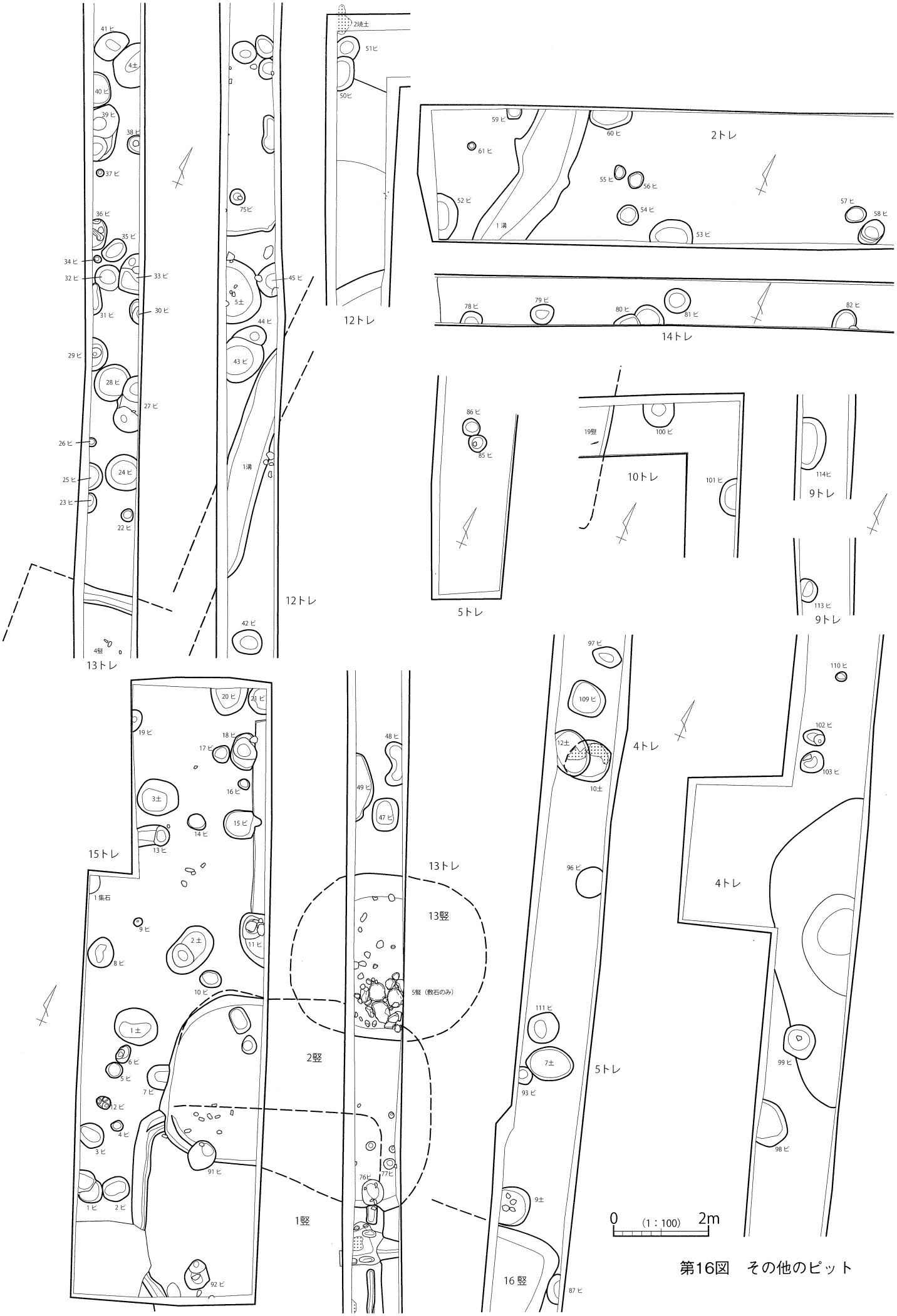
1号谷
1　灰黄褐色粘質土（10YR4/2）　水田層。
2　暗褐色土（7.5YR3/4）　水田床土。やや粗。錆粒多。
3　暗褐色土（10YR3/3）　やや粗。褐色小ブロック含。
4　褐色土（7.5YR4/3）　上層は錆色の強い褐色土。下層を中心に砂層堆積。小礫含。
5　黒褐色土（10YR2/2）　黒色味強。ロームブロック含。きめ細かい。
6　暗褐色土（10YR3/3）　確認面。ローム粒・小ブロックやや多。
7　灰黄褐色土（10YR4/2）　畝状遺構下層。6層類似。

0　(1：60)　2m

第14図　２号溝、１号谷、１～３号畝、62～74号ピット

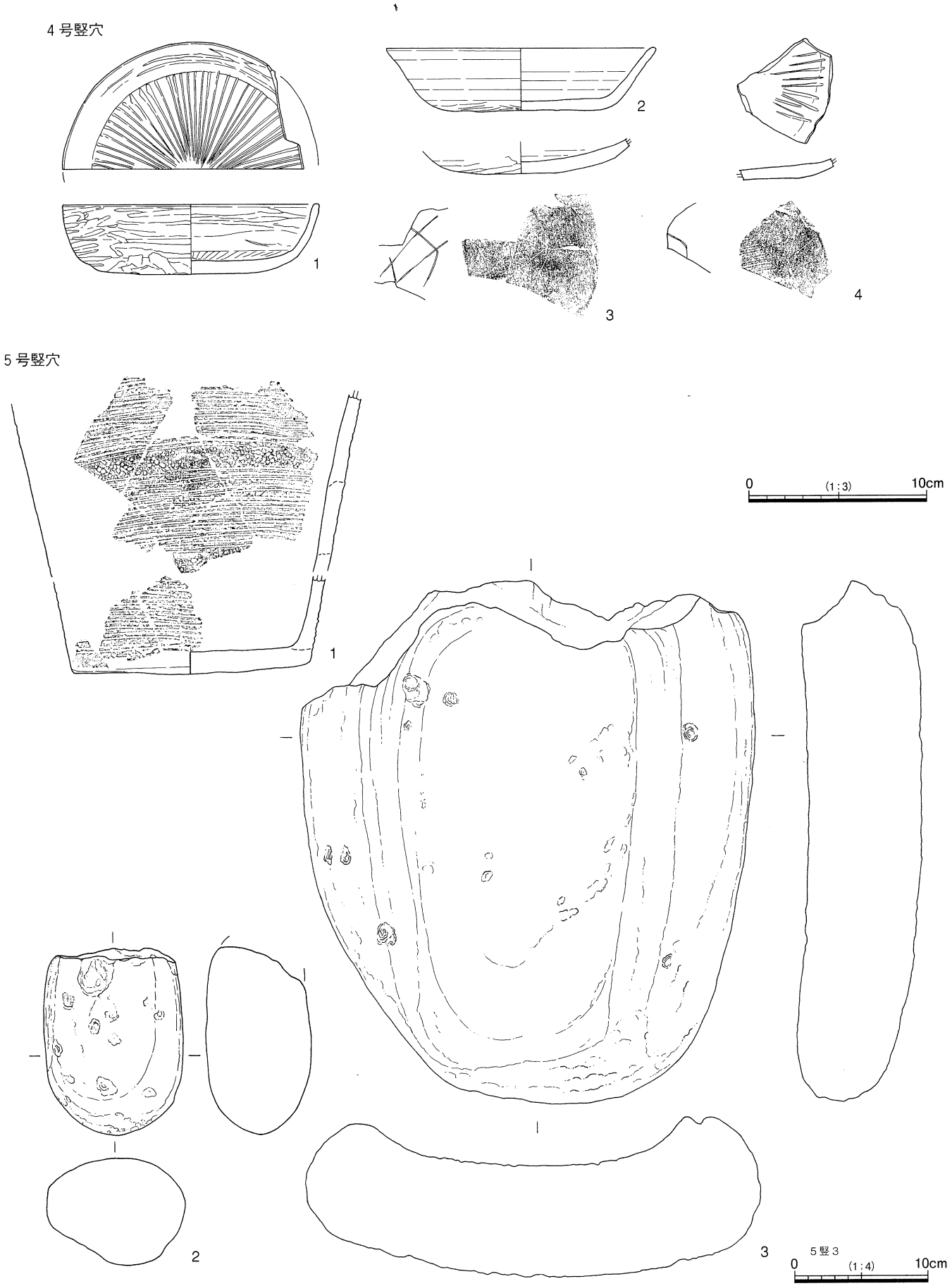


第15図　２号谷、11号土坑、106号ピット

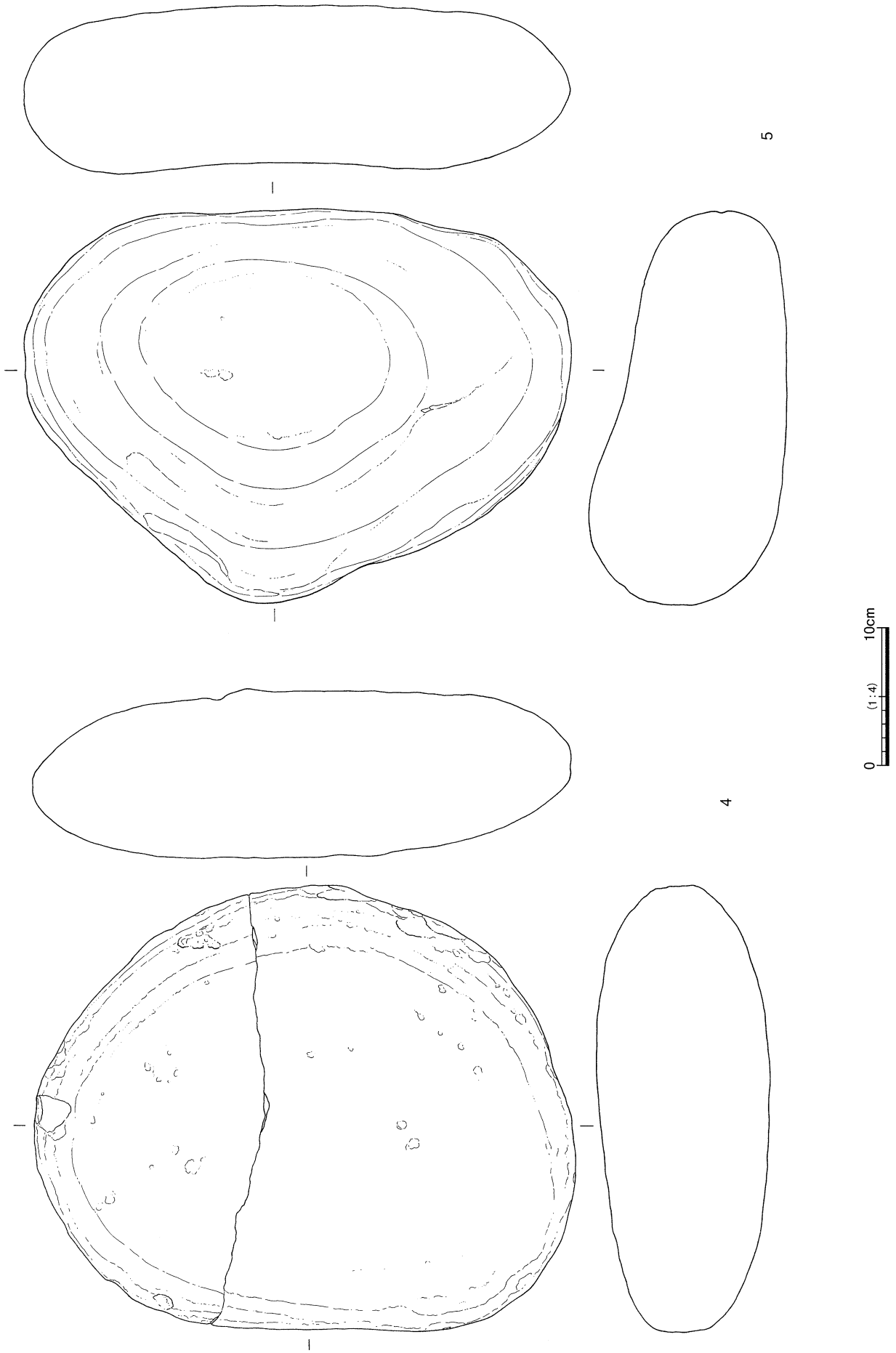


第16図　その他のピット

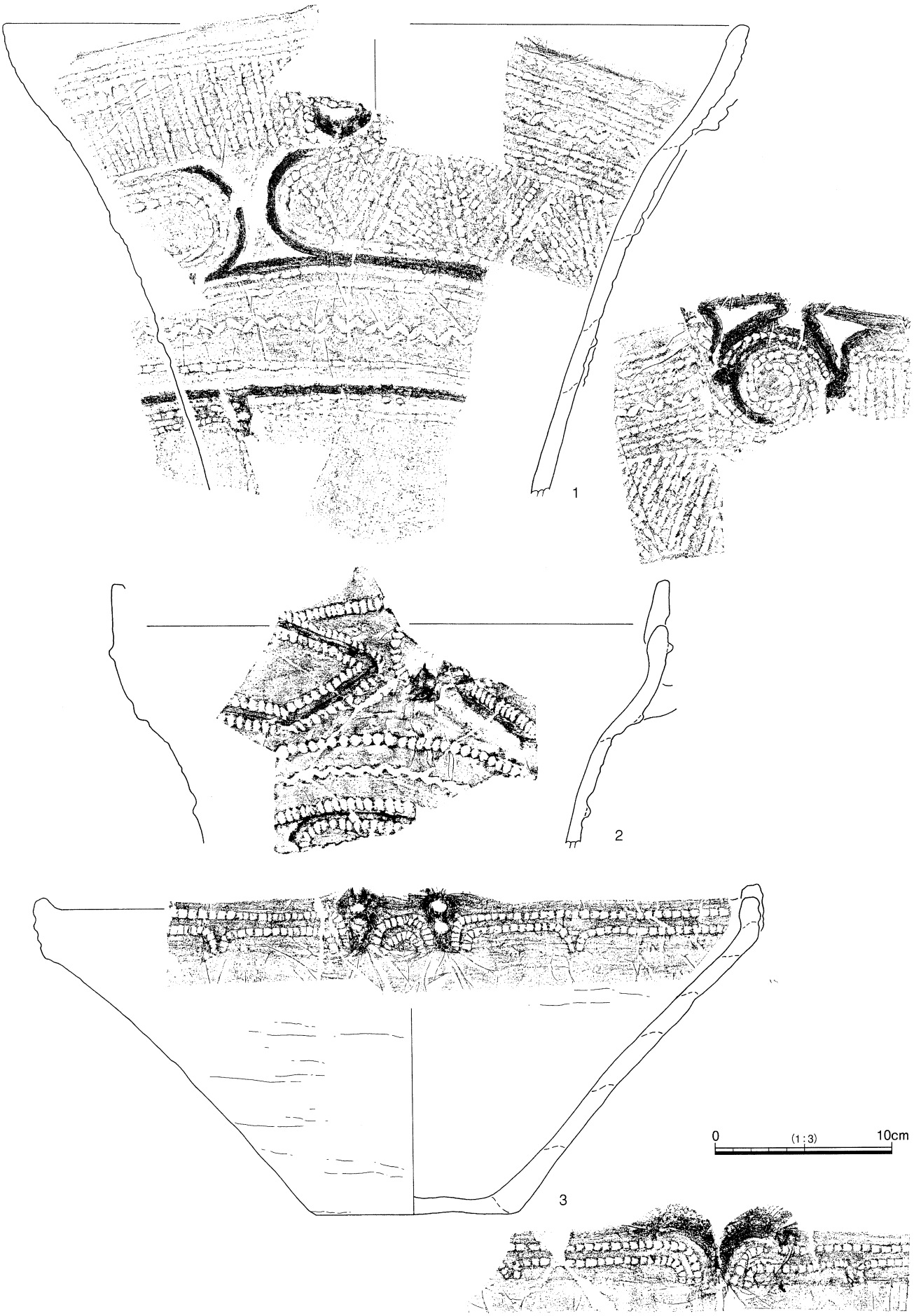
第17図　1～3号竪穴遺物



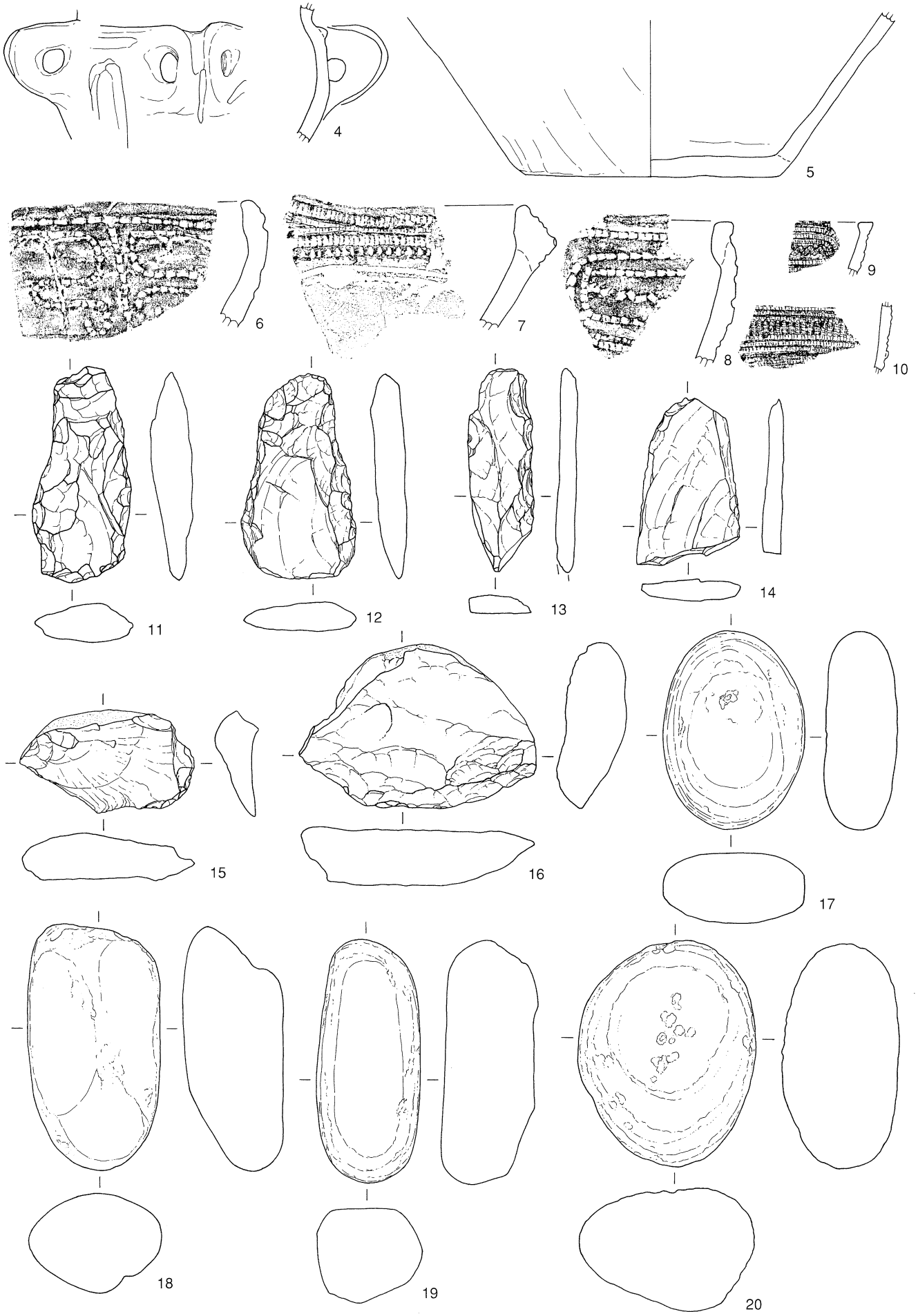
第18図　4号竪穴、5号竪穴(1)遺物



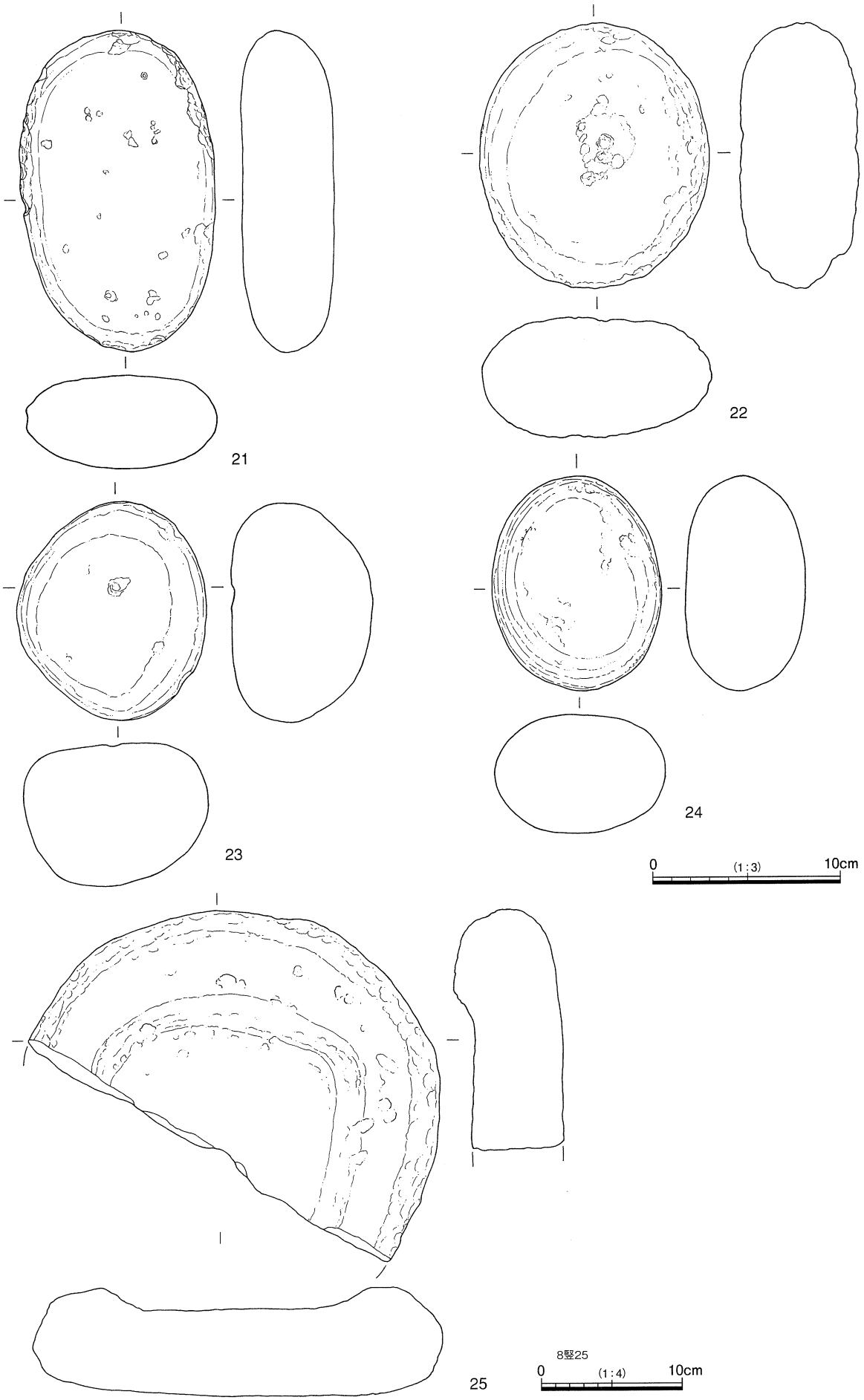
第19図　5号竪穴(2)遺物



第20図　8号竪穴(1)遺物

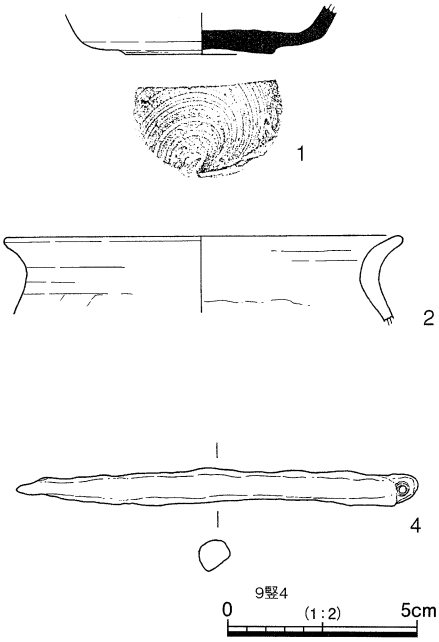


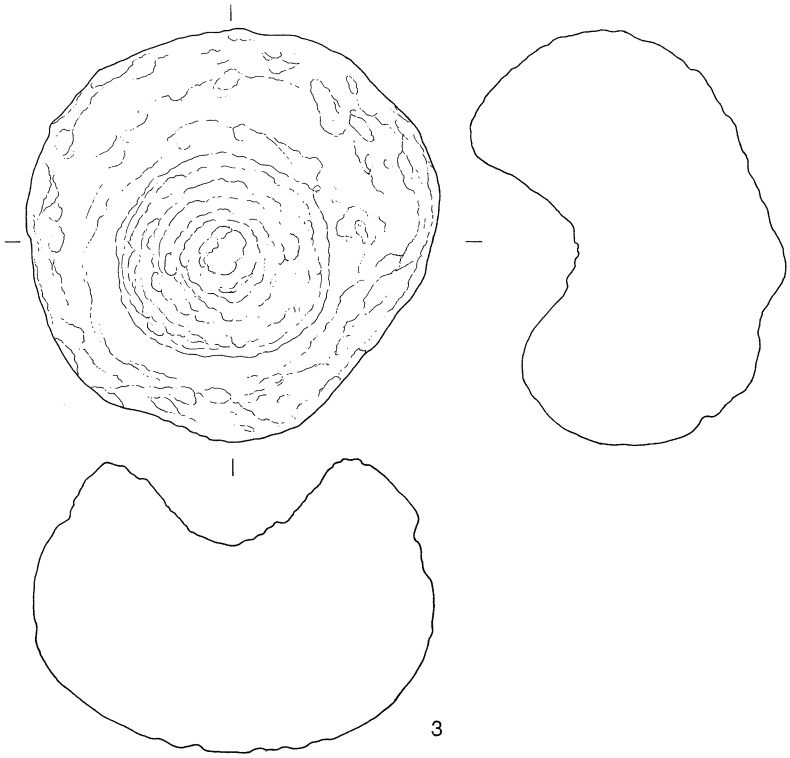
第21図　8号竪穴(2)遺物



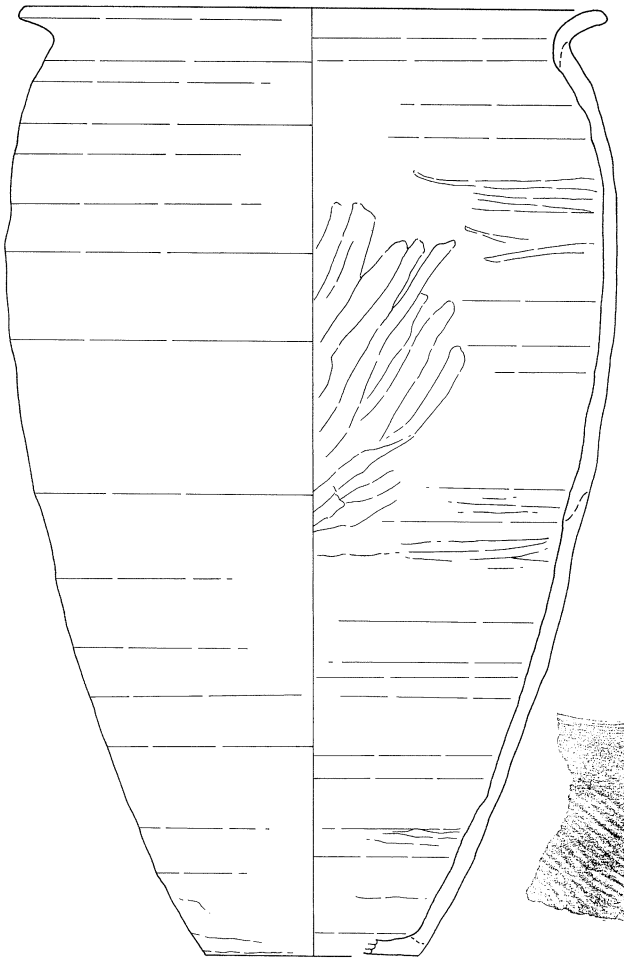
第22図　8号竪穴(3)遺物

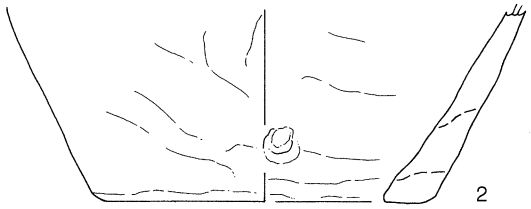
9号竪穴

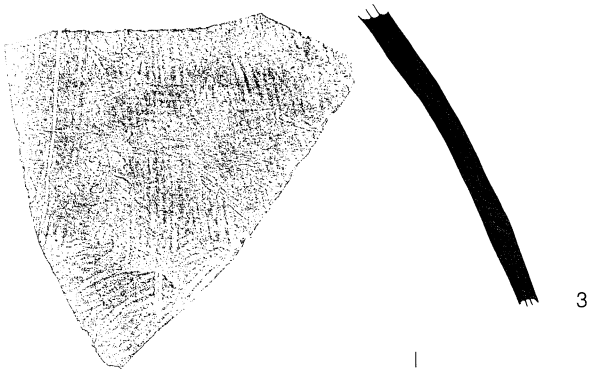


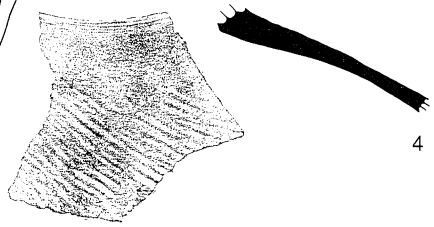


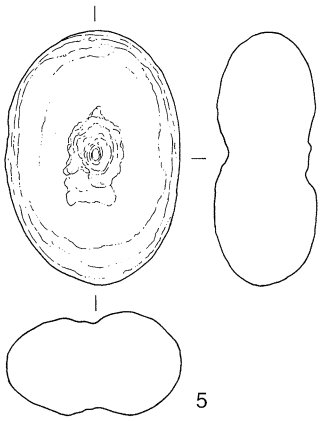
10号竪穴





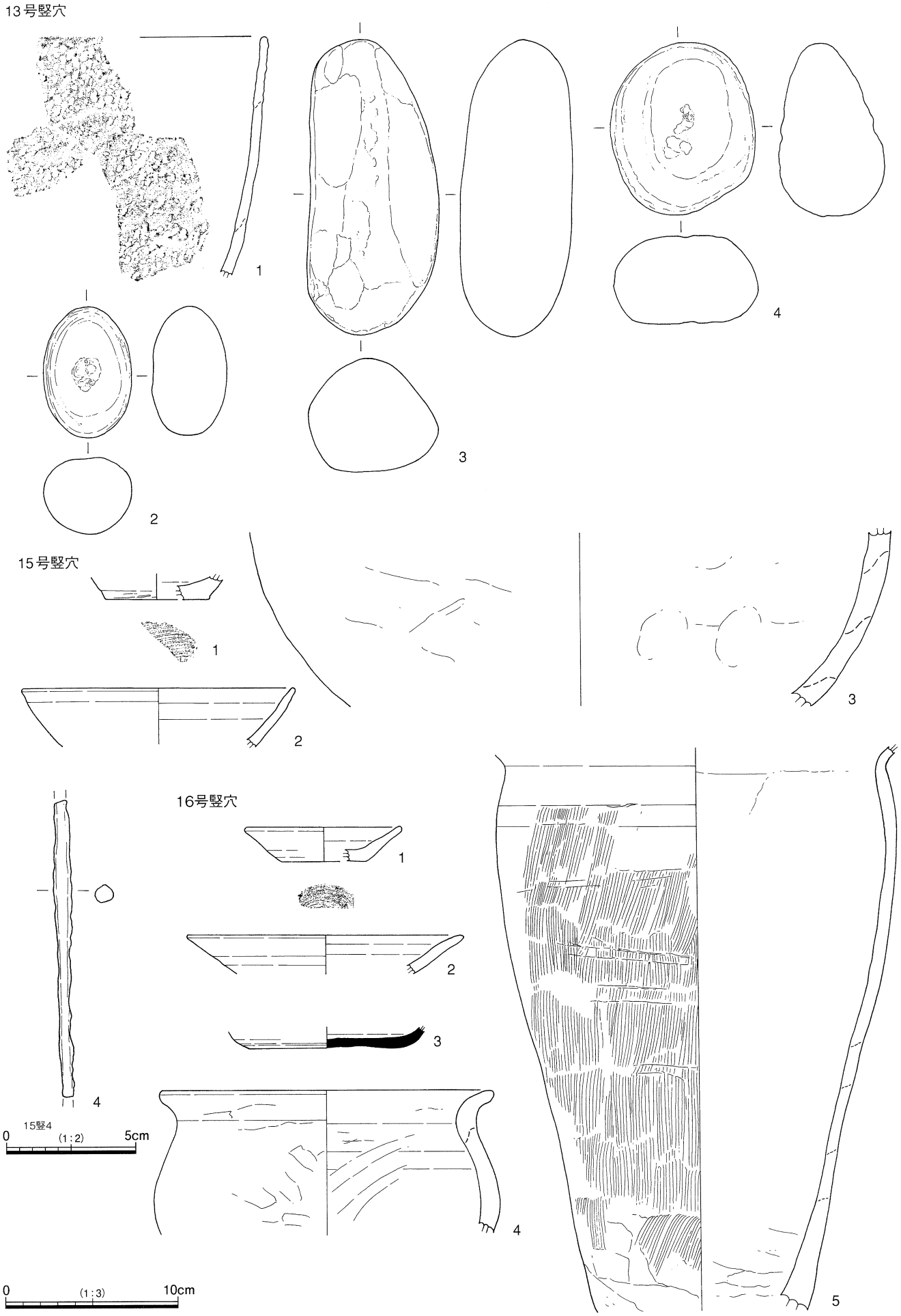




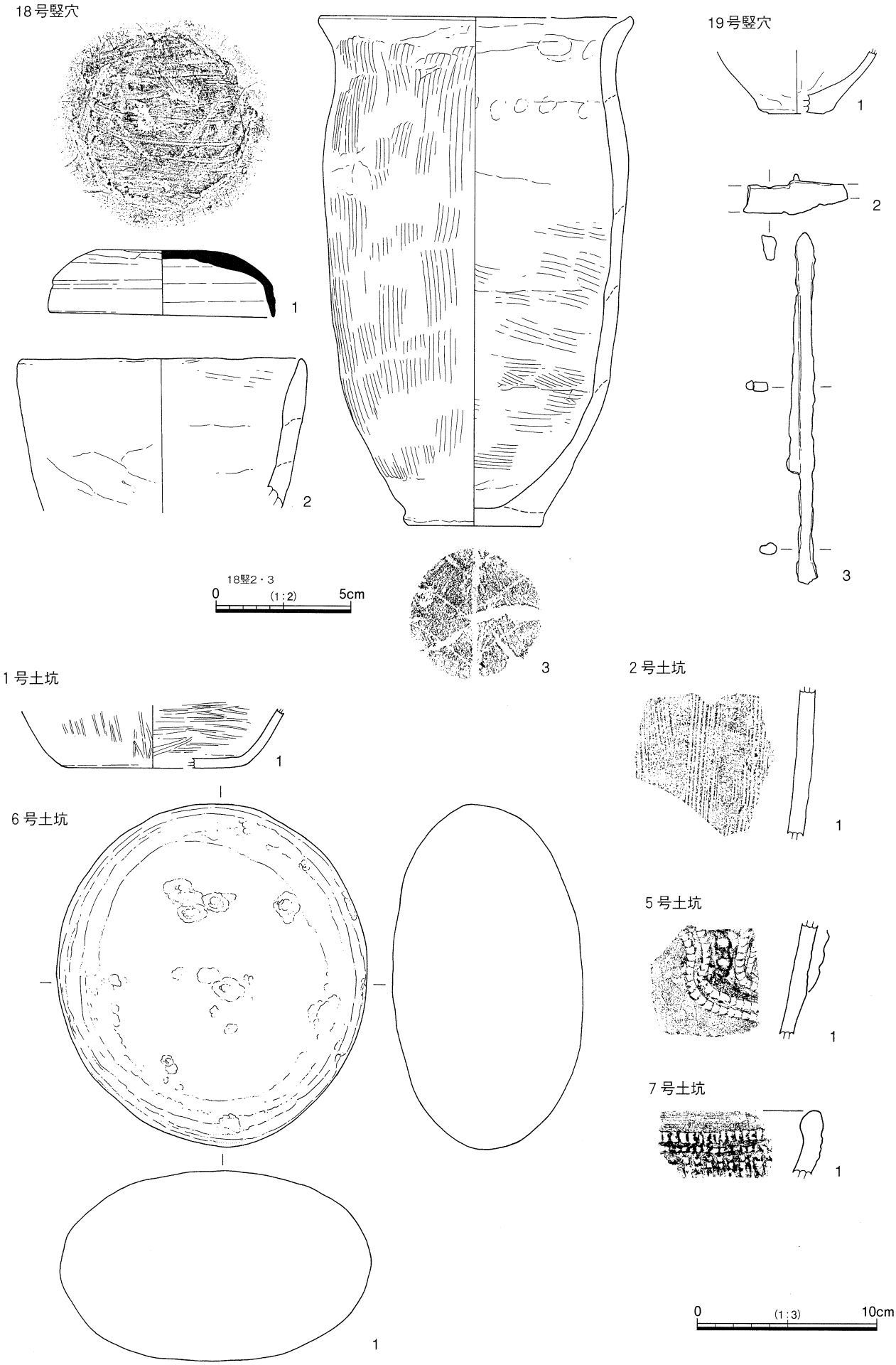


0 (1:3) 10cm

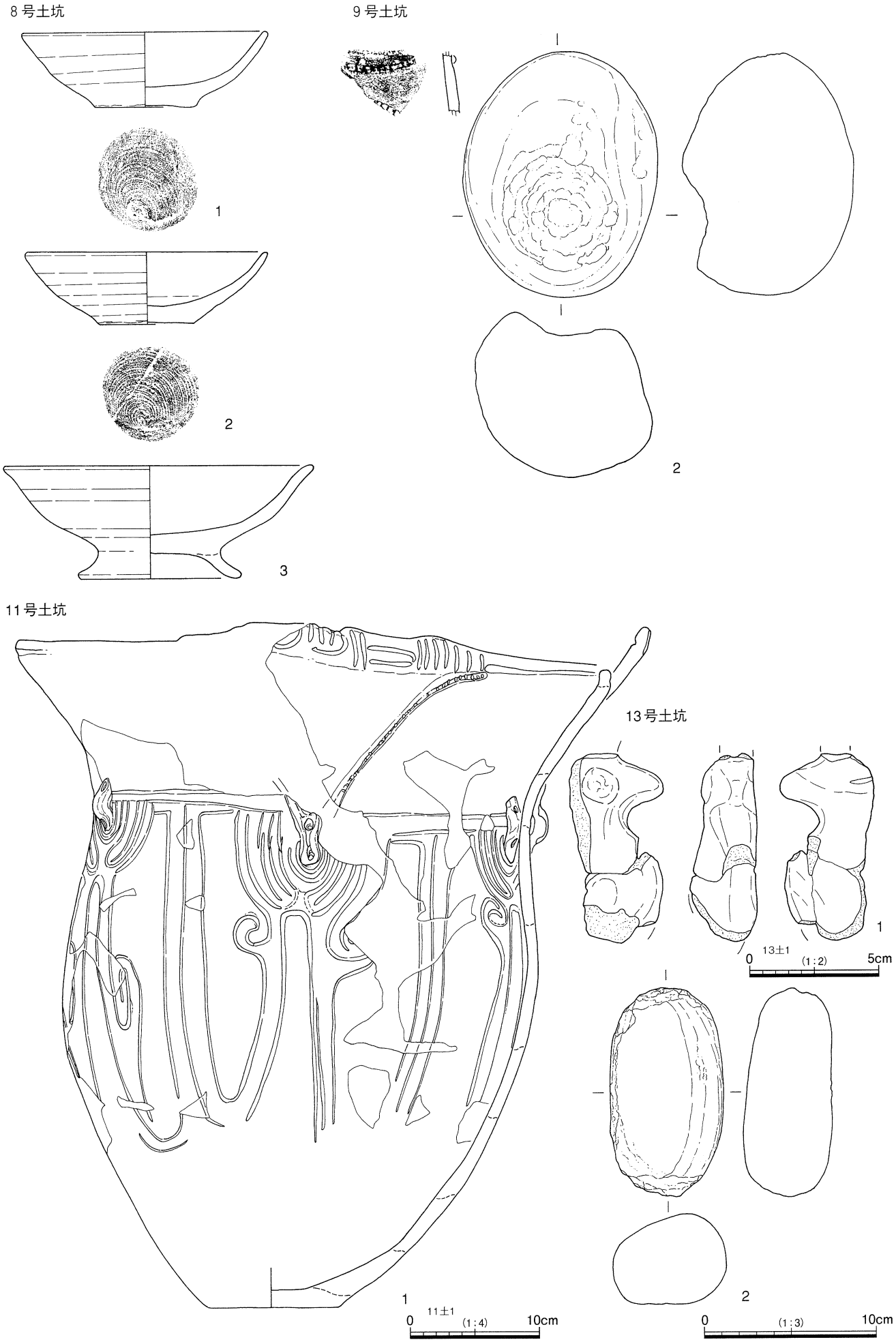
第23図　9・10号竪穴遺物



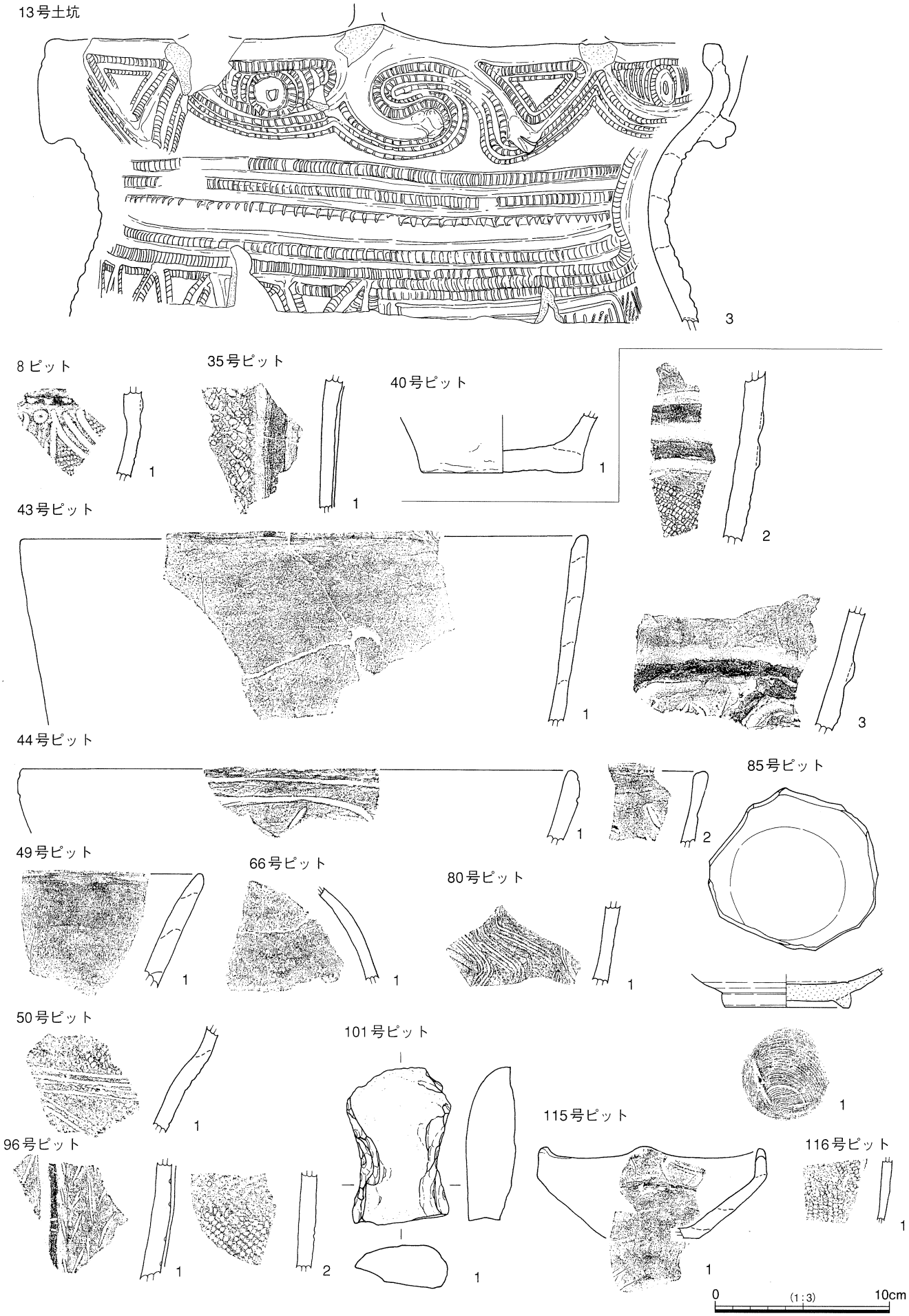
第24図　13～16号竪穴遺物



第25図　18・19号竪穴、1・2・5～7号土坑遺物

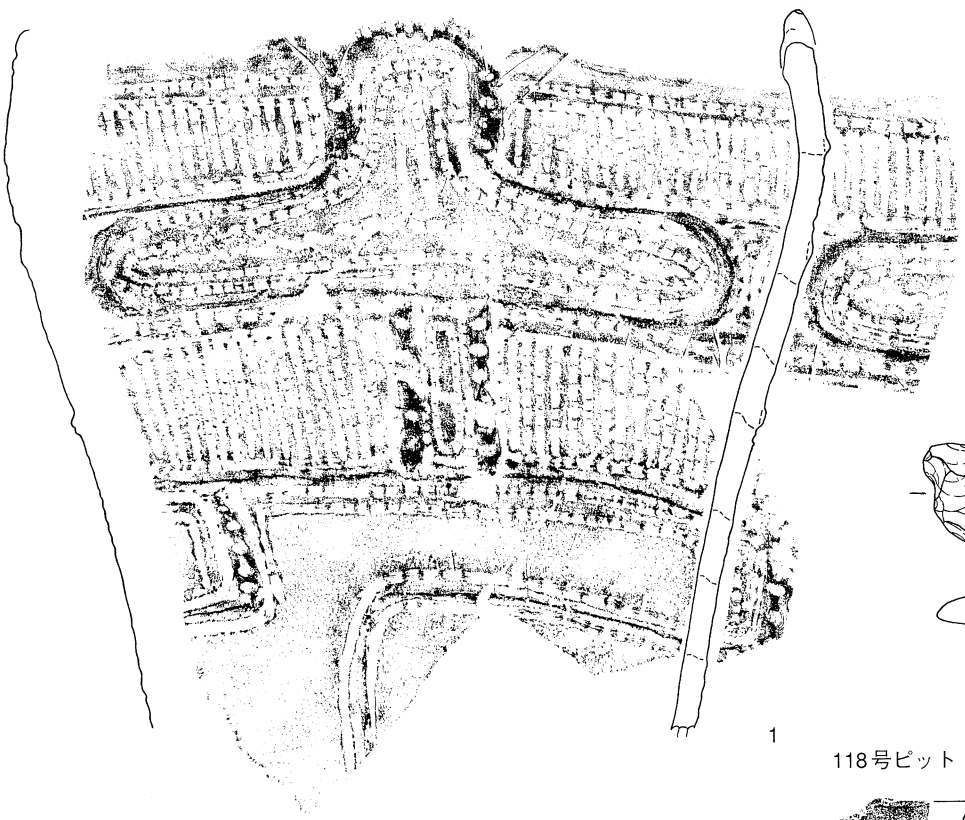


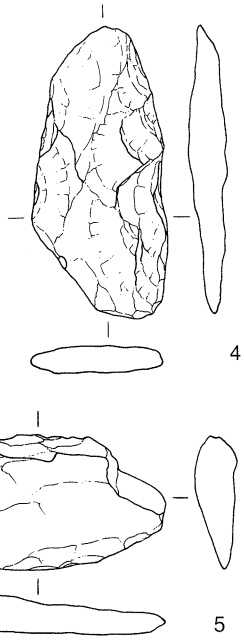
第26図　8・9・11号土坑・13号土坑(1)遺物

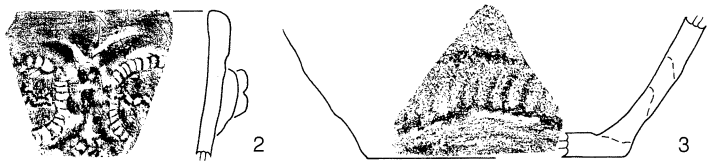


第27図　13号土坑(2)、8・35・40・43・44・49・50・66・80・85・96・101・115・116号ピット遺物

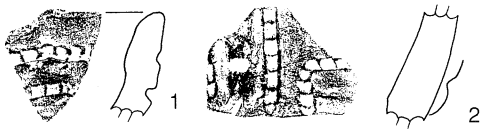
117号ピット



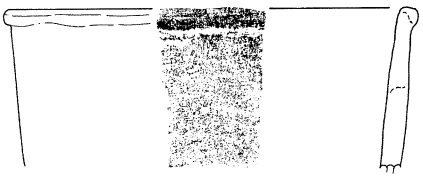


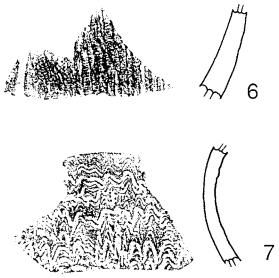


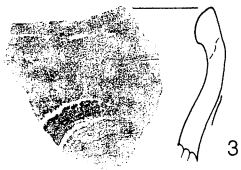
118号ピット

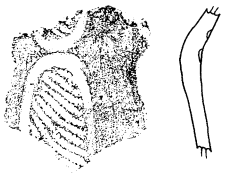


1号溝

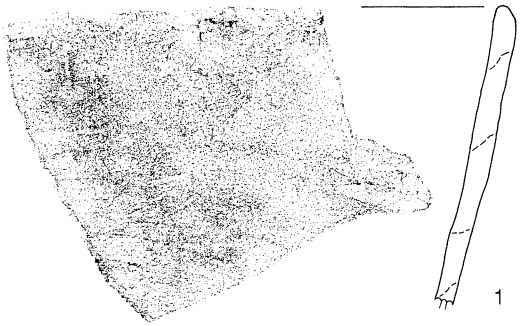


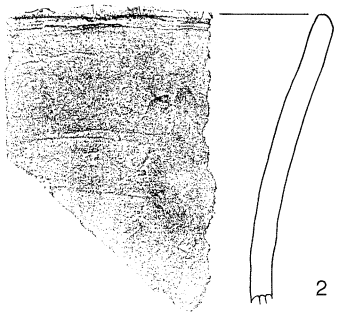






2号溝



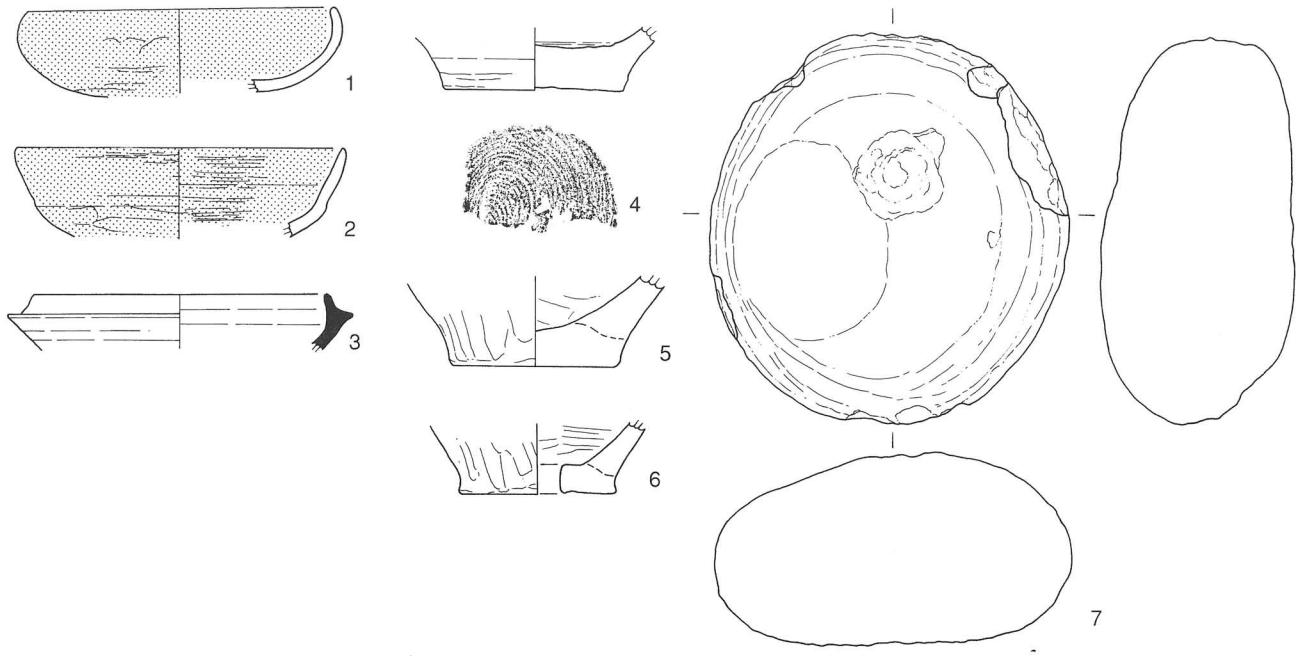


3号溝

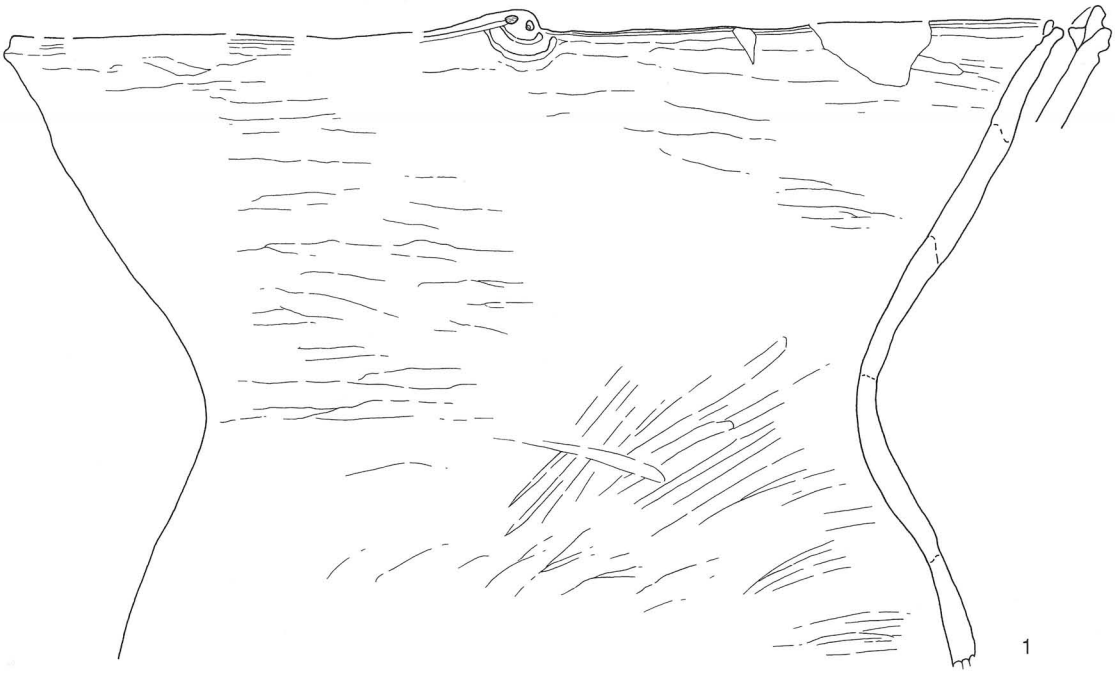
0 (1:3) 10cm

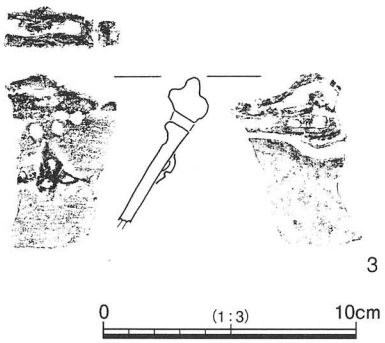
第28図　117・118号ピット、1～3号溝遺物

1号谷

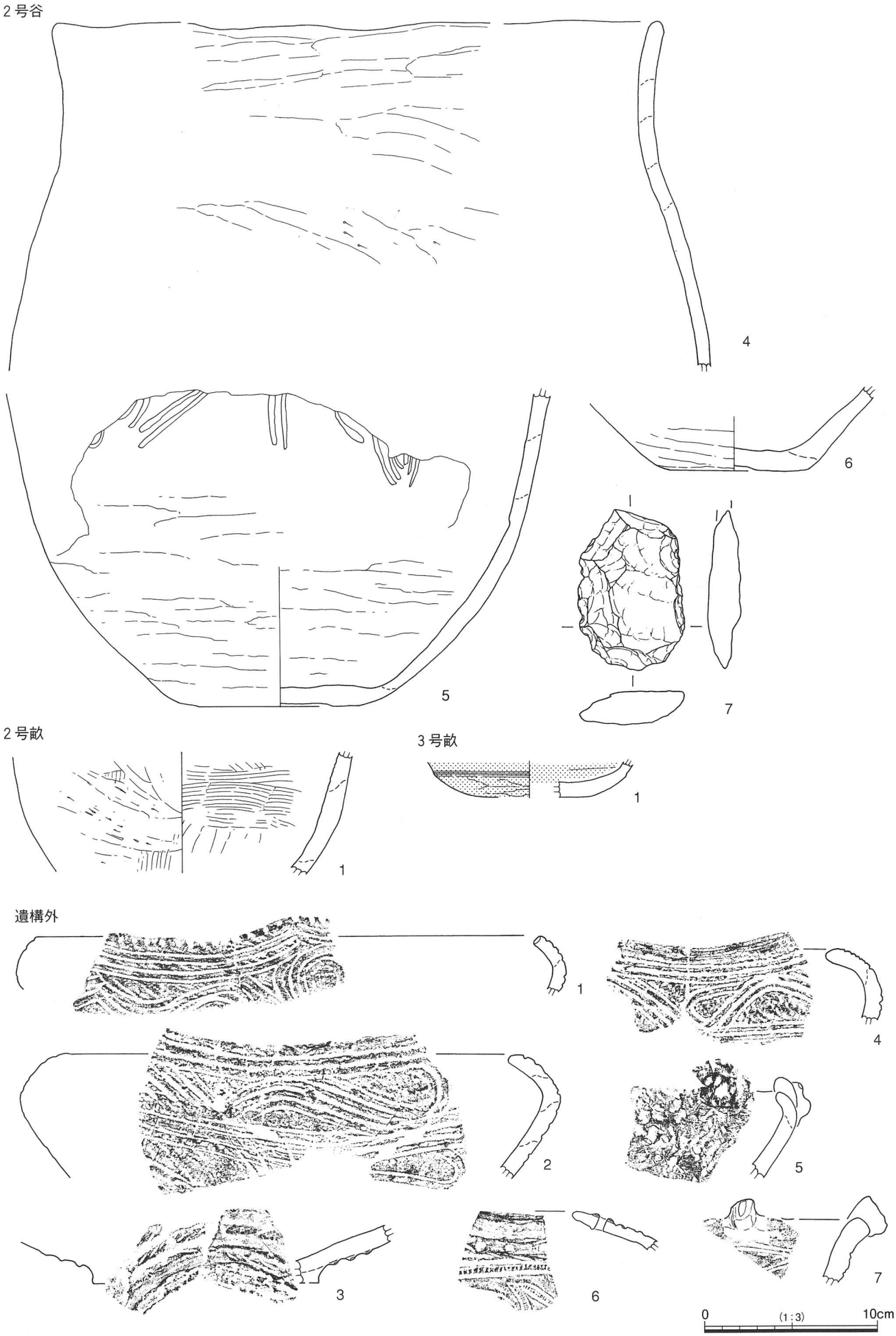


2号谷

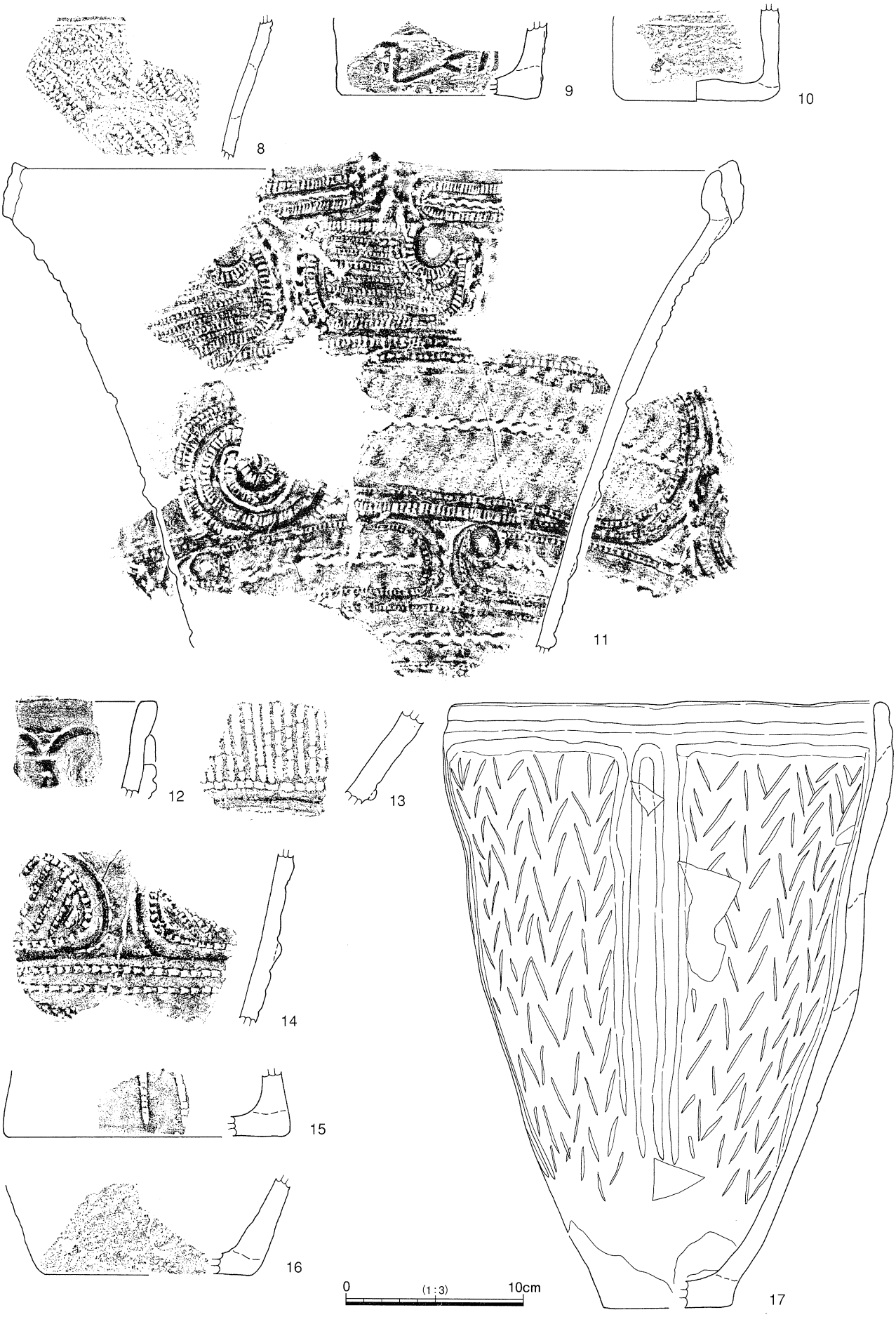




第29図　1号谷・2号谷(1)遺物

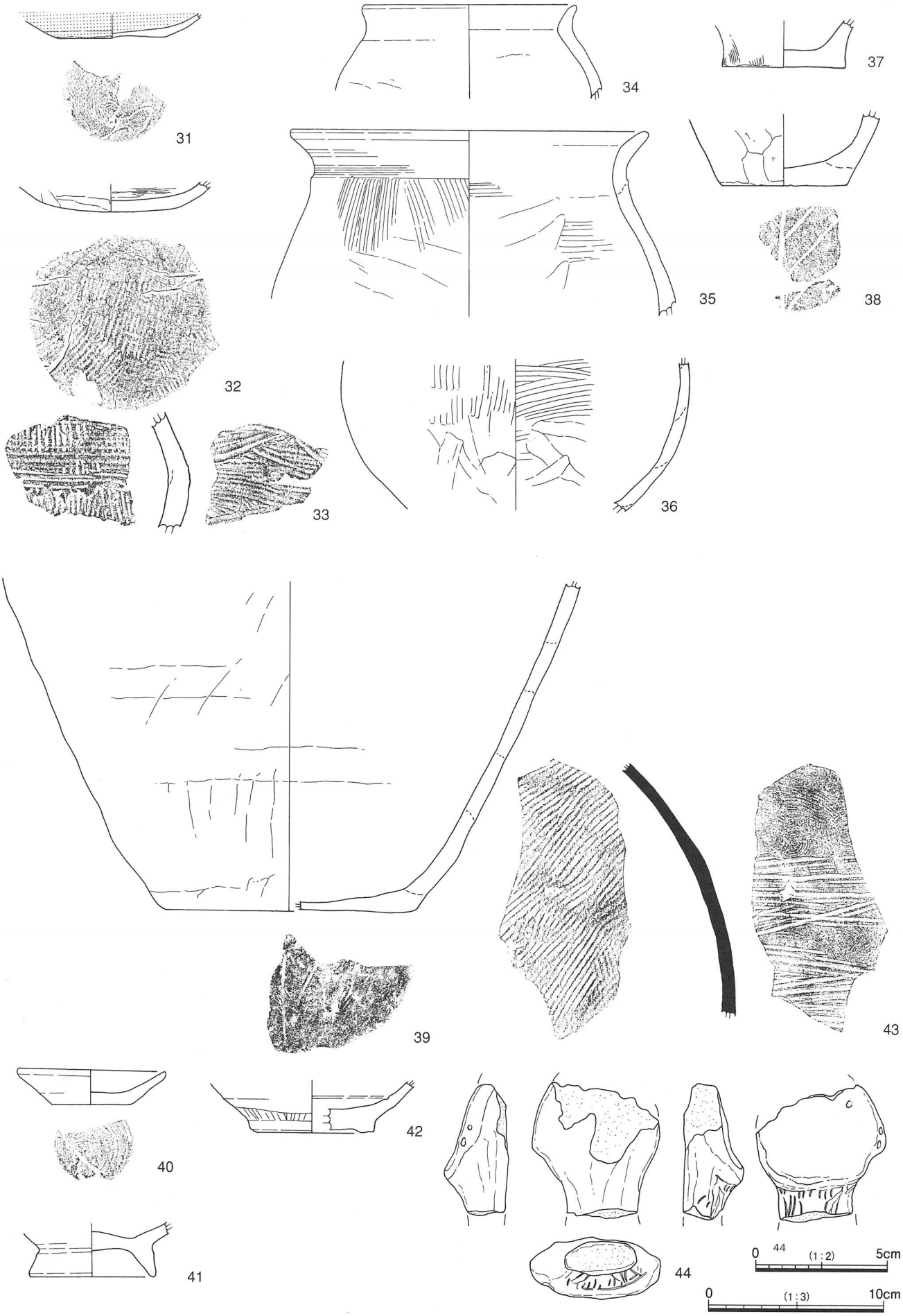


第30図　2号谷(2)、2・3号畝、遺構外(1)遺物

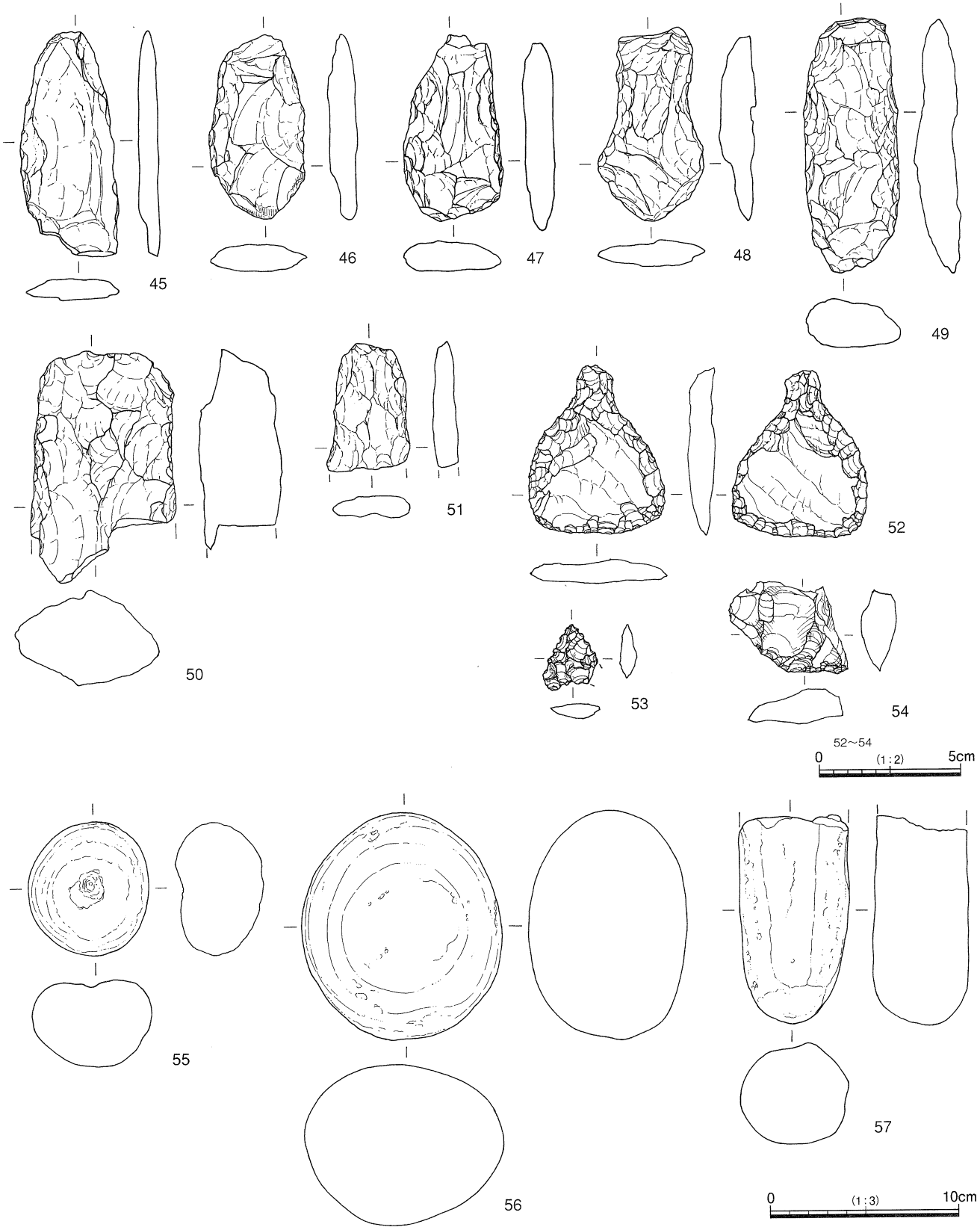


第31図　遺構外(2)遺物

第32図　遺構外(3)遺物



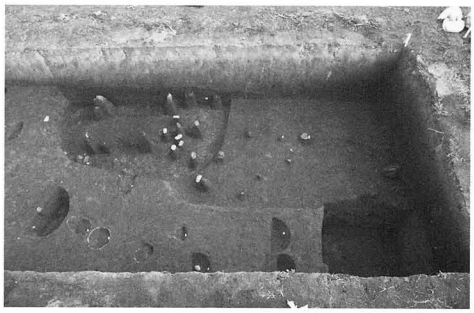
第33図　遺構外(4)遺物



第34図　遺構外(5)遺物

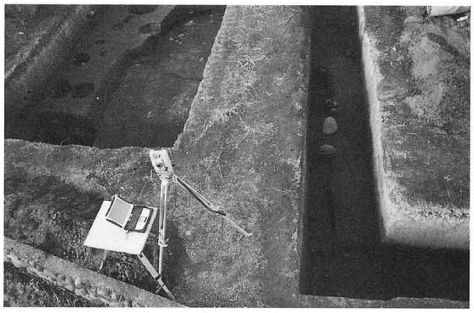
1　調査区全景（南東より）

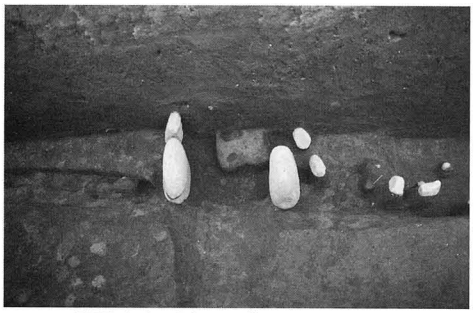
2　調査区近景（南東より西方向）


3　1・2号竪穴遺物出土状況（西より）

4　1・2号竪穴完掘状況（南より）

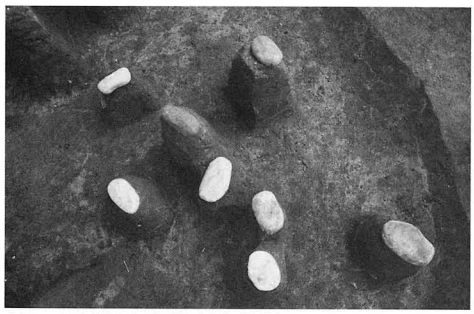
5　1号竪穴柱穴検出状況


6　1号竪穴全景（南より）


7　1号竪穴竈（上より）

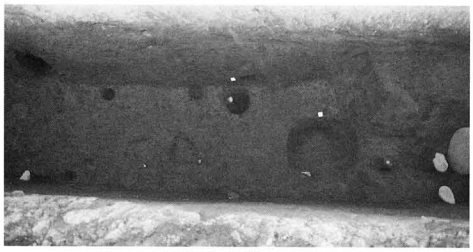
8　1号竪穴竈完掘状況

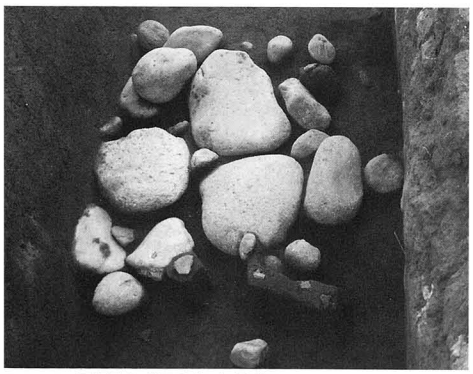
9　2号竪穴遺物出土状況（西より）

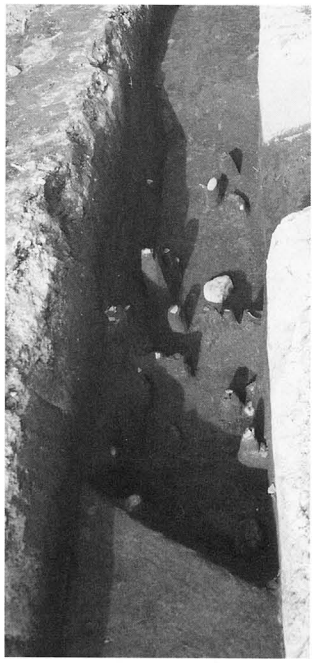

10　2号竪穴内礫出土状況

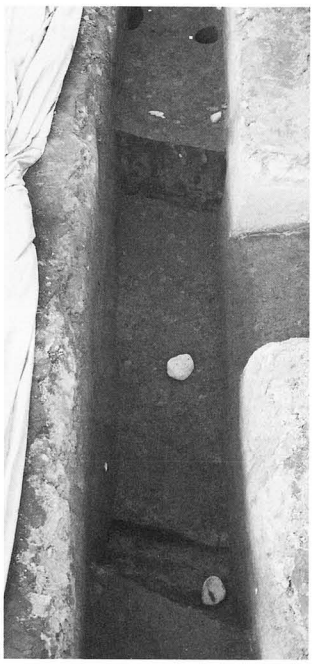
11　2号竪穴掘り方完掘状況（西より）

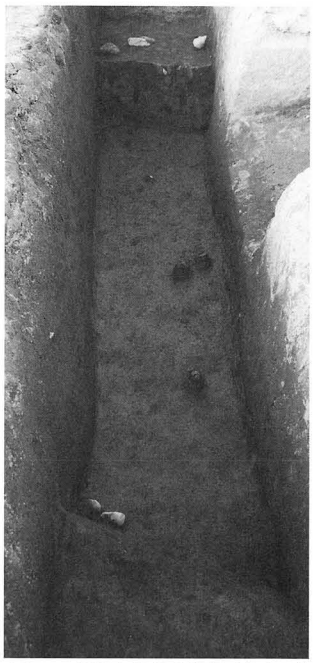
12　3号竪穴遺物出土状況


13　13号竪穴遺物出土状況


17　5号竪穴敷石出土状況


14　4号竪穴遺物出土状況（南より）


15　4号竪穴完掘状況

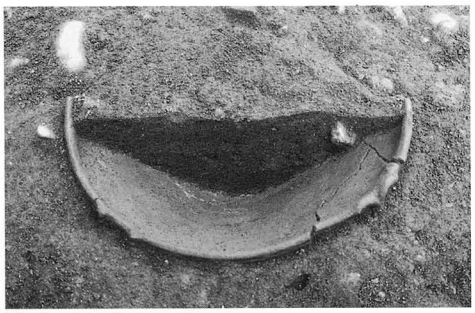

16　4号竪穴掘り方状況（南より）

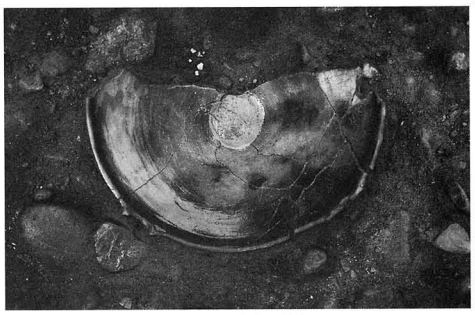
図版２

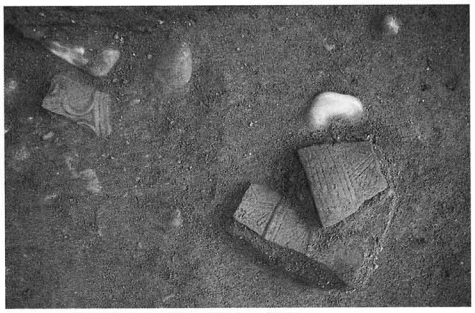
1　８号竪穴完掘状況（南より）

2　８号竪穴完掘状況（北東より）

3　８号竪穴遺物出土状況（北より）


4　８号竪穴炉体土器内半截状況


5　８号竪穴炉体土器完掘状況


6　８号竪穴内遺物出土状況

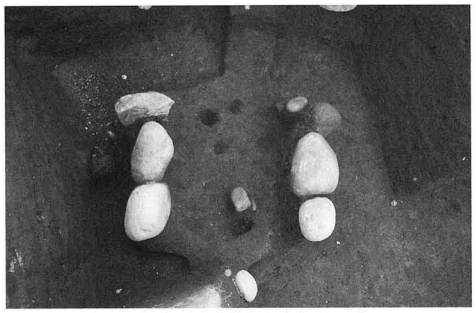
7　８号竪穴調査風景

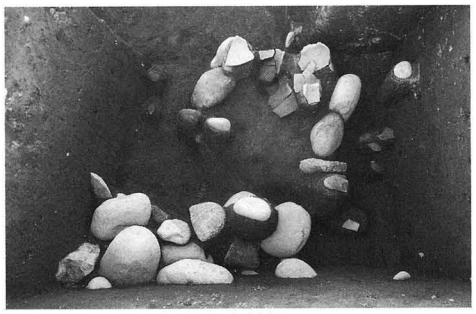
8　９号竪穴遺物出土状況（西より）

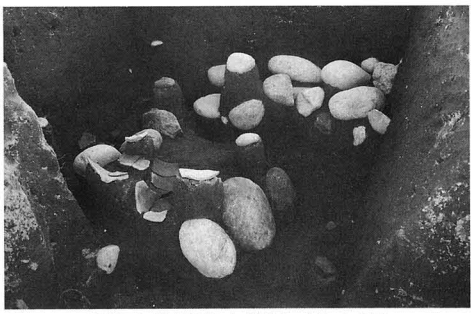
9　９号竪穴遺物出土状況

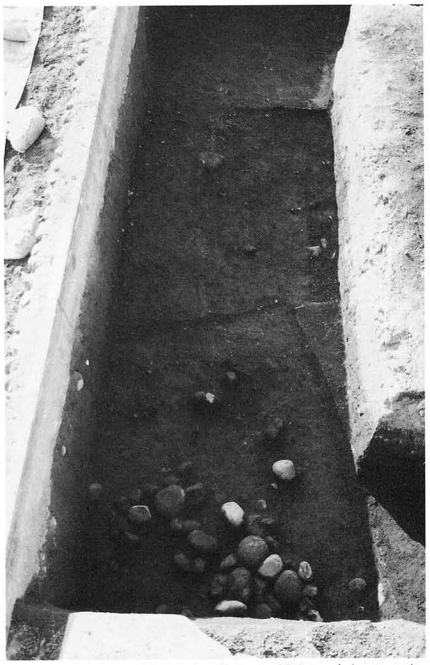
10　９号竪穴内鉄製品出土状況

11　９号竪穴完掘状況（西より）

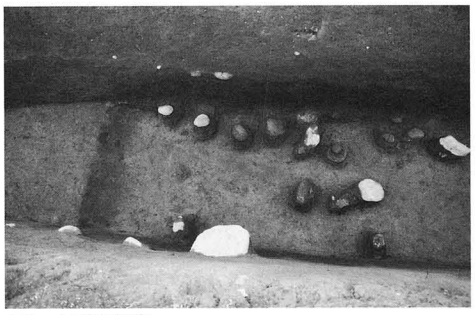

12　10号竪穴竈完掘状況（南より）


13　10号竪穴竈礫出土状況


14　11号竪穴竈礫出土状況（北より）


17　14・15号竪穴礫出土状況（東より）

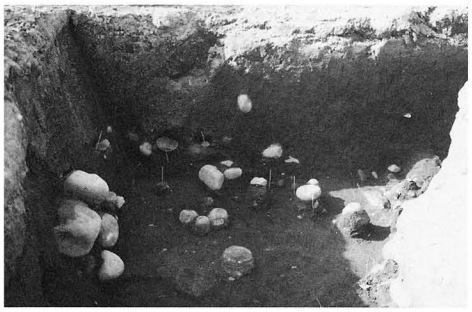
15　12号竪穴


16　13号竪穴

1　15号竪穴礫出土状況

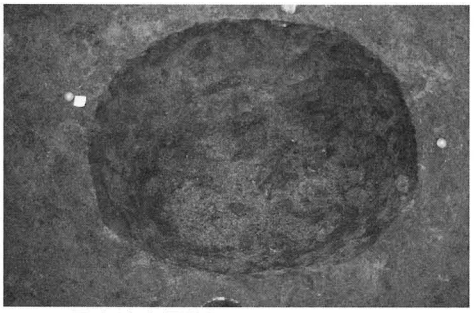
2　16号竪穴礫出土状況

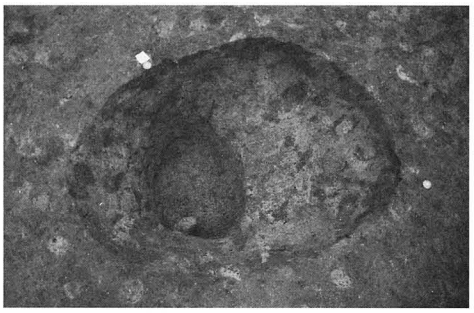
4　18号竪穴内甕出土状況

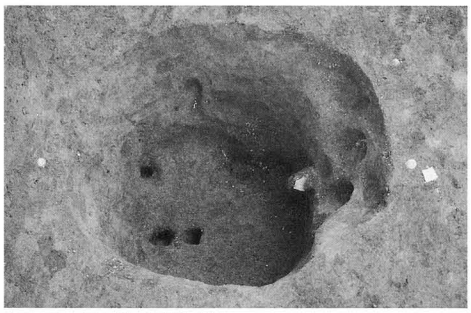

3　18号竪穴遺物出土状況

5　19号竪穴遺物出土状況

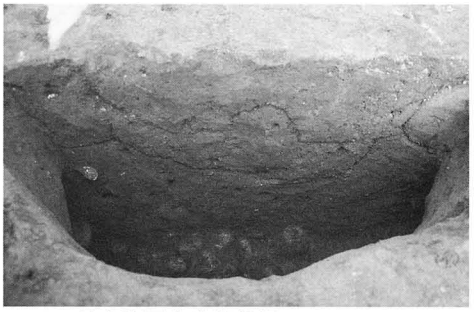
6　19号竪穴内鉄製品出土状況


7　1号土坑完掘状況


8　2号土坑完掘状況


9　3号土坑完掘状況

10　6号土坑（北より）


11　7号土坑覆土半截状況

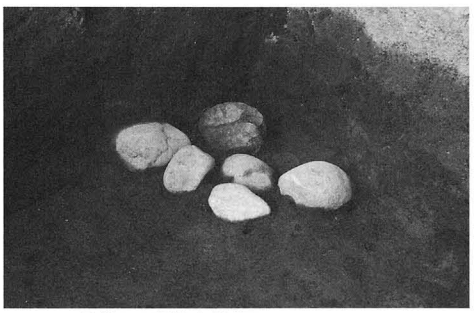
12　8号土坑土師質土器出土状況

13　10号土坑完掘状況

14　13号土坑土器出土状況

15　13号土坑出土土器

16　13号土坑礫出土状況


17　1号集石礫検出状況

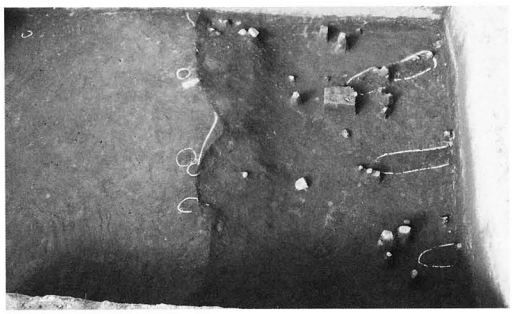
図版４

1　11号ピット礫出土状況

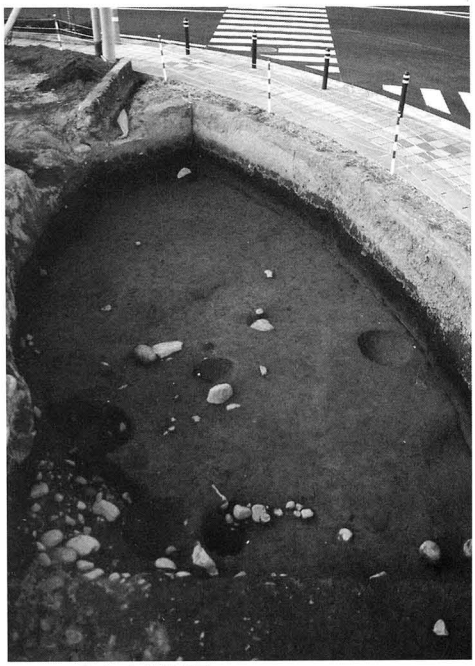
2　３号集石礫出土状況

3　３号集石半裁状況（南より）

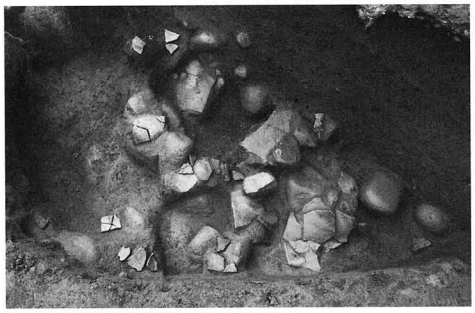
4　３号集石完掘状況



5　１谷内１～３号畝確認状況



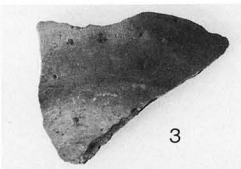
6　２谷内完掘状況

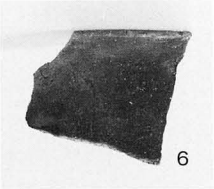


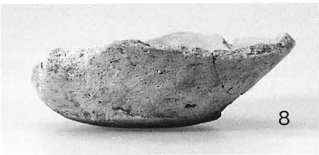
7　11号土坑遺物出土状況

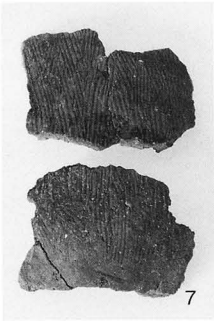
8　２谷調査風景

１竪



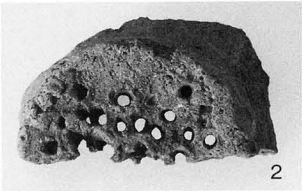




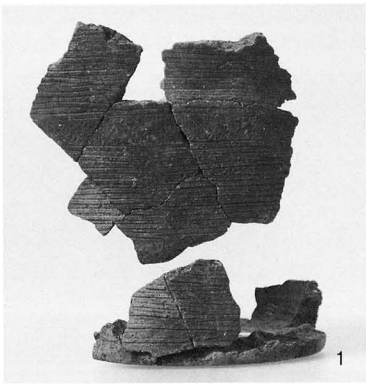


２竪

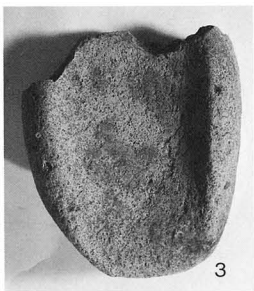
３竪

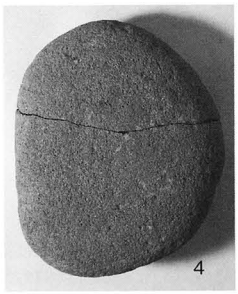


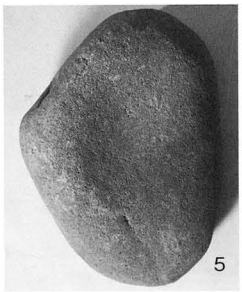
５竪



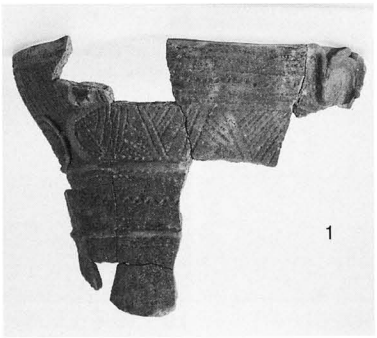
４竪

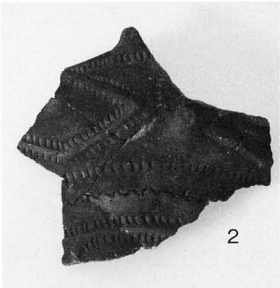






８竪

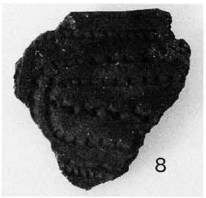




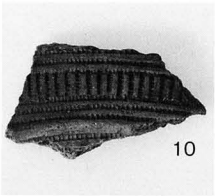
8竪

3

6


8

9

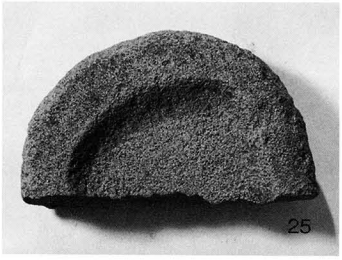

10

11

12

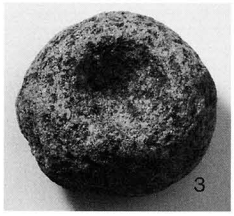
14

13

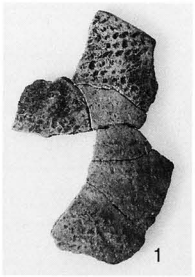

25

9竪

4


3

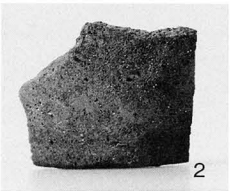
13竪

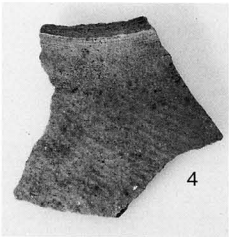

1

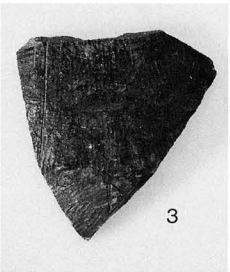
3

10竪

1


2

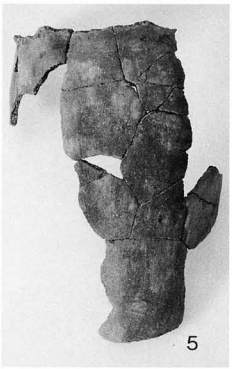

4


3

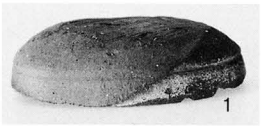
16竪

1

4


5

18竪


1

3

19竪

2

3

8土

1

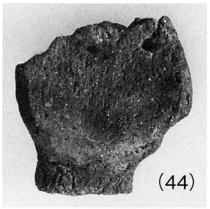
2

3

遺構外

11

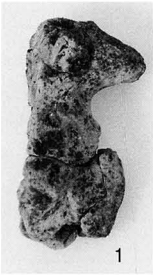
44


(44)

9土

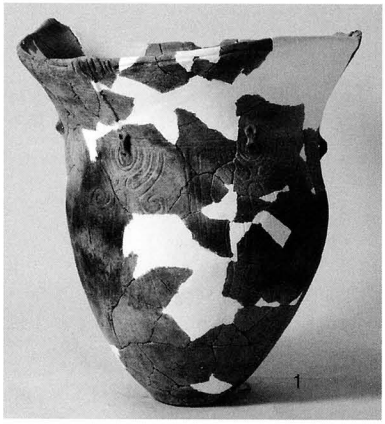
2

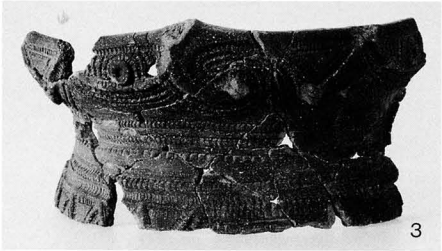
13土


1

(1)

11土

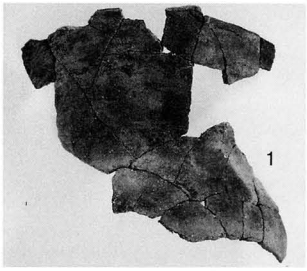

1

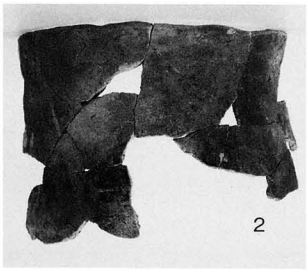

3

17

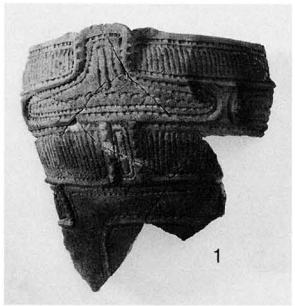
29

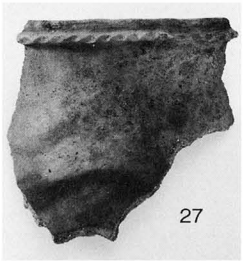
2谷


1


2

117ピ


1


27

報 告 書 抄 録

ふりがな	うしろだどうのまえいせき
書名	後田堂ノ前遺跡
副書名	コメリH&G藤井店建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	櫛原功一・松元美由紀・高橋敦
編集機関	財団法人 山梨文化財研究所
所在地	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL 055－263－6441
発行年月日	2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
うしろだどうのまえ 後田堂ノ前	やまなしけんにらさきしふじいまちきたげじょう 山梨県韮崎市藤井町北下条262-1番地ほか	19207	F-37	35° 43′ 40.460″	138° 26′ 46.202″	2007年11月14日～2008年1月31日	635	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後田堂ノ前	集落跡	縄文前・中・後、弥生後、古墳後、平安	竪穴住居・土坑・集石土坑・溝・畝	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器	縄文中期狢沢式期の竪穴住居・土偶・配石遺構・集石土坑

要約	塩川低位段丘面の微高地上にあり、縄文時代前期から平安時代まで断続的に利用された集落遺跡。縄文時代前期諸磯式期と考えられる竪穴、中期狢沢式期の竪穴、後期前半の包含層、竪穴の可能性のある土坑があり、時期不明ながら屋外貯蔵穴として袋状土坑 2 が検出された。弥生時代後期の竪穴1、古墳時代後期の竪穴1のほか、平安時代（9世紀代）、平安末の竪穴が存在。

後田堂ノ前遺跡

—コメリH&G藤井店建設に伴う発掘調査報告書—

平成21年(2009) 3月31日　発行

編　集　㈶山梨文化財研究所
〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場 1566　TEL 055－263－6441

発　行　韮崎市教育委員会・株式会社コメリ・㈶山梨文化財研究所

印　刷　㈱帝京サービス